

演劇会議

■ 「再び『地域に根ざした』ということ」について
 …………… 廣 渡 公 一 …… 1
 第2回演劇大学のもたらしたもの …………… 黒 沢 参 吉 …… 12
 「ひしめきあり不毛の季節から」研究 …………… 栗 原 省 …… 18

□ マクシム・ヴァレンティンとの対話 …… グドルン・クラット
 千 田 是 也・訳 …… 22
 関西における戦前プロレタリア演劇の研究誌
 …………… 大 岡 敏 治 …… 33

■ 劇団通信 …………… 42
 「演劇教室」10年間と私 …………… 山 田 昭 子 …… 61
 「劇団息吹」誕生のこと …………… 田 中 実 …… 65

■ 劇 評
 「海が騒いのは空のせいさ」(中野勲演) …… 城 谷 護 …… 69
 劇団四紀会家族劇場を観て …………… 浅 野 良 二 …… 71
 手さぐりのリアリズム(東演中部プロダクションの上演をみて)
 …………… 丸 子 礼 二・藤 本 昭 …… 73
 観劇雑感 …………… 萩 坂 桃 彦 …… 76
 戯 曲 旅 立 ち …………… 小 島 真 木 …… 81



中国料理

浜松華勝楼

本 店 浜松市有楽街 TEL (0534) 53-6532・6534
 サゴ-店 浜松市モール街 サゴ-プラザ地階
 西 武 店 浜松市鍛冶町 西武デパート地階
 天 竜 店 浜松市西鹿島 天竜オークラ・ボール内
 食品工場 浜松市馬込町 231

'77 東り演第2回演劇大学 受講者84名

2月11日～13日・於 大宮 八重垣荘

■全体会（初日） 講演者・米倉斉加年氏



■第3分科会（舞台美術） 左端後姿・園 良昭氏



(写真提供・劇団新芸 鹿角優一氏)

「再び「地域に根ざした」ということ」 について

猿渡公一（福岡現代劇場）

(1) あまりにも原則的な理念

地域に根ざした演劇創造ということが、東西り演で叫ばれ始めてすでに数年がたちました。確かにこの理念あるいは教条（このことばは、演劇会議二八号の「演劇創造上の課題としての観客」という栗原氏の西り演セミナーでの講演要旨の頭の部分にあります。すでに栗原氏是否定的な意味でこのことを書いているのですが……）は、私たちの活動に指標を与え、一定の、というより、明らかに有効な役割をはたしました。

田中内閣による日本列島改造論が、誰の眼にもはっきり見える形で、私たちの住む地域の自然を破壊し、公害、災害をまきちらし、地域の荒廃を押し進めていました。『地域に根ざす』という発想は、当然、私たちの生活

と権利を守り民主的な地域自治を確立する要求とかたく結びついて、きわめてわかりやすく、原則的で、決定的な意味を持つようになされたのです。そのことは現在も変わっていないし、やはり、きわめて原則的なことだと思われまます。しかし、あまりにも、当然すぎるのだと信じたために、私たちは、このことを単なる理念なり教条としてしまったのではないかと気になります。

いま、私たちの福岡現代劇場が、はづかしながら突きあたらざるを得なかったいくつかの点について考えてみたいと思います。

(2) ある手紙のこと

ちょうど一年前、私たちは、こばやし・ひろしの「豚」に取りくんでいました。その

稽古途中での「演出家から俳優への手紙」がありますので、まずこの手紙を紹介いたします。

演出家から俳優への手紙

いま僕たちは、こばやし・ひろしの「豚」に取組んでいる。先日僕は、この作品の登場人物のそれぞれが一九七〇年代の日本の現実（政治・経済・文化）の総体を批評している、向い合っていると云った。登場人物たちは日本そのものと闘っているというわけだ。

このことは、この作品を作品たらしめる為に基本的に重要なことなのでもう少し考えてみたいと思う。

僕はいま、岩波新書の「同時代のこと」——ヴェトナム戦争を忘れるな——吉野源三郎著を読んでいる。僕がいくつかの発見をしたこの本の中から引用しながら僕の考えを書いてみる。

『「現実を喰いこむ」などという言い方をしたのは、ロシア革命に対するリードの追り方が、学問的認識とはおよそ異ったものであったからであり、それにも拘らず、あれほど、ロシア革命の現実を的確に捉え且つ見事に再現していたからである。』世界をゆるがした十日間が史書というより

は報道文学の部類に入るものであるように、ここに捉えられているのは、ロシア革命という現実の歴史的事件の文学的リアリティだといってよいのである。しかも、文学的リアリティの追究がこれほどまで歴史の現実の核心に迫りうるということ

は、当時、理論的な学問に没頭していた私の注目を惹かずにはいなかったのである。

その後、私は、マルクスがバルザックの小説を愛読し、ルイ・ブランその他の著述家のすべてよりも、バルザックにおいて、一八一五年から一八四八年に至るフランスの歴史をよく学ぶことができるという、バルザックの大胆さと作家的公正とを激賞しているのを知った。エンゲルスもまた、ミナ・カウツキー宛の手紙の中でバルザックのリアリズムを褒め、バルザックが政治的には王統派であり、心情においては没落してゆく貴族階級に深い同情を抱いているが、十九世紀の前半、成り上り者の町人階級が貴族を圧倒して支配階級にのしあがってゆく過程を誰よりも正確にその作品に写して、エンゲルス自身、職業的歴史家や経済学者のすべてよりも彼に学ぶところがあつた。と書いている。兩人とも、二

月革命前のフランスの現実が、いかなる歴史家や学者の研究よりもバルザックの小説に、最も正確に捉えられていると認めているのである。』(同書P32/P33)

『リードの場合には、なんとといっても、歴史的事件の記録である。ところが、バルザックの場合には、現実の事件や人物の記録ではなく、純然たるフィクションなのである。しかもフィクションによって描き出されたものが、時代や国境を越えた人間性などという超歴史のものではなく、はっきりと一八一五年から一八四八年に至るフランスの歴史の現実だ、とまでいわれているのである。このことは、歴史の現実の把握が、必ずしも歴史学的認識には限らないということを意味している。少なくともバルザックほどの巨匠の場合には、文学的リアリズムの眼を通して社会的・歴史の現実の本質に迫ることが可能であると、マルクスやエンゲルスは認めていたといつてよいであろう。』(同P34)

ここで、僕たちの現実把握について検討したいのだ。すくなくとも僕たちは演劇創造におけるリアリズムを標ぼうしている。そこで、まず問題になるのは、僕たち自身

り、歴史にかかわる僕たちの態度が受身で固定的だということに問題がありそうな気がする。

『現在の否定しようもない現実性に支えられて、過去は過ぎ去った現実として捉えられるのである。このようにして捉えられた過去が、記憶として私たちの現在の意識の中に保存され、同様に、未だ現実とならないが来らんとしているものとして未来が私たちの期待の中に捉えられる。そして、現在は疑いようもない明証性をもって、私たちの直覚の中にあられるのであるが、期待も直覚も記憶も、共に現在における意識であつて、その統一の意識の中で、過去・現在・未来の三つの契機をもつ時間が、一つの時間として私たちにによって捉えられているのである。いうまでもなく、この時間の上に、私たちの生活が、既成の過去から不確定な未来へ向つての運動として、自覚をもつて展開されているのである。その意味で、私たち人間の統一した本来的な在り方を求めれば、それは、やはり行動の中にあり、実践の中にある、といわねばならないし、現実性というものも、窮極においてここに成立すると考えねばならないであ

の現実把握の姿勢なのだ。ところが僕たちは現実そのものを見ないで、現実がマルクス主義の諸概念や唯物史観の公式にあてはまりさえすれば、すべて解明されたように思つて安心してしまつていたのではないだろうか、現実を喰ひ込まないで「史的唯物論なぞり」という一種の観念論に陥つていたのではないか、——現実を感性的にとらえないで、現実を解釈して公式にあてはまれば安心してそれで終りとするのであれば、僕たちは何も見なかつたと同じである。——

僕たちは、脚本を手にする。そして、脚本を分析し、解釈して公式にあてはめる。うまくあてはまるはずである。少くともその脚本はその理由でえらんだのだから。あとは、どうすればこの解釈を舞台にうまく形象できるのかを考え、その作品上演の社会的意味づけを明確にすれば終りである。なんと、スタテックな現実把握だろう。

これでは、すべての作品を、そして作者がつかまつた現実を、自分自身の位置にまで引き下げてしまう。しかもその自分自身は現実とはかわらずに、ただ、現実をな

がめているだけなのだ。当然、創造者には自分が知っている現実以外の何の発見もない。そこでは観客も、何の発見もしないし、衝撃も受けない常識的な舞台ができあがる。現実、総体として、全存在としてとらえられないで、存在に先行する公的觀念領域のなかに押しこめられてしまつてい

るのだ。僕たちが言う創造とはそんなことなのだろうか、創造するというのは、僕たちが未来を探りとりとする行為なのではないのか。そして未来を探りとるその行為のためにこそ僕たちは歴史を学ぶのではないか。

しかし、力不足の、決して立派ではない、霧の中に立ち迷よう僕たちが、どうして現実の深い森の中で未来への道を発見し得よう、それこそ観念論だと君たちは言うだろう。しかし、その道がはつきり見えなくとも、僕たちが必死で未来への道を探りとりとする行為が舞台で展開されるのでなければ、観客の側は、知りすぎた現実の矮小化された一部分を再確認させられるに止まるのだ。

一体、なぜ、僕たちの現実把握がこのようにスタテックになるのだろうか。やは

ろう』(同書P45/P46)

現在僕等が曖昧になるのは未来が見えないからだ。これははつきりしている。しかし僕たちが生きていくとき、未来が見えないからといって決定をしないわけにはいかない。僕たちは常に行動の選択をしつづけなければならぬのだ。そして、その時、不確かながらある種の期待をもって、ある種のカケをも含めてその決定をしているのだ。生きるという行為の中で僕たちは現実とどのようにかわらざるを得ない。(以下省略)

このような劇団内部の手紙をあえて最初に引用したのは、地域に根ざすという私たちの発想の中に、ここに書いたのと全く同じように、受身の、現状肯定的なものがあるのではないか、という私の強い危惧があるからなのである。

昨年八月開催された西リ演の総会で、仲氏は次のような問題提起をしました。

「かつて私達はかたくなといわれるほどに現実変革の、せめ手としてのリアリズム演劇の創造を主張してきました。今日それが現実変革でなしに『現状肯定』の、攻めではなく

「受け身」の創造姿勢に後退していかないか」
そして、劇団未采の森本氏は、「このすごい
現実にも感動もしない自分たち。自分自身が底
のところでは現状肯定的になっている。熱烈に
現状変革をねがう自己が、地域や職場で確実
に息づくのではなく同化し稀薄になってい
る。」というきびしい発言をしました。

私もそう思います。だから、なぜそうなっ
ているのかをもう一度考えてみたいのです。

(3) 伝承と創造の場としての地域

一九七四年三月の演劇会議二六号で、栗原
氏が「地域に根ざす」という一文を発表し
ました。私たちは、「地域に根ざす」という
ことの意味をこの論文のおかげで深めること
ができました。しかし、いまにして思えば、
やっぱり充分深めてはいなかったのです。い
ま、私が突きあたっているいくつかの問題点
をこの論文にそって考えてみたいと思いま
す。

「地域に根ざす」という場合の「地域」と
は何かということにふれて、同論文には、次
のように書かれています。

「地域に根ざす」ということは何よりも

本来的に、すぐれて文化的概念であり、マス
コミ文化に対し、祖先から口承し伝承されて
きた文化、芸能をつぎにうけつたえていく、
そういう場、民衆の地域文化が創造されてい
く場である。」

ここで書かれているのは、独自の文化を伝
承する場としての地域であり、民衆の文化を
創造する場としての地域です。私は、伝承を
創造へ発展させる場としての地域と、すんな
り読みとっていました。

しかし、これは、そう単純な問題ではない
ようです。考えてみると文化の伝承という行
為は、本来文化における保守主義の問題なの
です。それは、文化を世代から世代へ慎重に
伝えるべき貴重な遺産として扱う伝統の問題
であり、長い年月かかって発達した独自の文
化の意味をそれ自体価値あるものとして位置
づける方向なのでしょう。

ですから、ある場合にはそれが自らの死を
指すものであってもその行動せざるを得な
い行動の基準とさえなります。つまり、私た
ちが伝承行為の正当性のみを固定的にすえ置
いてしまったときには、歴史に対する私たち
の態度は消極的なものにならざるを得ませ
ん。

れの時代を生きぬく民衆は、その時代の情況
のなかで選択をせまられています。そして行
動を決定するのです。創造者として私たちが
その情況にわが身をおき、その行動決定の真
の動機を探りとうるとき、私たちが自ら
も傷つき、変化し、あがきながらも、その
中から未発見の可能性を発見していこうとす
るとき、私たちは、はじめてその作品上演の
動機を自らのものにするでしょう。

自分は安全な傷つかない地点にいて、歴史
を解釈してみたところで本当の意味で歴史を
学ぶことなどできるはずがありません。せい
ぜい伝達のための技術的なくふうがこらさ
れ、作品の形式主義的傾向はふくらむばかり
ということになります。

ふり返ってみると「女坑夫」の場合、現に
生きている女坑夫（八十才の老婆）に会った
感動が作品を支えてくれたといえます。

彼女は歴史を背負って私たちのこの時代を
生きていました。彼女と出会ったことで、私
たちは、現在を生きぬく視点を感性的に注入
され、補強されていたのです。充分に気づい
ていなかったのですが、このことがこの作品
に生氣を与えてくれたのです。

しかし、その後の作品ではこの視点があい

まいになっていました。「女坑夫」が成功し
たことで、私たちは地域に根ざす演劇がわか
ったつもりになって安定してしまっただけ
です。次は大衆化という段どりが出てしま
した。

「一蹴ぼり」という作品を、私たちは、福
岡の伝承芸能を意識した上で、オペレッタ風
に作りあげました。作品のなかに十二曲の歌
を挿入し、踊りも組みこみました。この主人
公は「正人」という力持ちの若者です。虫け
らのような百姓のくらしに絶望し、はかない
夢を抱いて武士になろうとします。しかし、
乱世が終り体制が強化された江戸初期です。
彼は挫折し、生れた村に帰ってこざるを得ま
せん。ここに、私たちは現代の若者の姿を見
ました。—このような客観主義があったので
す—。

彼の村は水のない米のとれない村でした。
眼の前に流れる川の水を貰おうと役人にとり
すがった文を殺され、彼は変ります。役人の
無理難題——一蹴で川の土手を切り水を引く
ことができたなら水をやろう——に立ち向うの
です。失敗をくりかえしながらも母の愛を支
えられ、彼はたみ半置ほどもある蹴をつく
りあげ、土手にいどみます。

私たちは地域が伝承の場であり、創造の場
であるという総体として地域を新しく把握す
る必要があります。自己を発見し、世界を発
見するという創造者のダイナミックな主体性
で地域を把握することが必要なのです。

(4) 私たちの劇団の反省

この数年私たちは、地域に根ざした演劇創
造という観点にたつて、福岡の民衆の歴史シ
リーズという一連の作品群を上演してきました。
三池炭坑の女坑夫や江戸初期の筑豊の農
民の斗いや（一蹴ぼり）、富島松五郎伝（無
法松の一生）などを上演する私たちの作業の
なかで、私たちに、過去のことならよくわか
るからという安易さがなかったかと問い返し
てみるのです。つい、解釈しやうい過去の歴
史ばかりをとりあげたがるということもあり
ます。しかし、もっと本質的な点でいえば、
過去のことをとりあげることが間違っている
のではなくて、一見歴史的に明らかになった
と思われることのなかで、私たちが何を発見
し、何を学び、更に私たちの未来をきり開く
道をどう探ったかが問題なのです。

今日を生きる私たちと同じように、それぞ

彼を馬鹿にしていた村人たちも役人たちの威
嚇をふり切つて蹴の柄にとりつき、彼を助
け、みんなの力で水は村の水路に流れ込みま
す。村は豊かになります。彼は役人に暗殺
されてしまうという民話風な物語りでした。

この舞台は、確かに楽しいものに仕上がっ
ていました。息子への愛情をこめた母の励まし
の歌など感動的だと評価された場面もいくつ
かありました。福岡現代劇場を愛してくれて
いる観客の評価も一般的には好評だったとい
えます。しかし、観客の意見のなかに鋭い指
摘が含まれていました。その指摘されたこと
こそ私たちにとって重要だったのです。

「地べたにはいつくばったようにしか生き
られない農民の苦しみが描かれていない」、
「子供たちが生き生きしているのになぜ大人
の俳優たちにはうまさだけしかないのか」
「民衆はそれほど簡単に団結し、権力はそれ
ほど簡単にひるむのか」、「図式どおりにい
ろいろな手を使って表現するだけというので
は、やはり形式主義ではないのか、心に喰い
こんでこない」等々。

私は、はたと思ひあたりました。創造とい
う行為は本来恐ろしい行為なのです。創造者
には、自らの既成を喰いやぶり、自分自身が

（植田博士の意見）

こわれる危険にさらされるまで自分を追いつめる狂気が必要なのです。

ところが、私たちの安全思想は、現実を解積し、なぞるだけ、見せてやるという傲慢さに転化し、啓蒙主義的に大衆化を考えてしまっていたのです。そこに形式主義と技術主義がしゃり出て来たのです。これまで私たちは新しい民衆劇の創造を志向してきたわけですが、そのとき、常に私たちは、私たちが民衆そのものとして存在すること、地域の民衆の意見と要求を自らのものとするを想定してきました。ということは、ほかでもなく民衆の変革と自立の視点そのものを自らのものとする事だったはずなのです。

私たちに必要なのは、しなやかな発想であり自立（自由）でした。

ひき続いて私たちは、ラングストン・ヒューズの「混血児」とこぼやし・ひろしの「豚」に取り組みました。そして「富島松五郎伝（無法松の一生）」という私たちの地域で生きた男の物語りへと進みました。しかし、かなり意識化してきたにもかかわらず、この問題を解決するにはいたっていません。わたしたちの病いはかなり重症の様です。

(5) 青森県車力村のこと

そこで再び栗原論文（森田論文）にもどるのですが、

教育内容、価値としての「地域」——、地域の民主主義の歴史と現実をどう教材化するかという場合。——という部分に青森県車力村の例が紹介されています。ここに書かれた教訓は正確に学ぶべきだと考えます。

ここでは、まず、教師と青年たちが、農民と共に取り組んだミサイル基地反対のたたかいがありました。彼等がのたたかいをどのように組織するか、みんなの確信として問題をどう深めるかと苦悩したとき、彼等には、当然、村の農民斗争の歴史を発掘し、学ぶということが必要になってきました。歴史を学ぶということは自分たちがいま直面している現在のたたかいを強め、未来への展望を探りとりとうとする要求が必然的に生み出した行動だったのです。基地化する村と対置して別の形の村の未来への展望を明らかにすることが、いやおうなしに求められたとき、村の自然とその価値を再認識するため、村を知る（学ぶ）ことが意識化されました。行動が生れました。そのような情況で

「西津軽郡車力村」という作問さんの作品も生き生きと息づいたのだと思います。

私たちが未来をどう見とおし（未来のイメージを探りとりとうと苦闘し）、身を挺して現実にあたむかって生きていけるのでなければ、歴史から学ぶことなどできません。いま流行の古代ブームや辺地ブームと全く同じことになってしまいました。わが身を安全地帯において現実を解釈しているような私たちの創造姿勢では、栗原論文に書かれた「歴史を学ぶということが同時に歴史をつくるという、そういう関係が、われわれの前にある仕事であります。」という状態は、とても及びもつかないものになります。

それにしても、地域に根ざす演劇創造とは、とてつもなく大変な仕事なのだなど改めて感じます。私たちは、日本の大衆社会的状況、すべてを風化させつつある現在の文化状況に押し流されないで、この地域で、歴史の総体と真正面から向いあおうとしているのです。そして、常に価値あるものとされてきた中央集権的、文化管理された文化に対して、独自の価値を発見し、自立した私たちの演劇創造を進めようとしているのです。

西り演の七六年の総会で「もうこれ以上一

歩も退けないというぎりぎりの姿勢」が問われたのは、まさにそれ故だと思います。

(6) 地域のなかに世界をみるということ

つまり地域を透視すること

これまで私は地域に根ざすという問題を主として歴史的側面を中心に、つまり、たての線からみてきました。ここでもう一つの側面、横の広がりというか、よく「地域に根ざさない演劇を」なんていう言いかたでいわれるところから「地域に根ざす」という問題を考えてみたいと思います。

今度も栗原論文から話しをはじめることになります。栗原氏はこう書いています。

「問題は主人公の石松という一人の人間を描ききれなかった点にあった。一人さえ描き切れれば、統一戦線の図式を描くのではなく、一人の農民を、一人の労働者と、一人の知識人、その生活の全領域における関連の中で如何に描き切るかにあったのであろう。一人の人間の中に、一つの地域の中に、すべての人間のねがいが、すべての日本の要求が肉体化している——そういう時代であることを、森田論文から知らされたおもしろいであつた」。

栗原氏がこのように書き記すとき、今日の現実を丸ごとつかみとろうとする創造者としての苦悩を痛いほど感じるのです。しかし一方で、このことは近代劇から現代演劇への歩みを分析的にとらえようとするとき、私たちがすでに使いなれた一つの云いまわしでもあります。だから、私たちは、つい安易にこの問題を考えてしまうことになるのです。

一人の人物のなかに地域の、日本の、世界の歴史があり、社会がある。地域は歴史の最前線である、だから私たちは私たちの地域を描くことで、世界を描くことができると思います。しかし、私たちが私たちの地域を描くという事は、当然そのまま世界を描くことにはならないのです。私たちが地域に根ざすということ、地域に即して地域に埋没することだとすれば、すなわち地域のなわばりの中でのみ、現実をとらえようとするれば、私たちは視界をわざわざ、せばめていることにならざるを得ない。私たちがよく知っていることわざがあります。「葦の髄から天井のぞく」「井の中の蛙大海を知らず」——。

私は、ここで今はやりの言葉である「脱出」と「土着」との相克といったようなことを言っているではありません。ナショナルな視

点と、インターナショナルな視点との関係をどのように自からの中に成立させるかという課題について考えてみたいのです。

「地域に根ざす」ということは月曜会の土屋氏がよく言うように、やはりリアリズム演劇の問題だと思えます。そこで前に書いたように、私たちにとっては、現実をどう把握するか、未来に向かって今日をどう生きようとするか、常に課題になります。私たちは感性をとぎすまして、すべてから学びとりとうとしているはずですが。

さて、私たちの地域を見まわすと、コカ・コーラの看板がいたるところにあります。このあたりまでは、私たちに割によくわかりましょう。劇団でビールを飲むとき、「キリンビールがいい」など言っています。ビールと云う飲物は数社の独占会社のものしか私たちは飲めないのです。ドイツから帰った友人は、よく何千という銘柄のビールの話をします。それを選びとる楽しさを話しています。しかし、私たちに管理されたわくの中でしかその楽しみはありません。この消費の自由さえも独占資本に奪われて管理されている現実、日本酒さえも、その方向で進みつつある

現在の状況を、どのような視点で見透すことができるのかと考えこまざるを得ないので、それはやはり日本の状況のなかにこもっていたのではできそうにありません。

(7) 世界の民衆の斗いに学ぶ

私たちは常に世界各地の民衆の斗いにはげまされ、同時代に生きる世界の民衆の生きざまに学び、今日を生き続ける私たちの態度を決定してきました。

今世紀のはじめ、アイルランドの独立運動と深くからみあい、アイルランド語で書かれ、アイルランド語で上演されて、アイルランド民衆に共感と勇気と誇りさえ与えた、アイルランドの運動があります。このアイルランド国民演劇運動は、多くの点で私たちに教訓を与えてくれます。一つの例をとれば、シンダは、特定の地域の民衆のことで、つまり民衆の想像力で作品を書きあげました。そしてそのことで彼の作品は単なる自然主義の作品をのりこえ、現代にも影響を与えつづける新鮮な生き生きした形象を生み出したのです。このことは、地域に根ざした演劇創造を志向する私たちをばげましてくれます。

それぞれの地域の人々の生きざまを、自らの内にくぐらせないで、外側をなぞるのでは、学ぶことも、自らのものとすることもできそうにありません。

(8) 私たちは世界の民衆と

同時代を生きている

一九三八年、オランダに生れた一人の記録映画の作家が中国で映画を作っていました。

彼の名は、ヨリス・イヴェンス（「セーヌの詩」の監督）。スペインの侵略者に対する人民の戦いを「スペイン」の大地という作品で描いたあと、中国での日本に対する人民の戦いを正確に伝えようと中国にやってきたのです。彼の作った「スペインの大地」は、アメリカでもイギリスでも、ドキュメンタリー映画の「客観性」が要求されました。彼は、唯一の答をくり返します。「ドキュメンタリー映画作家はこうしたファシズムかファシズム反対かといった死活の問題では、一つの意見を持つべきである。」

そして、スペインと全く同じ種類の戦いであると感じたイヴェンスは中国に飛ぶので

ロルカにおけるアンダルシア、ピランデルロやイタリアのネオ・リアリズムの作家たちにおける、シチリアについても同様です。

そこで、私たちは、このようなことから何を、どのように学ぶのでしょうか。

かつて、ナチ・ドイツの宣伝相ゲッベルスはドイツの映画人を集めてこう言いました。「諸君はナチズムの『戦艦ポチョムキン』を作らなければならぬ。このゲッベルスの学習態度については、エイゼンシュテインの有名な公開状が明快に答を出してくれています。」

「今日、ドイツの真実を描いた映画は、すばらしい芸術作品となるだろう。しかし、真実とナチズムは相容れない。真実を求める人はナチズムの列に加わることはできない。真実を求める人はあなたに反対する。いづれにしても、あなたはどこでどう生活について語ろうというのか。（中略）何よりもあなたの牢獄の墓場や地下牢で死ぬまで拷問されている何千という人々の苦しみを全世界に知らせよと命令する以外に、あなたはどのようにして映画芸術家たちに人生の真実についての映画を要求できるだろうか。」

ここで私が紹介したのは、もちろん、私

一九三八年といえは昭和十三年です。日本史年表を見ると、昭和十二年十二月十三日南京を占領。昭和十三年四月一日国家総動員法公布。五月十九日徐州占領。六月八日「火山灰地」上演。十一月三日近衛首相、東亜新秩序建設を声明、と続きます。

当時、私は小学校に入ったばかりでした。私は、南京占領や武漢三鎮占領の提灯行列をビルの屋上から眺めていました。しかし、もう少し年をとっていたとしても何を考えたでしょう。その時代にです。その昭和十三年に、イヴェンスは次のように日記に書いています。

四月四日 即將軍は七ヶ月間の日本軍との戦闘について話す。彼ら（日本）は、万外交的手段をもって穏やかに取り決め、調停するだろうという噂があり、そう思っていると突然、軍隊を動員し、攻撃して来る。彼らの戦闘方法は、軍事教科書を文字通りたどったものである。あらゆる情勢は、彼等の小さな本のページのどこそこを参照できる。彼等の装備と訓練は完璧で、技術的には中国人より優れている。

四月十一日 父親はゆっくり話してくれ

ちがファッショではないかなどと思ったわけではありません。ただ、このゲッベルスのすりかえと技術主義は私たちをも冒しかねないと言いたいのです。

私たちは、ベトナムの解放を支持し続けてきました。そしてベトナムの人々は戦いに勝ちました。しかし、私たちの想像力は、このベトナムの人々の勝利を本当に信じていたのだろうか。私たちが信じたのは、ベトナム解放の戦いが正義の戦いだから支持する、ということだけではなかったのか、世界最強の帝国主義国であるアメリカの強大な科学技術力に、あらゆる手を使った冷酷な犯罪者に、人間の力だけで立向うベトナムが、打ち勝つと本気で信じたのか、こう問い返したとき、私はベトナムに何を学ぶか、再検討せざるを得なくなりました。

問題は、ここなのです。私たちは、教えられてきた枠の中でしか考えなくなっています。私たちは、私たちの時代を科学の時代だと信じてきました、ところがその科学についての認識がすでに奴隷的なのです。だから、私たちが世界に学ぶという視点は、自立した、しかも開いたものでなければならぬのです。少くとも同時代に生きる世界の、それ

た。彼はここからおよそ十マイルある村に住んでいた。日本人がやって来て、軍需品を強制的に彼らに運ばせた。中国軍が進撃してくるので彼らがその村を去らなければならなくなった時、彼らは家の前に座っていたすると、日本人が尾の付いた奇妙な物を彼に投げつけた。その奇妙なものは爆発し彼の腕に向けて飛び散った。話している間、彼は地面に、すわり、静かに食べていた、威厳にみちて、突然この威厳に満ちた態度から、彼が彼らに傷を負わされてから、彼に毒づいた日本人将校のいらいらした様子を、彼はまねてみせた。彼の声はけわしくなった。突如、私は日本とドイツを連想した。それはナチ将校あるいは、ヒトラー演説の硬い喉音である。われわれはこういうことは絶対にやらぬ。

私はこのようなわざとらしい、気狂いじみた話し方やそれに付随した心理状態というものを忌み嫌っている。私は、軍事的精神的侵略というものを嫌悪する。そして、これと同じ感情を持った人々は、これらの徒党を滅ぼすために団結しなければならぬことを知っている。（『未来社刊「カメラと私」——ある記録映画作家の自伝——より

り)

私にながながこの日記を引用したのは、この日記を読んで、知らないことの恐ろしさ、独りよがりの罪をしみじみ考えさせられたからですが、更にもう一つ、ここにリアリズムの態度が明確に記されていると考えさせられたからです。

私たちの「地域に根ざす」という発想が狭さの概念となったときの恐ろしさを強く感じます。ついでに、言えば、一九三七年四月二六日、フランコ反革命軍を支援するナチ空軍がゲルニカを爆撃しました。この人間否定の論理の延長のうえに、まさに広島、長崎があると思うのですが、この惨劇を知ったピカソが二日後には、あの有名な「ゲルニカ」に発展するデッサンを描きはじめ、エイゼンシュテインは、製作中の「アレクサンドル・ネフスキー」の一場面、グブスコフの惨劇「にはげしい怒りを定着させました。また、ギリエン・ネルダーはスペイン人民の英雄的行動への連帯を歌いあげる詩を数多く書き、ブレヒトは「カールのおかみさんの銃」を書きました。エリヌアール、ランダストン・ヒューズ、シオスタコーヴィッチ、カザルス等数えあげればきりがありませんが、スペイン人民

と連帯した彼らの行動にくらべ、私たちがチリーの反革命に向いあって何をしたのかを強く反省せざるを得ないのです。私たちは同時代を、世界を、発見し続けることで、世界の民衆との連帯のなかに私たち自身の生きる道を探り取るのではないのでしょうか。

(9) 地域に居直るために

私たちが「地域に根ざす」ということは、地域を愛することにはじまります。しかし、私たちがその地域に甘ったれて、お涙ちょうだいのなれあいの中に首までどっぷりつかっているとするれば、私たちには何も見えなくなるでしょう。

たしかに、私たちにとって地域は生活と生産の場であり、文化の原点です。私たちは私たちの地域からどこへも逃げ出すことはできないのです。それ故に、そこに居直って地域の自立を確立しようとしているのです。しかし私たちの一人一人が、そこに居直れるほど毅然と自立し、私たち自身の伝統に自信を持つだけでなく、常に世界の民衆の闘いを自らのものとしないかぎり、私たちが私たちの地域を透視することはできないでしょう。

私は世界から、世界各地の民衆の闘いから学ぶという問題にふれてきました。これは、日本の各地域の民衆の闘いから学ぶという問題も当然、ダブってくるはずですが。

ここで、私が「民衆の闘いから」とあえて書くのは、現代は、民衆が歴史をつくる時代であり、しかも民衆自身がそのことを自覚している時代だからという意味で、なのですが、私たちが歴史を作る側に身を置き、自らが行動する主体として演劇創造を展開しようとするとき、木下順二さんのことばをかりれば「主体的に創造的」であろうとするとき、具体的には、何度もくりかえして書いたように私たちの現実把握の姿勢が問題になります。その現実とはまさに、垂直と水平の広がりを持って動いている現実なのです。「現実」がそうだからこそ、さきに引用した「一人の人間の中に、すべての人間のねがいが、すべての日本の要求が肉体化している。」ということばは、地域に根ざす私たちのリアリズム演劇創造の重要な「かなめ」を示すことばとなるのだと考えます。

ここまで書いてきて、私は、すこし限られ

た問題に固執しすぎたことに気がつきました。「地域語と民衆の発想との関係」、「大衆化ということばの持つ危険性」、「地域の自治の問題」、「連帯の問題」等、始められるつもりでいたいくつかの問題に全然ふれないで終ってしまいました。

ここに書いたことも、自分自身がまだ明確になし得ないでいる問題なので解りにくく、読みにくい文章だと思えますが、お許しいただいて討論の素材にしていただければ幸いです。



創作劇「戦中派」で

十五周年を飾った劇団四日市市民劇場

2月27日、四日市に赴く。始めて近鉄に乗る。知らずに名古屋から指定券を買って倍額をとられる。車内はガラ空き。公害では川崎と並び称された四日市。降りて見て四日市の方が空気も道路も更生しているようにみえた。これはしかし前身を知らないのと比較にならない。川崎はまだ「美しき曇天の空」(熱田五郎)が続いている。

市民ホール。仲々豪華な会場だ。もつともこれも大きさだけの印象なので中身のことは判らない。15人程の集団では一寸領し切れない。おそらく声は通るまいと思ひ、前の方に席をとる。

「戦中派」は作者の森賢郎が、かなり追体験的に(話の筋ではなく、情理のよいうなもの)彼の世代をさらけ出して見せようとした意欲作。登場人物も四〇才、五〇才。これを平均年齢22・23才の劇団員が競演する。主役の画家に扮した板井睦雄が辛うじて難役にたえる。女優陣は

総じて荷が勝ちすぎた。

問題は読ませる戯曲も、読むほどには舞台ではテンポが出ないということだ。作者はこれを喜劇としているが、演出も作者なのだからそれならそれでその様な手を講ずるべきである。人物の葛藤にも深まらず、世代諷刺も定まらず、表題の「戦中派」の意味が判らぬとする声があった。

カーテンコールで森賢郎が泣く。屈折の十五年。劇団の十五年はまさに彼の十五年史だ。初の創作劇念願かなっての上演の喜びがドッと来たのかもしれない、彼に送る拍手が満席の客であつたらと、残念である。

終演後、観劇合評交流会。東リ演中部プロックの錚々たるメンバー。報告者(藤本昭・浅井克彦)をたてて司会(久保田明)が適切な作品、舞台の批評を誘導してゆく。(記録・栗木英章)。これある哉と感心した。(はぎ)

第二回演劇大学のもたらしたもの

黒 沢 参 吉

演劇大学というモノモノしい名前に、少々テレながらひらいた去年からまる一年、第二回東リ演劇大学は、まずまずの成功をおさめました。

分科会リーダーと事務局関係者のまとめの会議でも、それぞれ、そういう評価をしましたが、このほかに参加者からのアンケート回答が、成否を判断する手がかりに、今回はなりました。

* 第一回、第二回とも出席しましたが、出席した事だけとらえてみても本場に有意義なものでありました。その上、学んだ内容は大学の名にふさわしく、さまざまに多くあります。

内心を言えば、早く、一刻も早く卒業したい訳ですが、自分の非をささる事ばかり。今日から明日への変化をつくりだすために、演劇にとことんほれこんで、頑張っ

* * * 前回と二回とも出席しました。日程表をみて、昨年ほどの興味が出なかったのですが(昨年は強烈だった)、参加してきて、前回におとらないものがあつたと思います。講師の話はそれぞれユニークで、期待した以上でした。僕は裏出身なので、効果の話はとてもおもしろく、実物をみられたことはとてもすてきでした。早川さんの話は、僕たちもすぐにも応用させてもらえそうです。

分科会の時間がたっぷりあつたのは、とてもよかったです。まだまだ話し合いたいことが残っているという感じです。まず基礎の話から入ったのは、自分の今までのことをまとめて考えなおす上で、とても有効でした。もっとも話を聞きたいし、しゃべりたい、そんな雰囲気会場にみちみちていました。今度は、もっと自分達の現場の仕事をもちこんでみたい、全員が持ち込めなくて

り出て一体いつ卒業できるのかわかりません。だが、万年留年でも良いと今思っています。実に啓発される点が多く、このように学べるものは、なかなか自力では求められません。ぜひ今後も続けてください。

分科会研究は一口で言えぬ位、有益でした。自分も、この学んだ内容を来年までに少しでも消化して進みたいと思います。

第一回の時は友人ができませんでした。が、今回はできました。その点も良かったと思うのです。

この大学の準備、運営すべてを担当してください。本当に有難うございました。

* * * も少しでも持ち込める人を増やしたいと思えます。分科会(美術)での見学旅行なども、ぜひ実行してもらいたい。

もっとも全部のアンケートが、大学当局が無条件支持しているわけではないので、おいおい辛い意見や注文も紹介しなければなりません。参加者八四人中アンケート回答者は四五人であり、つまり三九人の無回答をどう評価したらいいのか、という問題も厳密には残るのですが、その辺は大目に見て通りすぎるのが東リ演風なのだーと割り切って先へ進みましょう。

本題に入る前に、第二回演劇大学三日間のプログラムを挿入しておきます。

- 二月一日(祭) 一四時開始
- (1) 開講あいさつ(30分) 黒沢参吉
- (2) 講演・現代と演劇(90) 米倉斉加年
- (3) パネル討論・劇団活動について
仙台小、さっば、未踏、名古屋をパ
ネラーに(24) 司会 しばやしひろし
- (4) 全体交流(?)
- 二月二日(土)
- (5) 講演・舞台と音響効果(90) 秦 和夫

私にとって、東リ演は第二の師です。演劇のまとまった学習をする機会に恵まれない私たちは、東リ演でしか学ぶ機会と場がない訳です。

だから砂にしみる水のように、ひとつひとつの講義が、討論が新鮮です。また各集団のリアルな現実がふれる中で、私たちがかかえている様々な問題とダブリ、発見し、解決の糸口がみえることが度々です。パネル討論を聞くなかで、四つの集団のかかえている問題をそっくり、そのまま支木にあてはめてみると、じっとしていられない気持です。その中で特に強く感じるのは、*健全なサークル性*をもった集団のありようとは何か。今の支木にもとめられているのは、このことではなかったのかという感じが強くします。ですから、この理論をぜひ発展させて下さるようにと思っています。

演劇分科会での討論、いま次の公演をひかえて、しかもその担当演出でもある私は、演出の厳しさを痛感しました。一方演出のよるこびみないなものも何であるか、わかった様な気がします。これからです。本当にこれからです。

- (6) 〃 〃 私の演劇ー「わが町溝ノ口」のことなど(90) 長岡輝子
- (7) シンポジウムー演出の仕事(90) 早川昭二

- 演出・演技分科会のための素演
千田集生、貞包巖、鈴木瑞穂による
「橋」の一部(60)
- (8) 分科会(300)

- 第一・演出の問題 チュータ早川昭二
- 第二・演技研究 // しばやしひろし
- 第三・美術の仕事 // 佐藤張二
- ゲスト 園 良昭・若尾正也
- 第四・経営の研究 チュータ佐藤克夫
- 第五・作家作品研究 // 萩坂桃彦
- ゲスト 芳地隆介

- (9) 分科会交流(120)
- 二月三日(日)
- (10) 分科会(前日にひき続き240)
- (11) 全体会ー五分科会の参加者報告(50)
- 第一・久保田明(名古屋)
- 第二・岩本一子(尼崎フアーベル)
- 第三・鈴木清澄(名古屋)
- 第四・山口和紀(はぐるま)
- 第五・小島真木(静芸)
- (12) 閉講あいさつ(20) しばやしひろし

まずまずの成功をもたらした原因は、次の諸点にあるようです。

一つ。去年の演劇大学、頭に第一回とふつていません。さしせまった危機意識に迫われ、そこを乗り越えるための学習というところで企画したものの、続けていく見通しは正直なかつたのです。ところが、参加者には思いのほか好評で、その声に押されて第二回にとりくんだが、準備段階で柳の下にドジョウはいない—と、甘い見込みを排し、充実した内容と堅実な経営の実現をはかった。前回の成功に安易に乗らない、このとりくみの緊張がまずあげられるでしょう。

二つ。参加者の学ぶ意欲のつよさが、前回を上まわって感じられた。痛いほどでした。とくに若い、中小の劇団のそれが準備をすすめる例をつき動かしたとおもう。東リ演外の劇団が、西日本—北海道東北をふくめ、一二集団—三二人にもたっています。(東リ演加盟劇団の二三集団—五人、それも半数がしめくりスレスレまたは以後のかけこみ申込であることは、少々気になります)但し、こ

の学ぶ意欲の強さを、どう判断しそれにどう対処するかは、大学だけで取敢しきれない問題のようです。

三つ。講師、ゲスト、助言者、チューター等の顔ぶれに魅力があり、その話がよかったこと、分科会でもこの人々の努力がものを言ったとおもいます。とくに専門家が、お義理や高い所から教えるというのでなく、共通のしごとをすすめる若い仲間への信頼—共感をこめて接してくれたことは、ひじょうに敏感にうけとめられた。ぼくらを援助してくれるこの人々にとっても、大学が有益な場になれたと実感できたのは、嬉しいことでした。

四つ。二月初めという時の利、埼玉の塚越君をはじめ地元の骨折できま—た会場の地の利、はぐるまの島君、加納君を軸に手際よくすすめられた運営事務。これも、今回の成功の見落せない基礎条件でした。

プログラムの中味に入ってみると、米倉さん、秦さん、長岡さんの講演、分科会での園さん、こばやしさんの講義が好評。シンポジウムの早川さんの話も喜ばれています。

それは、話の内容が話す人にとってヌキサシならない、演劇生活の根っこから出ている、そういう質のものだったせいでしょう。

どこか甘い雰囲気を感じた米倉さん、かわいなお婆ちゃま然とした長岡さん、そんなできあいのイメージを吹き飛ばして、芝居づくりへの仮借ない肉薄が伝わってくる、その印象はとて新鮮なものでした。美術や効果の純技術的な話でも、何気ないひとことの中に、舞台をつくる人間のきびしい本質がうかがえたようで、よい講演—講義に大学のメリツトの大半が占められている感じでした。

これに反して、パネル討論ははつきり不評でした。狙いがわからない、話がかみ合わない、討論が発展しない、等々。

東リ演の平均的な四劇団から、かかえている問題をだしてもらい、創造の実情、東リ演理念との関連、劇団の指導性、地域との連帯等の照射のなかで、われわれ劇団全体のありようをさぐるというこの企画は、大学の柱の一つだったのですが、結果はどうやらつめたい反応におおりました。

だされた問題(リーダーと中堅のこと、集団のサークル性のこと、専門化の諸問題、劇団の歴史と創造蓄積と地域浸透の有機的な関係の問題など)は、どの劇団にとっても現実的な内容ですが、それだけどこでも同様に悩み、試行錯誤し、特効薬なしとの結論にた

しているのか、かれこれ喋るのがムナしいという感じなのでしょう。

実際、シビレをさらした若い参加者から、貴重な時間を使ってグチを並べてどうなる—と、苦情の声もあがったのですが、そういうことで通過できるほど単純な問題ではないので、たとえば討論のおわり近くでの発言を更に練ってくださった早川さんの、翌日のシンポジウムでの演出者—創造リーダーとしての提言などは、これから積極的に全体の実践課題にとりいれる必要があると思えました。

(ぼく個人には、ここでの早川さんの話と前日の米倉さんの話が、創造集団の土台について多くの共通項を示してくれた点で、興味シンシンでありました)

ただ、早川さんの話から「橋」の素演を経過して、演出—演技の分科会へつなぐシンポジウムの試みは、どうも中心課題がつかぬけず不発におわったのか、とくに演出分科会の参加者から、もどかしさが表明されています。

分科会では、経営と美術のそれよりもよい成果をえたと、アンケートもチューターも一致して述べています。これは、この二つの部門がすでに夏のゼミ等で基盤をつくり、メ

ンバーの定着をはかり、しかも今回にむけて一定の準備(報告者をたて、ゲストを招き、資料をつくる等)をやってきたこと、無関係ではありません。

経営の分科会、面白かった。

自分が劇団の中でシコシコとやってきたこと、あこがれのはぐるまさんや、名古屋のIさんのやり方と、たいした違いがない。とにかく、これを続けていけばうちの劇団だってなれる。始めたことを形になるまで(結果が出るまで)続けていこうと思えます。帳簿のつけ方にしても、観客名簿の使い方にしても。

普及と創造の関係について、原則的には頭においていて、実際はなおざりにしてきたことにクギをさされました。

いい芝居、やりたい芝居を、自分の中に育てたい。ものの方、感じ方、とらえ方を確立する。自分をつくる、ということと今現在の演劇活動とを、両方やっていこうと、再確認しています。

演技の分科会は、講義と実習をあわせてやったわけですが、参加者が自分を素材にして具体的に学んだその斬新さは、従来のゼミや

大学から得られなかっただけに、強烈でした。

来年は、最初から実習を中心にやった方がよいと思えます。(今は本当にそう思います)極力耻しがたりしませんから、ぜひそうお願いします。

それにしても、言葉、いかに意識せずに使っているか。今その再認識と、自分の内へのたたきこみの必要さ。そして、そして、これを指導してくれる人がほしい! 何とか探さないと、このまま忘れてしまつては、いくら小手先でやろう、ハートでやろう等としてもダメになる。もし、劇団員全部がこのことに本当に気付き、やり始めたら、ああ、どんなに芝居が面白くなるだろう。わくわくしてくるな。

とりくみの対象が具体的にみえてくる経営、やりようでみえてくる美術、こんどの場合のように欠陥が鮮明にわかり、そこに挑戦できる演技、これらの分科会が、ある意味で可視的な成果をおさめやすいのに比べ、創作と演出の分科会はむづかしい。同種の充足感

をもとめるのは、ムリかもしれません。

計画をたてる段階で、この困難は予想されそこから創作については、芳地さんとその作品をかりることで、今日の現実にはちむかう生きたドラマトウルギーを学ぼうとしたのであり、演出についても「橋」―「イカサスの冒険」の創造過程から、トータルな演出方法を学ぼうと考えたのです。要するに、具体的であるうとつとめたわけです。

今回の場合（大ザッパな言い方だが）、作家・作品研究の分科会ではこの糸口がひきだせたということであり、これからへの期待がかけられそうです。

* 前回の大学よりも学ぶべき点が多かった。一つには、自分が作品を具体的に何稿か書きおえ、最終稿をめざしているという主体的な状況があったからと思う。

* 「書く」ということに対する自分なりの思いが混とんとしていたが、つまり「書く」ための準備、段取りみたいなものにとらわれすぎていたが、「書く」ということの実践的意味が、つかめたような気がする。

人がどう取組んだかというか、その人がどんな生き様であるかということの中で、多くの観客に検証されながら成立してゆくものだという事です。

この一見素朴な感想は、げんざいの演劇大學のもちうる機能とその限界を、的確に言うてくれているようです。

閉会の全体集会を前に、分科会チャータによるまとめの短い会議がひらかれました。それぞれの分科会の報告を交換しあったわけですが、共通の特徴は、今回の成果なり出なかった糸口なりを、どう発展させるかが分科会の切実な関心事になっている点にあります。来年―第三回演劇大学で、という考えがごく自然に出てくる一方、いまの課題を同じメンバーでさらに深めようという要求もつよくなっています。

経営では、支木、名古屋の詳細な制作資料をたたき台に、あの手この手論を脱却した経営論の確立をめざしていますし、美術も大学にこだわらず基本から製作の実際までを学びながら、劇場史の勉強をやりうと話合われています。

創作のジャンルでも、今回の取巻をテコに新しい有効な勉強の場がひらける可能性は、

とにかく、書かねば始まらないという思いである。

* 芳地さんという東リ演の作家と別な歩みで同じ方向に向って歩いてこられた作家の意識にふれることによって、逆に自分を照り返された想いがします。帰って、自分の中に沈んだものを、とりだして考えてみたいと思います。できれば黒沢さんをはじめ、東リ演育ちの作家の出席をえて、夫々の作家の横につながる問題も照り返しの中で考えてみたかったと思います。

演出の分科会についての反応、二、三。

* 演出部会を更に有意義なものにするために、企画段階での討議をにつめる必要があると思います。一口に視点を変えるといいますが、そのひとつだけでも何年たっても出来ないし、自分の当面の課題をそこにおいて、明日からの稽古にのぞみたいと思っています。

* 「橋」―一部上演の意味があまりなかったようです。分科会のもち方を、もう少し

十分ありそうです。これは年一回の大学の中で、主要な位置をしめる部門になる筈です。

演出と演技の分科会は、今回もとても多くの参加希望が集中したところですが、このことはその背後に、学びたい要求がいかに切実にあるかを示しています。東リ演で専従の指導者団を組織して、各劇団を巡回して基礎的な実習を付与してほしい、という声まで出ています。この点では、演出の分科会が演技者との関連をふくめて、どう有効な勉強方法を生みだすかについて、つっこんだ話し合いをしているので、それも参考にしながら何とか画期的なやり方をあみださなければならぬと思います。

同時に演技の、とくに基礎の向上をはかる点については、年一回七―八〇人の大学だけではとうてい不十分で、劇団としてどうするか、あるいはプロダクトとしてどう対処するかを考えなければなりません。

* 特に日本語についての勉強の糸口を学習しました。稽古場ですぐに生かされるために、自分なりに深める作業をして全員に還元したいと思います。俳優は美しい日本語を担う専門家である」という自

工夫して頂きたかったと思います。もっと具体的にしほってほしかった。

* あるいは具体的な方法で進められる講座的なものを期待していたが、期待はずれ。ゼミにくらべて高度の話し合いになったことはうれしい限りです。劇団内でもこの位の創造面での討議がなされたら、もっと創造力量も高まるだろう。

* 一二日中は各集団の内輪話になってしまいい、九時間も取っている分科会の勉強姿勢の確立がなされていなかったのではないかと思います。東リ演―演劇大学というところで、勉強する学べると参加したのですが、何か交流会と変わらないような感がありました。

ここでは、演出というものの方法―技術とその前提となるものの分かち難さと、参加者が学びたいとしているものの範疇の広さが、いわば絶望的に拡散して感じられます。

* 演劇は、教えられるとか教えるなんて、本当は出来ないんじゃないかと思いましたが、私が学べるのは、演劇に対してその

負心は、自分の言葉を磨いてはじめてもてることを痛感しました。

このナイーブな自覚は、ささやかであるけれど開いています。演劇大学が、こうした意志をつくりだしたことは、やはりすばらしいといえます。

しかし、それが本場にすばしくなるためには、このあとの彼女なり彼女なりの劇団がどうささえるかが、重要です。一人の自覚が二人三人、全員へ増幅していくそのはたらきには、や大学にはない、本人と劇団との関係の中で生きて発展するしかないのです。それは、今日の状況下では言葉の正しい意味で、たまたかいいならざるをえない場合があるかもしれませんが、プロダクトについても、同様のことがいえるとおもいます。

タテマエの字面の一致をよりどころに、お互いの不足不十分をいたわりあう内輪の世界から脱けでる。風雪にたえてぼくらの舞台の足腰をきたえる。新しい力を強く育てて日本演劇の未来をつくる。こうしたところに演劇大学開設の意図をおく以上、そうしたたかかへの劇団の、ことに指導部分のふかい理解が不可欠だとおもわれます。

「ひしめきあう不毛の季節から」研究

現代の若者たちをどう書くか！

——西リ演作家演出家会議報告——

栗原省 (劇団いこら)

「西リ演にも高校教師が仰山居るのに、何故高校生問題を書かないのか？」

司会の岸本氏はそういつてぎょろりと私を睨んだ。

「書かないんじゃない、書けないんだ。毎日／＼がすさまじいくらいのその対策に追われている現場の人間だからこそ、書けないんだ。」と反論しかけたが云い訳めくので黙っていた。しかし幾分の後めたさもあつたのか、遂に又、このレポートを書かされるハメになった。

それにしても顔ぶれからみればやや淋しい研究会になった。福岡の猿渡氏も広島の上屋氏も顔をみせていない。未来の森本氏、関芸の小松氏、京芸の藤沢氏等の論客も不参加なら、潮流の高松氏、人間座の田畑氏、国鉄の

浅野氏ら常連の姿も見えない。そういえば参加予定の人形京芸荒木昭夫氏の姿もなかった。一体どうしたことだろう。折角岐阜から来てくれた作者も拍子ぬけされたのでは、と案じたものだが、逆に、例の独得の熱っぽい「こぼやし節」に挑発され、会の内容そのものは大変ぎっしりしたものになった。なお参加者は14団体27名。

ところ 劇団大阪
時 二月十九日、二十日
会費 三〇〇〇円
研究資料 こぼやしひろし作「ひしめきあう不毛の季節から」
特別講師 大阪私学教職員組合執行委員長 小畑哲雄先生

つ下になる筈である。

●小畑先生が語る高校生の姿。

特別講師の小畑先生は教職歴24年のベテラン英語教師で大阪の私立女子高の先生。(クラブは演劇部顧問)小畑先生の語る大阪私立高校生像の一部を紹介すると――

(一)生活意欲すら失ってきた生徒たち
例えば、「先生。十時から三時まで働ける就職口ないか？ほんま云うたら僕お茶飲みながら、テレビみていたいやけどな。」と卒直に話す生徒。

(二)我慢が出来ない生徒たち
例えば①討論が全くだめ。いいたいことだけいったらあとは誰の云うことも聞いていない。②授業中でも五十分じっと坐っていられない。「先生。もうあかん。」と立ち上りぐると教室を一まわり歩いて来て「これでえ。」と落着いて授業を又うける。(十五分ごとのCMのせいかな？で大笑い)③友人や教師に暴力をふるう。中高校の教師暴行事件で補導されたものは昨年比35%増、被害教師47%増、29人。解放教育の影響大。

(三)全く勉強しない、基礎学力が全くない生徒

徒の激増。

例えば英語で「MANのいみは？ときいてもわからん。中にわかってる友達か、」
「ほら、あなたの好きなもんやんか」といったらすぐわかって、
「そうかほなら男や」と答えた」という女子高校生。大阪の私立高校約80校で年間の退学者が二二〇〇名。その大半が「学校がいやになった」という理由。公立高校から疎外され「どうせうちアホやもん、アホやさかいこんな学校へ来とるんやないか」という挫折の連続の彼女達。生活指導教官の間では「煙草はもはやどうしよもない。シンナーと売春が当面の生活指導の課題である」ともいわれているという。何こうした子供に対し親は「一子供がわからん」というだけ。全く家庭の指導性、教育性は失われ、教師にしても例えば青年教師の場合、生徒と同じく基礎学力が欠如しているケースも多く、自信をなくして停年前にやめてゆく老教師も多くなっている。

小畑先生は「教育における差別的構造は高校の場合最も私立校にしわよせされているの

婦路一語だった演集和歌山の若い作家志望楠本幸男君に車中早速感想を書いてもらった。

「昨年ひきつづき2回目の参加である。「ひしめきあう」は面白い作品だった。高校を卒業して四年目の僕にとって、この作品には「不毛の季節」というタイトルとは裏腹に、現代高校生の健康な願望が反映されているように思われた。そこが各劇団の上演で高校生の共感をかち得た要因ではないだろうか。会議に参加し討議をききながら、現代のシラケ時代をどう表現するか？その難しさと、それぞれの作家の新しい表現方法の模索の苦悩が、私にもひしひしと伝わってきて、その点では去年の作家・演出家会議よりも(私にとっては)よかったと思う。従来の狭いリアリズム観にとらわれず、それぞれの劇団や作家が、個性的で多様な表現方法を開花させた時、私達の活動はグンと前進する。その壁の厚さを思うと共に、それに向って全力で立ち向かってこぼやしさんや先輩たちをみて、心強かった。

ちなみにこの楠本君は大阪市大生で22才。「ひしめきあう」の主人公昌夫と同年か――

で、絶望的な深刻な面のみ強調しすぎるといふ批判もあるが、展望をきりひろく為にもこうした事実を訴えたかった」と話を閉じられた。

一九七〇年頃から年ごとに深化してきたシラケの現実。昨年の特徴的事件はもはや今年の典型ではなくなっており、例えば、喫茶店で何時間でも黙ってマンガを眺めているだけの男女高校生。前後の脈絡もなく性行為だけを突発的に、あっさり処理する高校生。理由もなく、衝動的に命を絶つたり、暴力をふるうケース。小畑先生のいう「人間として生きる意欲すら喪失したような」高校生像――それはすでに「ひしめきあう」に描かれた、光田教諭に「煙草吸っていたな」と尋問され「吸いもせんに吸ういうのやったら、それくらい覚悟でしらべて下さい」と食ってかかる昌夫ではない。鈴岡にプラトニックな想いをいだき、戸田を引っぱりきた不良高校生をたたきのめして「顔洗って出なおいて来い」とタンカをきる昌夫でもない。エリート校の生徒から「脳はたりんがバスケケットだけは強い」といわれてカーッとなり暴力をふるった昌夫でもない。まして昌夫の処分

に抗議し単身光田教諭にかけ合いにゆくチー坊像は今日の高校生の特典像ではない。

【討論の柱となったもの】

さて研究会ではまず「ひしめきあう——」を上演した西演三劇団の演出家より①これを取りあげた動機②とりくみの中での問題③公演とその結果の三点について報告された。△劇団大阪公演9月16日〜18日(大阪) 11月11日(京都) 計5ステージ一九〇〇名、演出・堀江ひろゆき/劇団四紀会公演9月24日〜25日3ステージ九九〇名、演出・新木祥之/こじか座77年2月13日1ステージ三五〇名。演出畑野稔▽

三劇団共とりあげた動機はこの作品が「候補作品中一番人気があり」「現代をえがいており」「教育問題、とくに高校生問題をとりあげて公演することが、今日大事だという問題意識をもっていたから」という三つに尽きると思う。堀江氏からは「高校生、親、教師の三者が、それぞれ各自被害者として生き乍ら、同時にお互いに加害者であるという被害者加害者同居論(こばやし氏)の意味を問いつめてみたかった。この作品は問題提起で

あり、観客に考えてもらえる舞台にしたいと思った」と説明された。とりくみの中で出た問題や公演の結果についても奇妙に類似がみられ、例えば、まず劇団としたしい教師や教組が首をひねり、光田のような生徒指導部長は今日みられないのではないかと村井の意見が出て「こばやし氏はいつ頃まで教師だったのでしょうか?」というような質問が出たこと。生徒からは逆に「うちの先公と一諸や」という意見が多く出たこと。みおわたたあと脚本よんだよりよかった。昌夫が戸田を冒そうとして拒否された場面で泣く生徒が多かった。昌夫らが教師らにいじめられるところに同情や共感があつた等々が報告された。

作者のこばやし氏は四五〇名の観客をとらえた岐阜・大垣公演の様子を話した後、「劇団はぐるま」がこの作品で爆発的成功を得たのは逆に題材が観客にとって切実であり身近な問題であったこと、第二に矢張り創作劇のつよみであり、とくに岐阜弁による芝居だったことによるとされ、作品の背景となつた高校生教育の荒廃状況について岐阜の現実を語り乍ら、「教育というものは未来をあきらめさせ、民主主義は不毛であることを教え

るいとなみであることを、子供たちはおそろしいくらい見抜いている。学校なんかゆきたくない。やめられる者は幸せだ」という絶望があり、異性への愛すら管理され傷つけかねばならない。この全く身動きならぬほど出来上ってしまった管理社会での構造差別の最底辺で育ってゆく若者達が今切実に求めているのは人間的ふれ合いであり、ドラマではなく歌でありフォークソングである。この展望のない現実が論理が成立しない時代である。論理が成立しない以上ドラマが成立する筈がない。私は現代の構造差別の中に生きる人々の行動の成立しない論理を提出することで観客自身による新しい論理の創造を期待した」と問題提起。討論は以上をうけて①この作品は作者のいわゆる構造差別の縮図としての現代の高校生像を十分に描いているか?②そこから更にすすんで現代(という全く展望の見えないような状況のもとで)のドラマとは何か?社会科学的新な見方ではどうしても捉えきれない人間像、例えば動機と行動が全く背理し、原因とか意志とか情熱とかが全く欠如し、行動そのものさえ欠如してしまつた人間が劇的なものとして果して描けるのだろうか?ということ③そして、では「ひしめきあう

——」における作者の従来と全く違った戯曲の方法は正しかったのか?というような点に論点がしぼられる筈だつた。

【報告にならない報告】

ここで又私の軽卒を詫びねばならないのだが、三時間たらずの論議の内容を私は全くメモしておらず、自分の喋ったことや私の問題意識にかかわつたことしか覚えていないのである。矢張り引うけるべきではなかった。以下は、おどろくべき我田引水の報告文であり、就中作者にあらかじめのお詫びを申し上げておかねばならない。さて。

(一)昌夫や昌夫をとりまく高校生像が若い観客の共感を呼んだということについて

作者は「論理のない現代(の若もの像)」を描くために、家庭をベースに(九場面)昌夫の行動半径を追って学校や喫茶店や河岸や公園の場面(短い十二場面)をちりばめ、更にその多場面を高校生群像とフォークソングの唄でつないだ。そして職場の管理体制に追いつめられている親と、文部省や管理職の

管理体制に追いつめられている光田に代表される教師によって疎外され傷つけられ、友人のチー坊や愛する女性鈴岡からも離れてゆき、自分を愛してくれた女性戸田さえ人間として信頼出来なくなり、遂に方向もなく叫んで舞台から去る若者を主人公にえらんだ。ところが作品は、「昌夫の家」の場面が突にリアルに描かれているのに反して、その他の場面はまことに象徴的にそして通俗的に書かれていく。例えば昌夫を訊問して追いこんでゆく光田教諭はさながら悪代官であり、昌夫が酒の勢いで犯そうとした戸田から逆になぐられるシーンはまことにメロドラマ的であったりする。しかも舞台ではむしろ、その場所が生き／＼と観客を握っていたようだという。(これは岸本氏の意見だが)「おさと」という実に魅力的な女性(この人物については分論議された)などは、作者はむしろ論理をこえた直感的ともいべき共感をもって創造された人物像だったろう。それに反して昌夫たちの若者像は(以下は私の意見だが)作者自身を(父母や光田等のような)加害者の立場におくことで若ものたちをこれでもか／＼と追いこみ、そうすることによって「ど

ろいとなみであることを、子供たちはおそろしいくらい見抜いている。学校なんかゆきたくない。やめられる者は幸せだ」という絶望があり、異性への愛すら管理され傷つけかねばならない。この全く身動きならぬほど出来上ってしまった管理社会での構造差別の最底辺で育ってゆく若者達が今切実に求めているのは人間的ふれ合いであり、ドラマではなく歌でありフォークソングである。この展望のない現実が論理が成立しない時代である。論理が成立しない以上ドラマが成立する筈がない。私は現代の構造差別の中に生きる人々の行動の成立しない論理を提出することで観客自身による新しい論理の創造を期待した」と問題提起。討論は以上をうけて①この作品は作者のいわゆる構造差別の縮図としての現代の高校生像を十分に描いているか?②そこから更にすすんで現代(という全く展望の見えないような状況のもとで)のドラマとは何か?社会科学的新な見方ではどうしても捉えきれない人間像、例えば動機と行動が全く背理し、原因とか意志とか情熱とかが全く欠如し、行動そのものさえ欠如してしまつた人間が劇的なものとして果して描けるのだろうか?ということ③そして、では「ひしめきあう

(二)おさとのこと。

管理体制の中で身動きならない昌夫の両親を一語に、作者自身にちもさちもゆかなくなつた時、ふっと「おさと」という人物像が浮び／＼そこから作品世界が一気にひろがり自由になった」という作者の創作体験の話は大変おもしろかった。この人物が登場することで昌夫の父母や昌夫たちまで生き／＼してくるのだから、全く不思議だ。この作品は大人が主人公の芝居か?若ものたちが主人公かという論議もおもしろかった。

(以下41頁へ)

マクシム・ヴァレンティンとの対話

グドルン・クラット

訳・千田 是也

グドルン・クラット

同志ヴァレンティン教授。あなたはワイマル共和国時代のいちばん有名な、いちばん効果的なアジプロ隊の指導をしておられたし、その八赤いメガホンVは「大衆のメガホン」であることを自認していた。その場合、現実への密着というところがおそらくこの隊の政治的効果の本質的な要素だったろうと思うのですが、どうか。あなたの隊の番組がどんなふうにして作られたかをお話してくださいませんか？

マクシム・ヴァレンティン そのころ吾々は、芸術的手段で煽動・宣伝をやるんだと称していました。番組を作るための仕事の最初の段階は、日常の出来事についての報告やインタヴューによる話題、労働者、とくに青年労働者たちが提供してくれる物語を集めることでしたね。それには聞き方を心得ていな

ければ駄目だが、それさえできれば労働者はいくらでも話してくれる。吾々は八赤いボストVという週刊誌に二ページだけをもらい、それをピオニールの壁新聞みたいなものにして、子供や青年や、ときには大人のそういう、日常報告をいっぱい載せていた。

クラット そういう質問の相手にはどんなふうにして近づくのですか？

ヴァレンティン 実にいろんな仕方ですね。吾々はいろいろな集会にかけて芝居をしました。吾々と一緒にやってくれる、すっかり胸襟をひらいてくれるさまざまな連中に出会い、もつこともあったが、そのあとで、いろいろな話をきかせてもらう約束をとりつけました。

その一部だったわけですね。

クラット 主にどんなところで芝居をなさっておられたのですか？

ヴァレンティン いたるところでと言ってもよさそうだな——街でも工場でも。あるときは新聞のお祭り、ときには労働者のスポーツ祭、工場の外のクラブ室などでおこなわれる小集会——この最後にあげたような場合にはピアノを弾んで歌をいくつかうただけのときもあり、自分たちの楽器を持ちこむこともあった。だが、何百、何千もの観客を相手の大きな催しに出ることもありました。しんまいは「今日はエルンスト・テルマンの演説、エーリヒ・ワイネルトの朗読、八赤いメガホンVの出演！」などというポスターを貼るようになった。これはたしかハーゼンハイデやノイケルンの「新世界」やウェディングの「ハッパール会館」に出たときだったと思います。KPDの党大会に招待されて上演したこともあります。

逮捕されたこともずいぶんありましたが、連帯性ということをいちばん強く感じるのはそういうときだな。あるとき『コミンテルンの十年』という番組を上演したあと、小道具

ぐるみ全員が警察に引っぱられたとき、吾々のメンバーの一人がうまく護送用のトラクタから飛び下りてね。その足で会場の「八赤い」Vに駆けもどって、その舞台から「八赤いメガホンVが逮捕された！」と叫んだ。するとたちまち集会がどっかへ吹っ飛んでしまっ

て、会衆がそろって街へ繰り出した。そのころ吾々もう警察分署にいたのです。下の方からデモの声が聞こえてきて、夜中まで続いていました。やっとその騒ぎがおさまると、吾々は警視庁に連れていかれ、留置場の看守が「社会民主党的Vなあの手の手ととちめようとするのに応じて、こっちももちろん威勢よく討論しました。八魚が水を得たる如くVというわけで、吾々はこういう連中とも上手にやりあう訓練を受けていたからね。そのあげく朝の六時近くに一人づつ釈放されたんですが、通りにはまだ同志たちが頭ばたいて、チョコレートだ煙草だのをふるまってくれました。十ペニヒの銅貨ひとつ手に入れるのもこの同志たちにはむずかしい時代でしたからね、これは大変なことですよ。

クラット

同志ヴァレンティン。あの頃

のあなたはあなた方の仕事を芸術的手段による煽動・宣伝というふうに定義しておられたし、この要求の背後には論争的なアクトセントがあったように思えるんですけどね。この「アジプロV」という概念をどう考えておられたのでしょうか？

ヴァレンティン

これは大きな問題です。できるだけ正直に答えましょう。まず第一にはっきりしているのは、アジプロが党活動の一部門だということ。吾々はそもそもその始めから、KJVDの第一アジプロ隊ということで出発しました。あれはちょうどKPDの第十回党大会や第十一回党大会の後の時期でしたが——吾々はなんとかして党の闘争を助けようと思った。アジプロ隊という名前を自分たちで選んだのですが、これは戦術的な機動的な移動劇団ということが頭にあったからです。この「KJVD第一アジプロ隊」はドイツ労働者演劇同盟ATBDの枠外につくられたのですが、同じ頃この同盟も、党の同志たちの働きかけで左翼化しつつあったわけですね。そのおかげで一九二八年にはこの同盟の再組織がおこなわれ、吾々は二百ないし三百の演劇隊——小さいけれど闘争能力のある集団を持つようになりました。

吾々があえて△芸術的手段による煽動・宣伝△といったのは、芸術ないしは歴史的遺産の価値・無価値について吾々の内部でおこなわれていた、まだ結着のついていない論争を迂回して、まず煽動・宣伝だけを吾々の芸術活動の当面の任務にしようと考えたからです。だから吾々は△アジプロ隊△と名乗って、△芸術または闘争△というような討論には口をはさまなかった——そういう二者択一は間違いだと思つたからです。そういうやり方で吾々は、文化とか芸術とか遺産とかについての間違つた理論に実践を通してぶつかつていこうとした。そうすることでこの問題を積極的なものに転化しようとし、周囲からもそんなふうな理解されまた吾々が創造した大衆の効果のおかげで一般に認められるようになったのです。

クラット でもあなたは文書のかたちでも、闘争価値△芸術価値△論争に参加されたいんじゃないでしょうか？

ヴァレンティン そう。あれはプロレタリア革命作家同盟BPRSの内部での討論で、△左旋回△「Die Linkskurve」のいくつかの号ののっているから、いまでも説める。

圧されている者の生活にはどのみち喜びはないし、革命的な人間には△悲劇△が存在するはずはないからという理由で、吾々の仕事を△諷刺△や△明朗さ△だけに釘づけしようというものもいました。だが私はいつも△アジ△と△プロ△の分離には反対していたし、これは私の一生の仕事についても言えます。煽動の日常的な現在性はまだだんに色褪せていくが、他の要素はますます深く根をはり、比較的長いあいだ効力をもちつづけます。私は煽動家、宣伝家、芸術家として、煽動と宣伝とがいつも補いあいながら動いていく弁証法的な統一になるように努めてきました。煽動の直接的な現在の面がマルクスレーニン主義によって裏づけられ、観客が人間社会の発展法則を認識するのに役立たなければなりません。

吾々がこうした決定的な対決をおこなったのは、本来は二〇年代から三〇年代の始めまでですが、いまそれを振りかえってみると、これは基本的にはリアリズムをめぐる、もつと正確に言えば社会主義リアリズムをめぐる論争だったのですね。そのころ吾々はまだソヴェトの作家たちの論争やゴリーキイの立場についてはまだなにも知らなかったのですが

この論争の頂点は対立する二つの姿勢だと思つています。そのひとつはギエルギー・ルカーチにより、もうひとつはオートー・ゴイチェによって代表されるものでした。まず論争の対象にされたのはウイリー・ブレイデルの最初の小説の出版でした。このウイリー・ブレイデルという労働者通信員はルポルター・ジュネや、プロレタリア出身の階級の同志とのインタヴューや、その家庭——彼自身の家庭だけでなく、すべての意識的労働者の環境——から知ったさまざまな話から出発していた。吾々はそれを、そのころゴイチェがそれを肯定したのと同じように、肯定的に受けとっていました。だがゴイチェがそれを弁護した仕方、そのままに受けとることはできなかった。基本的に正しい立場からそれを非難するものもあったが、これも間違っていた。そのなかには、ルポルター・ジュネは芸術ではないと主張するルカーチの、美事な文章で書かれた大反論もあったわけですが、すでにエゴン・エルウイン・キッシュが△疾走するレポーター△として世界的に認められていたあの時期にね。

これがつまり闘争価値と芸術価値についての論争です。吾々は闘争価値ということ論ね。しかしそういう論争を進めていくなかで吾々はゴリーキイのリアリズムの方向にだんだん舵を向けていったわけですが。

クラット 同志ヴァレンティン。ここであなたの演劇活動のもうひとつの側面——スタニスラフスキーの受容というキヤッチフレーズでまとめてもよさそうな側面に移らせていただくと思うのですが——あなたが始めてスタニスラフスキーと関りを持たれたのはいつ頃ですか？

ヴァレンティン 私がソヴェト同盟でスタニスラフスキーの方法に接近したのは一九三七年から三八年にかけてのことですが、これは二つの側面からでしたね。そのひとつは、最終的にはスタニスラフスキーの二人の弟子フメリリョフとケードロフが仕上げたモスクワ芸術座の『タルテュフ』の演出ですが、私にはこれがすごく気に入りました。もつともその頃の芸術座にはすでに停滞のきざしが現れていて、その後の『ブルイチョフ』の演出では、これがいつそうはつきりしました。このゴリーキイの『エゴール・ブルイチョフ』とその他の人々」という脚本は、芸術座とワフタンゴフ劇場で同時に上演された

理的な問題にした。だがそのなかには芸術も含まれていた。もし吾々が下手な芸術をこしらえたとしたら闘争価値も生まれなかったでしょうからね。したがって吾々の争点は、ルポルター・ジュネが芸術であるかないか、なんてことではなかった。吾々は生活上の事実の芸術的再現のうちにこそ、アジプロ隊特有の可能性があると思っていました。芸術技きの闘争価値なんでものは存在しない。だが吾々にとっては闘争技きの芸術も存在しない。それ以後も私は、古典遺産を評価したり分析したりする場合にもこの公理をかたく守っているつもりです。

クラット それと一緒に、アジプロ活動を△日常当面△の問題にかぎろうとすることにも反対なさつたわけですね？

ヴァレンティン そう、無条件にね。あのころ吾々は、煽動と宣伝のあいだには矛盾があるのが当然だというような見解によくぶつかりました。煽動は日常の問題を内容とするものだから、マルクスレーニン主義の宣伝的、古典的教理に反する場合もありうるというみたいだね。ジャンルとか芸術的手段とかをめぐると論争や対立もそこから来ている。抑

わけですが、その結果、ワフタンゴフ劇場の演出構想の方がはるかにゴリーキイの意図に沿っていることを示していました。もうひとつは、その頃はじめてスタニスラフスキーの「芸術における吾が生涯」を読んだことでしよ。ね。その他のスタニスラフスキーの理論的な著作を知ったのは一九四六年以後です。

クラット スタニスラフスキーとの接触があなたにどんな意味をもつたか、どういう利益をえられたかについて？

ヴァレンティン ひじょうに多くの利益をえましたね。また、自分たちが以前にやったこと、やろうとしていたことを確かめられたという点も大きいですね。おかげで個々の点についてもいくつかの術語を覚えめましたね。たとえば△アンサンブル△という概念ですが、これは吾々が△集団性△と称んでいたこととちつとも矛盾していません。この二つの概念は実にもことに補ないあうもので、それ以後もずっと吾々の道標になった。いや私などはスタニスラフスキーのおかげでずいぶんたくさん新しいことを覚ええましたね——たとえば△心理△物理的行動△という彼の表現もつともこれはあとで、自然科学のその後

のさまざまな発見（ハヴロフ）をもとにして
〔物理的行動〕という言葉にかえられまし
た。メイエルホリドの〔ビオメカニク〕な
んかも最初にはひじょうに機械的なよう
に見えたんですが、ずっと後になってから
は、スタニスラフスキーを補うものとして、
弁証法的な対立物として理解できるようにな
りました。私がメイエルホリドの演出を見た
のは彼がドイツ中を客演してまわったとき
——つまり私の亡命以前——でしたからね。

そのころの私にはこういう——当時吾々が置
かれていた状況から見てもあまりにも表面
的すぎる表現はとでも受け継ぐわけにはい
かないと考えていました。ソヴエト同盟でな
ら、メイエルホリドも、観客が自分の経験に
即して持ち込んで来るものを勘定にいれて仕
事をするのができたろう。だがドイツでは
そうはいかない。どうしても全体としての人
間と話しかけねばならない。後になってから
の私のメイエルホリドにたいする対度、スタ
ニスラフスキーの側に立とうとする私の決断
を促したのは、こんな風にメイエルホリドと
の最初の出会いに満足できなかったためだっ
たためだとも言えるでしょう。そのうえ、ス
タニスラフスキーの場合は、そのすべてが私

ステイックな演劇にたどりつくための可能性
のひとつだとは認めていました。ともかくス
タニスラフスキーはドイツ的な伝統の——た
とえばマイニンゲン一座のような——最もす
ぐれた遺産をめぐりに消化していますから
ね。理性と感情との対置に関しては、二十年
代からすでにブレヒトと私のあいだには意見
が食い違っていました。ブレヒトはブルジョ
ア劇場での感情の裏造に反対したわけでしょ
うが、それが感情一般にたいする闘いのよう
な形をとるようになった。これは弁証法的で
はありません。それにたいして吾々は、感情
という廻り道を通して理性にたどりつこうと
した。感情を動員することはけっして理性を
遮断することではありませんからね。

クラット 一九三八年にあなたはスタニ
スラフスキーについての論文をいくつか発表
されましたね。これはソヴエトでのリアリズ
ム論争と関係があったのですか？

ヴァレンティン そう、もちろんです。
私はスタニスラフスキーの方法、俳優を相手
の仕事、さらに構想を準備するさいの彼のや
り方を、硬化したプロレットタルトや紋切型
化したアジプロ形式にみられるブチブル的な

にとって新しかったとは言えませんが、多く
の点で吾々の努力してきたことを確証してく
れましたからね。

クラット つまりアジプロ活動とスタニ
スラフスキー受容との連続性を強調なさるわ
けですね。でもそれはあなたが、現在の時点
から回想しておられるために、すこし調和的
になりすぎているんじゃないでしょうか？こ
こでちょっと、ブレヒトの「作業日誌」のな
かのある記述をお目につけたのですが。一
九三八年の八月十五日に彼はこう書いていま
す——「ベルリンのアジプロ隊のかつての指
導者マクシム・ヴァレンティンはモスクワで
ブルジョア演劇に移行し、芸術においては感
情に訴えるべきだと説教した——これは理性
を遮断しろという考えとしか受けとれない」
ヴァレンティン その通りなんですよ。

当時の私は進歩的なブルジョア演劇の伝統と
取り組んでいたわけですからね。しかしブレ
ヒトの当時の評価は、全く間違った前提のう
えに立っています。〔赤いメガホン〕の活動
方法や効果は観衆との生き生きした直接の触
れあいから生まれたものです。だが演藝隊の
いろいろの方法を規定していたそういう客観
革命家気取りの反対物だと受けとってしまし
た。二〇年代から私はそういう形式を〔アン
チ・プロップ〕と称していましたからね。も
ちろん十月革命直後の時期の前衛主義的な構
想は力強い生産的な機能をはたしましたが、
社会主義建設の新しい要請にこたえるには不
十分だった。ときにはそういうブチブル的な
な芸術観にたいする厳しい姿勢のために、一
面的に行なったこともたしかにあるでしょう。
部分的には私のスタニスラフスキー論文にも
それが現れています。しかしそんなことより
ずっと重要だと思ふのは、一九四五年以後に
吾々がワイマールの俳優学校でこの問題を唯
物弁証法的な関係におこうとしたことです。
学生相手の実際の仕事のなかで吾々は、本来
の〔プロレットタルト〕のなかにも偉大な革
命的可能性として反映されていたもの、ブレ
ヒトが吾々のなかに持ちこんだものについ
て、学生たちの眼を開こうとしたことだと思
うのです。

クラット ここでもうひとつだけブレヒ
トを引きあいに出させていたきたいのです
が、彼はあなたのスタニスラフスキー読本を
アメリカで読んだらしくて、一九四七年九月

的条件は一九三三年以後はもうなかった。そ
ういう変化した状況のもとでは従来のアジプ
ロ形式をもちいて仕事をつづけることはでき
なかった。私は大衆的な基盤の欠けてしまっ
たこういう形式を紋切型的に受けつづことに
は反対だった。ただはつきり言っておきたい
のは、私はいまでもこうした方法や経験をみ
とめているということです。だが社会主義的
な演劇活動のよく計算しつくされた広汎なプ
ランのなかでもう一度とりあげるために、し
ばらくそれをわきに除けておくしかなかった
までです。

そのころ私の置かれていた状況をもうすこ
し詳しく言いますと、当時の私は、ファシズム
から解放された後のドイツで結びつけるよう
なドイツのリアリズム演劇伝統の断片を探し
出すことに熱心していました。とりわけ吾々
をヒューマンイズムの遺産と親しくさせてくれ
たのはルカーチでした。とくに私の一個とし
てはクライストの『われがめ』のヴァリヤン
トを彼から教えてもらい、これがドニエプロ
ベトロフスタのこの芝居の演出にたいへん役
に立ちましたね。しかし他の点ではけっして
スタニスラフスキーを機械的に受けついでわ
けではありません。しかし彼の方法をリアリ

十五日のところこう書いています——「ド
イツ・スタニスラフスキー読本（オットフリ
ード・ガイラルトとヴァレンティン）を読
む。彼らはそれをワイマールの俳優学校で実
践している。もちろんこれにたいして相対的
価値を与えることはできません……だが注目せ
ねばならぬのは、このドイツ人たちがロシア
の進歩的ブルジョアジーのシステムを、よく
もこんなにまで純粋保存できたということ
だ。ここで練習につかわれている〔想像され
た状況〕のなかに、これまでのところ私はま
だ、階級闘争のなから取り出された実例を
ひとつも見つけていない。……このリアリズ
ムはまことに奇妙キテレツだ。ここでおこな
われているのは〔リアリティー〕のための喪
の儀式だ。そこで主としてあつかわれるのは
ロヨラ（スペインの宗教家、イニズス会の創
始者——S）的なタイプの訓練のおかげで主
観的に感得された現実であり、その目標は、
こうしてつくりあげられ、外界の影響から守
りとおされた自己催眠である。観察をすすめ
ているようなところはどこにもない。なぜな
らそこにあるのは自己観察にすぎず、外界は
単に感覚器官のなかにしか存在せぬからだ」
ヴァレンティン このノートはこれまで

知らなかったな。そういうものが残っているというのには実にいいことですね。実際の話、私にしてもあのドイツ・スタニスラフスキー読本に書いてあることをすっかり納得して、たわけではないのですよ。おそらくスタニスラフスキーへの多様な道を塞いでしまっているようなところもあるでしょう。

クラット 現在ではブレヒトの批判を支持しておられるのですか？

ヴァレンティン 無条件にはいけませんね。たとえばエチュードは簡単な日常的な事柄を内容としなければなりませんからね。もし私が研究生たちに正しく立ちむかっているべきであれば——また学生の方もマルクス主義的な歴史研究で武装されているとすれば、自分たちで弁証法的に考えはじめると、そうすれば彼らのやるエチュードのなかにちゃんと正しいものを見つめます。ひじょうに面白かったのは、たとえば実習で、つまり実際に演技をする場合には、いつも階級関係が統合されたということです、彼らの個人的体験のなかにね。だからそこにはいつも階級闘争があった。ブレヒトの要求は基本的には正しいのだが、吾々の実践について知識をまるで持

たずにおこなわれたものだったのです。

クラット エチュードを演じる場合に、学生たちがいつもなんらかの仕方と、それと彼らの階級的体験と結びつけていたという意味ですか？

ヴァレンティン 彼らは階級闘争のことはあまり口にしませんでしたね。なによりもまず彼らすべてのなかには、ヒトラーの時代に生まれた彼らの理想の崩壊という体験があった。彼らのうちには、終戦の最後の時期にNSDAP（国家社会主義労働者党）の事務所に駆けつけて、偉大なドイツのために戦い、つづけようとした者もいました。ヒトラー時代からもう反ファシズム的な態度をとっていた者その頃から非合法生活にはいりながら、まだ共産主義者ではなかった者もいました。こういう若者たちはみんな彼らの年齢には似あわぬ成熟した生活を送り、自分の目のまえでひじょうに多くのことが崩れさり、ひじょうに多くの新しいことが働きかけてくるのを見てきたわけですよ。彼らのこの間違った理想の崩壊が、そのかわりに吾々が彼らのなかに入っているような隙き間をつくり出していた。吾々はエチュードや役を演じさせるこ

とで彼のなかに入っていただけでなく、なによりも政治的な人格として彼らと向かいあった。吾々が彼らにスタニスラフスキーの見解の研究だけをさせていたように考えるのは間違いですよ。彼らはこの国で象牙の塔に閉じこもっていたわけではない。一言で言えば、「ドイツ・スタニスラフスキー読本」というのは、そういう状態の中に生きていた吾々のために書かれた本です。ブレヒトが吾々の努力を誤解したのは彼自身の立脚点のせいです。いったい彼は吾々についてなにを知っていたのでしょうか……

クラット ブレヒトはドイツへ帰ってからワイマールのあなたのところへ出向いていたと聞いていますが、そのときはどんなことを話しあわれたのですか？

ヴァレンティン そうやってきました。あれはひじょうに突り多い日々でしたが、方法上の問題では完全に決裂しましたね。絶えずひじょうに友好的、同僚的でしたが、かなり頑固に反論しあった末、最後に私はこういいました——「いいかね、スタニスラフスキーについてはこれ以上、君とは討論しないことにしよう。細かい点については、まだ全部

翻訳されていないために、まだ吾々が知らずにいることが山ほどあるんだから」とね。そしてひとつ約束をしました——つまり吾々はこの問題についてはこれ以上論争はしない。お互に自分なりの仕事を実際にやっていく。そうすればこのさきどうすべきかは自づとわかってくるはずだ、ということね。まあ、そんな風にして今まで来たわけだが、どっちが正しかったということではありませんね。やがて合流したとも言えるでしょう。ブレヒトは吾々の学校の卒業生をおおせに使ってくれましたし、彼が五〇年代にスタニスラフスキーを立ち入って研究しはじめたときには、私の方もゴルチャコフのスタニスラフスキー研究の翻訳原稿を彼に貸してやりました。彼の「吾々はスタニスラフスキーから何を学ぶべきか」というノートは、この研究を読んだことが土台になっています。

クラット 同志ヴァレンティン、あなたは三〇年代に、スタニスラフスキーの受容が新しい自由なドイツ人民演劇への道を指し示すだろうと書いておられますね。一九四五年以後のあなたのお仕事、ワイマールのドイツ演劇研究所や、さらにベルリンのマクシム・

ゴリキイ劇場でのお仕事を、反ファシズム闘争の時期に考えておられたことの実現だと見做されるわけですか？

ヴァレンティン そうですね。吾々が亡命中に識ったこと、準備したこと、しかしまた吾々がドイツでの闘いのなから持ち込んだことも、すべてが吾々の努力のなかに取り入れられねばならない、そうした努力のなかで止揚されねばならないのだと思っています。

クラット 私が正しく理解したとすれば、あなたは演劇研究所でのお仕事でスタニスラフスキーの方法の普及だけに還元されるのを望んでおられないように受けとれるのですけれど、ソヴェトから帰られた当時、あなたの主要課題をどう考えていらしたのですか？

ヴァレンティン そうね。これは二つのそれぞれ別の問題だと思えますよ。まず言っておきたいのは、いつもスタニスラフスキーだけを問題にして、たとえばネミロヴィチダンチェンコのことには触れないのは間違っていますね。彼の遺産については吾々は基本的にまだなにもやっていない。彼のものはまだ

ほとんど翻訳されていません。スタニスラフスキーに宛てたネミロヴィチダンチェンコの手紙を読んだことがあります、この二人は彼らの活動の末期には折り合いがつかなくなっていて、手紙だけで付きあっていたんですね。この最後の時期に二人のあいだに大論争があったのは衆知のことですが、これはゴリキイの『どん底』の稽古の成果に関して、ずっと以前から火がついていたものです。この手紙のなかでネミロヴィチダンチェンコは、それまで彼らがいかに感じていたチェーホフとゴリキイとの大きな相違をはっきりさせています。これがとても深刻な政治論なんです。そのほか、スタニスラフスキーがそのアンサンブルの一部をひきいて世界巡演をやっていた時期のモスクワ芸術座をまとめていたのがネミロヴィチダンチェンコだったことも吾々は知っている。その時期にいちばん新しい仕事をしたのもネミロヴィチダンチェンコだったし、スタニスラフスキーの死後、芸術座を指導しつづけて、それにはつきりした相貌を与えて、それを愛したのも彼です。

だからスタニスラフスキーについてだけ話し、党員であり、マルキストであり、しかも実際に仕事を進めるマルキストだったネミロ

ウイチダンチェンコを問題にしないはずはありませぬ。そういうわけで附けくわえておかねばならないのは、私がスタニスラフスキーをただ機械的に継承したわけではけつしてなくむしろ私の以前の仕事とつながることだけを自分のものにしたということです。私が関心をもったのは、ヒューマンイズムの伝統に属する作品を上演するのに役立つかどうかということでした。たとえば遺産の領有、批判的領有ということに関しては、スタニスラフスキーがその「芸術における吾が生涯」のなかで『ハムレット』解釈のさまざまな可能性について述べているところなどもたいへん役に立ちます。彼自身が『ハムレット』悲劇を人類史の転換期としてとらえるために規定した三通りの解釈は、遺産への歴史的な近づき方を教えてくれます。もし私が『ハムレット』を演出するとしたら、その新しい中心問題をあらためて探さねばならないでしょうが、スタニスラフスキーが提起した方法上の処理は、私にとってもきつと原則的には生産的だと思ふのです。私はスタニスラフスキーから生産的だと思えるものだけを受けつぎました。他のことは忘れる方がいいでしょう。

それからもうひとつ、別の問題について話

そうと思ふのですが、これは一九四五年にドイツに戻ったとき、吾々がなにをしようとしたかということと関係があります。だがここでは、この国の今日の演劇状況にとってとくに重要だと思われる側面だけに、つまり「アンサンブル活動」の問題だけにかぎることにしましょう。吾々は「アンサンブル」があらゆるアンサンブルをめちやめちやにしてしまった後で、一九四五—四六年に吾々の建設作業にとりかかりました。そのころ吾々がひじょうに重視したのは「アンサンブル」という概念だった。そしてまず考えたのは「アンサンブル俳優」、アンサンブルのための演出家、アンサンブル演劇の指導者を養成することでした。吾々の研究所を出た若い幹部たちはドイツ演劇を方法的に改革できるようにならなければならない。

吾々は始めからそういうアンサンブルの幹部が、すでに活動をはじめた劇場の内部に入りこんで内側から演劇生活の改革しなければ駄目だとはっきり言っていました。一九四五年度の擁護の中でまず必要だったのは新しい演劇芸術の前提をつくりあげることであり、それこそがアンサンブルの中核の仕事だったわけです。彼らが演出構想を科学的な基盤の上

につくりあげるための、もっと具体的に言うなら、遺産や芸術全般にたいするマルクス主義的な姿勢を身につけた人々を育てるための保証にならなければならない。想像してごらんなさい——全くなんにもなかったのです。なんのまとまりもなかった。だれのために演じるのか、どんなふうにして演出構想をつくりあげたらいいのか、これもわからなかった。だが、またこのアンサンブルという考えだけを絶体化し、呪物崇拜して、アンサンブルの統合的な機能だけを判断基準にするわけにも行かなかった。

大切なのは——これは今日でも十分に考慮されずにいる場合が多いと思ふのですが——演劇活動が絶えず社会の進歩に即応し、それに参加することです。あのころ吾々が「アンサンブル」活動に努めることで解決しようとしていたいちばん重要な課題はこのことだった。だが社会の進歩とともに演劇活動への要求もまた変わって行くわけですからね。自分たちのアンサンブルがまだ本当に生産的であるか、それともルテイン化してしまっているかが厳密に検討されなければなりません。

クラット 同志ヴァレンティン。これが

らのこの国の演劇活動その発展方向についてはどう考えておられるのでしょうか？

ヴァレンティン そう、それにはいろいろの側面があると思ふますね。しかし基本的には演劇人たちの進歩性——吾々の社会の成長に連れて起きてくるさまざまな葛藤にたいする、さらにマルクス主義的な方法によるこの葛藤の解決にたいする彼らの姿勢にかかっていると思ふますね。大切なのは、吾々の社会の新しい発展にともなうさまざまな問題にたいする基本的な姿勢であり、それを前提として、重要な古典作品をいろいろな側面から解釈した演出をやることも可能だし、可能になって来ようと思ふます。私の言っているのはいろいろな視点からみたいろいろな演劇のことです。たとえばカルゲとラングホフは彼らの『群盗』の演出で、それを試みたように思ふのですが、残念ながら、他の劇場がカルゲとラングホフの解釈とは別の側面を示すという借りを背負ったままです。そのために、多くの才能を示し、古典の領有のさいに現代の重要な要求を忘れなかったこの演出が完全な効果を發揮できずにしまったのではないでしようか？

クラット いっぺんに三つも四つもの『群盗』演出が必要だとおっしゃるわけですか？

ヴァレンティン いっぺんにというわけではないが、ある特定の期間にそれがおこなわれれば、観客はいろいろな違った演出をひとつの複合体として感じられますからね。

クラット 普通の意味での演目の取り合わせということも考えねばならないし、ベルリンではそう簡単にはいかないでしょうね。

ヴァレンティン ベルリンだったら、二つの劇場が『ファウスト』なり『群盗』なりを同時に上演するぐらいのことは訳はないと思ふますよ。そしてこの二つの上演が補いあったり、背中あわせになったりする面があるおかげで、観客への魅力も増してくるし、そのことが観客の芸術にたいする判断力を進歩させる——ブレヒト流に言えば「観劇術」を発達させるという結果をよびおこす。そもそもDDR的な建前からすれば、ひとつの劇場が他の劇場で上演中の作品を上演することは可能ですよ。実際に起きています。ただそのため、あくまでも独自の構想を展開するという課題を自分に与えなければならな

い。そうしてこそ始めて、それぞれの違いから、それぞれの領域を超えられるような討論が生まれるわけですからね。もちろんあらゆる観客が必ずあらゆる公演を見ることを期待するわけにはいかないでしょうが、その両方を比較してみせる批評に刺激されてついみんな見てしまうってこともありますからね。古典的な作品はひじょうにたくさんある側面を持っていて、今のところひとつの演出でそのあらゆる側面を正しく表現することは期待できそうもない。それよりはむしろ、別の観点から出発して、その構想を自分たちに特有の能力で実現する他の集団の補充的な活動が前提として必要でしょう。

クラット そのお考えは、ヒューマンイズム遺産のさまざまな作品はさまざまな時代にさまざまな仕方でも演出できる——そこで受け入れがおこなわれるさまざまな具体的な歴史、審美的前提条件がわねに演出の性質や方法も決定するということを背後に置いて考えれば大変重要だと思ふます。あなたがなさった『これがめ』の演出はその方法上の実例ですからね。

ヴァレンティン 全くその通りです。

『これがめ』のそれぞれ違った二つの演出（一九三三年の直後、このベルリンである演劇クラブの連中と『これがめ』の演出にとりかかり、ヒトラーに妨害されたことがあるので本当は三回なのです）が、それを立証しています。後に吾々がドニエプロベトフスキの県立劇場でやった『これがめ』は、吾々がベルリンで手をつけはじめたものとは全然べつものにならざるをえませんでした。そこでは吾々はこれまでクライストとも、彼らの過去ともなんの関わりも持たない観客、ドイツ系の集団農場農民の諸状況から出発しなければならなかった。そのくせ吾々は、後にDDRのベルリンで上演したさいにも利用できたようないろいろのことを発見しました。だが吾々はベルリンではドニエプロベトフスキでの演出の形式上の成果からは出発せずに、もちろんクライストについて以前に研究したことをもう一度とりあげたり、先へ進めた点もたくさんありましたが、なによりもまず吾々が置かれたこの国のさまざまな状況から改めて出発しなければなりません。決定的なのはいつもこのことですからね——そうでしょう——だれのために演じるのか？どんな階級の立場に立って演じるのか？



最後にもう一言、△アンサンブルVの問題について述べて置きたいのですが、私の考えでは、この国の演劇の今後の発展は、ひとつひとつの劇場集団をつくっているさまざまな創造的な力の組織に成功するかどうか、どこまでそれに成功するかにかかっているように思われます。大切なのはこうした集団の形成しているアンサンブルの核をつくりあげ、成長させること、それと一緒に、それぞれのメンバーの彷徨変異と共同作業をどう調和させていくかということ。吾々が階級の政策のうえでなにをやりとげられるかも、それにかかっていると思います。

（「ワイマール提言」一九七六年第六号）

千田先生は、この訳稿をさりげなく下さった。実はもう一つあって「マクシム・ヴァレンティンの美的位置」という同じクラット女史のもので一対にしてよむと、ヴァレンティンの人と仕事が可能明瞭になる。しかし相当にむづかしい。それにぼくらにとって、ヴァレンティンの研究ということもさし当てるの仕事にはしにくい。そこで全く贅沢な話だが、比較的解り易い、この「聞きとり」の方だけを頂いた。それにしてもこれは、実に興味深い読物だ。日本のプロレタリア演劇がどこで断れて、戦後の日本の新劇がどんな道を歩んでいるかを照応させると、何かくっきりとしてくるものがある。

ぼくも、ヴァレンティンに就ては全くの門外漢だが、「プレヒトの作業日誌」における岩瀬達治氏の訳註によると、マクシム・ヴァレンティン（一九〇四年—一九四四年）は俳優。一九二七年にベルリンで中央アジアプロ劇団を設立。三三年モスクワに亡命し、スタニスラフスキーシステムに傾倒する。戦後、東ベルリンのゴリキー劇場の総監督、とある。プレヒトとの相当はいつか機会があったら更にお聞きしたいものと思っている。（萩坂桃彦）



関西における戦前プロレタリア演劇の研究（二二）

大岡欽治

大阪地方のプロレタリア演劇

日本プロレタリア演劇同盟

（プロット）大阪支部の活動

一九三二（昭和七）年

一九三二年、遂に日本に戦争とファシズムの嵐が流れはじめた。この年、満州事変がはじまり、三二年には、年が明ける早々から上海事件が起り、世相は急速に軍国主義の風潮に踊らされてきた。

このような時点において、三二年十月に日本プロレタリア文化聯盟（コップ）が発足したことは、戦前の一つの重要な時点として忘れられないことである。

プロレタリア文化—芸術の担い手である各ジャンルの統一と、それぞれの分野での斗争が当然要請されてくる。

治安維持法の重圧、特高警察の暴力に対抗して押し進めて行く努力は、これまでの数倍の精力が必要になってくる。

プロットもコップの一翼として、演劇運動を押し進める一方、全体としてのコップの活動にも積極的に参加しなければならない。

東京という中央だけでなく、それぞれの本来の場所である地方においても、その活動は要請されるのである。

コップ大阪支部の結成については、すでに本誌第三〇号（本稿一七回）において、三二年十二月三十日に結成されたことまで書いた。

それは、三二年に入って、いよいよ具体的な活動に入ったので、その最初の段階の状況についてだけ報告を加えよう。

コップ機関誌「プロレタリア文化」三二年二月号（第二巻第二号）に載っている「コッ

プ地方協議会ニュース」から、大阪の部分だけを抜いてみると、創立当時の活動の方向がわかる。プロット大阪地方支部からは二名の協議員を送って協力している。

コップ第一回大阪地方協議会報告

出席 プロット プロキノ 作家同盟 P M

プロエス 医療同盟 産労

欠席 戦無 P P

△議案▽

一、各同盟団体の活動報告

一、芸術協議会結成の件

一、組織協議会の件

一、PM拡大強化の件

公演活動の時、メンバー必要の時、プロット書記局を通じ依頼する

一、文化聯盟宣伝の件

一、三Lデーを有効に活かすこと

産労と作同協力のパンフを出す

コップ第二回大阪地方協議会報告

出席 作同 戦無 療同 P P P M P E
U プロット ブロキノ 産労

〈議案〉

一、加盟各団体活動報告

一、芸術協議会報告

文化聯盟結成によりナツプは解消したので新たに文化聯盟内の各芸術団体により統一の積極的運行のため、連絡協議会機関として、芸術協議会を結成

一、文庫書記局強化の件

一、農民協議会結成の件

議長に九木(プロット) 決定

一、婦人協議会結成の件

一、コップ大阪地方協議会議長推薦の件

小岩井浄氏に交渉

一、労働クラブの件

各地区に労働者クラブ組織の促進の方向をとり、文化サークルとの密接な関係を考慮する。

一、出版活動の件

一、移動文化隊の編成の件

現在芸術団体を除いて、各文化団体に

於ては芸術団体と共同で移動活動をもつまでに至っていないので、さしあたり芸術部門だけによって、移動隊を編成し、必要に応じて移動文化隊に発展させる

一、文庫結成を大衆的にしらす件

一、朝日会館ポイコットに対する件

反動性を大衆的に暴露すべきだとの意見も出たが、そうすることによって今後の活動舞台を狭める虞れがあるので、全体的な観点から、むしろ沈黙の形をとるか、若しくは美術家同盟がやる抗議等に於ても、技術的に最善の方法を講じて、どこまでも会館をして、再び活動舞台として獲得する方向をとること。

一、旗ピラキの件

一、プロレタリア科学研究所大阪支所確立の件

しかも状況は刻一刻と進展の速度を進めていく。プロットは、前年、プロット第四回大会に於て、劇場同盟から演劇同盟へと大きく転換

しているのだが、この急速な事態に、更にビッチを上げて活動を進展させなければならぬ。二月十五日を中心に国際演劇デーを闘ったあとだが、また大会は二年に一回という規定もあるので、急速方針を渗透させるために、三月二六、七日に、東京で拡大中央委員会を開催することになった。

そこで、大阪地方支部からは、九木義夫と谷繁郎の両名を派遣して、委員会に参加させることになった。

これは委員会であるが、約半年の間に起った、新しい社会状況に即応する方針をきめる点では、重要な意味を持った会議なので、プロット機関誌「プロット」(三二年六月号)に載った中央委員会経過報告書の概要を示してみよう。

プロット拡大中央委員会
経過報告(抄録)

自一九三二・三・二六

至同 二七

第一日 出席者 二七名

(東京一九 大阪二 京都二 愛知二 黒石二)

自午前十一時半、至午後七時

一、開会の辞(鷺崎)

二、議長、副議長 決定

議長 村山、副議長 植村(可決)

三、常・中・委 一般報告 (鷺崎—中止
吉谷—中止、浮田—中止)

第四回大会以後五カ月間に於けるプロットの活動の成果と欠陥について
質問、意見—

a 大阪地方支部より、同地方活動報告、若干の訂正意見あり

b 黒石農民劇場より質問

四、常・中・委 各専門部報告

A 組織部(中村—中止)

a 地区委員会は協議機関か執行機関か(支部執行委員会の指導を実践的に発展せしめる限り指導的任務を持つ連絡協議機関である)

b 地方支部の名称について
(煩雑になるので「支部」に統一)

B 教育部(生江)

婦人問題研究会(沢村)

農民問題研究会(矢口)

C 出版部 (植村—中止、生江代理)

D 調査部 (土井)

E 財政部 (峰—中止、土井代理)

F レバトリリー委員会(鳥)

G 書記局事務報告 (吉谷)

五、各地方支部報告

A 青森地方支部準備会 (堀田)

B 東京地方支部 (島田)

第二日 出席者 二九名
(東京二一 大阪二 京都二 愛知二 黒石二)

五、各地方支部報告(続き)

C 愛知地方支部 (神谷、松原)

D 京都地方支部 (蒲路、阿部)

E 大阪地方支部 (九木義夫、谷繁郎)

F その他の地方支部—中央委員出席せず。常中委報告に代える。

議事

一、国際的運動の件 (村山—中止)

二、民族演劇の件 (小野—中止、村山代理)

I A T B 極東書記局の確立によって強化する

三、××主義××打倒の件 (笈川—中止)

緊急動議(松原)

拡大中央委員会の名に於てI A T B プレジデイウムへメッセージを送る件

四、演劇に於ける弁証法的唯物論の件(杉本)

五、急進的演劇に関する件(土井)
同伴者劇団内のフラクション活動を計画的に強化し、それと相俟って新興劇団協議会、学生演劇聯盟等を自主的に活動させることによって、同伴者演劇に対する我々の影響を確保しなければならぬ。

六、ファシズム、社会ファシズム打倒の件(生江—中止) 峰代理—(中止)

七、同盟員生活擁護の件(九木—大阪)
現在同盟員は従来よりも一層貧困に苦しめられている。それをいささかでも食い止め得る路は、我々の活動を強化することによって、我々に対する大衆の支持を高めること以外にはない。

B その意味に於て、東京に於ける劇場経営の経験を充分科学的に詳細に、各地方支部に知らせること、各地のそれに対する東京からの批判と注意を精密にすることが必要である。

C 同盟費五十銭は多くの同盟員にとって全く過重な負担であるという考え方は誤っている。よしんば、バット代、電車賃を節約してでも同盟費は完納し

なければならぬ。金額は機関誌、新聞その他を含む最少限度なのだから。

八、××の競争の件(鷺崎)

A 競争に対する日和見主義の立ち遅れの克服

B 第一回世界大会の成功的遂行に努力

C 国内的にはコップ加盟各団体との競争

九 農民演劇の件(矢口)

我々に加わる政治的抑圧に関する件

十一 ソヴェート同盟 中国×××の件(浦路)

十二 スローガン改正の件(鷺崎)

改正草案の重要な部分が説明を禁止され、発表されたものは不十分なばかりで誤りさえ含んでいるので、提案者自身から否決を要求し、決定を常・中・委に任すること

十三 閉会の辞 (村山) <解散>

新スローガン 決定

国際労働者演劇同盟日本支部、日本プロレタリア演劇同盟のスローガンを 吾が常・中・委は左の如く決定する。

一、植民地再××、ソヴェート同盟××、中

国××の圧×を企てる××主義××を打倒しろ!

一、ソヴェート同盟、中国××を×れ!

一、ファシズム、社会ファシズムを打倒しろ!

一、創造方法におけるレーニン主義的段階の確立へ!

一、我々の組織を金属、化学、電気、交通、織維、鉱山の大隊營、重要農村に集中せよ!

一、農民演劇、同伴者演劇をプロレタリアートのヘゲモニーのもとに!

一、演劇サークル、自立的演劇の拡大強化を以て、文化聯盟ぶっつぶしの陰謀を粉碎しろ!

一、ファシズム・社会ファシズム演劇を撲滅しろ!

一、国際労働者演劇同盟極東書記局の確立・東洋諸民族の××的演劇運動の発展方針!

一、××競争を通じて第一回世界大会の成功的遂行へ!

(以下解説略)

附記——ここで問題にされたスローガンはプロットの全般的運動を押しすすめるため、多分に綱領的意味をもったスローガンの

である。各機関、各地方組織、各劇団等々にはそれぞれの具体的特殊性に応じて、この基本的スローガンから出発したそれぞれのスローガンを掲げることが望ましい。特にその場合には労働者、農民に親しまれ易い言葉で具体的に云わねばならぬ。

以上、簡単に紹介したが、同誌には、その時の一般報告の全文が掲載されている。長文なのでその項目だけあげてみて以下のように構成されている。

日本に於けるプロレタリア演劇の大勢並にその展望

一、ソヴェート同盟に於ける文化II演劇革命

二、日本に於ける文化II演劇反動

三、動労大衆の文化的欲求の成長と、社会ファシストの応え

四、我々は何を為したか?

——第四回大会以後の五カ月間に於ける我々の活動の成果と飲陥

A 我々の活動の成果

1 文化聯盟の結成と、その活動への参加について

2 上演活動について

a 公演活動

b 移動活動

3 組織活動について

4 教育活動について

5 出版活動について

6 国際的運動について

7 その他の活動について

B 我々の活動にあらわれた諸飲陥。

1 「立ち遅れ」について

2 すべての活動が未だ経営に集中させられていない

3 日常闘争主義

4 創造に於けるレーニンの段階確立の斗争が不十分である

五、結語

さて、ここに面白い一つの文献がある。前にも書いたことがあると思うが、司法研究第二部第十四回研究員、名古屋区裁判所検事

平出木、という人物の自由研究の結果、司法部内に於ける参考資料として配付した「プロレタリア文化運動に就ての研究」内の「第

四章 演劇運動」内の「第一回拡大中央委員会及新スローガン」(一八八—一九頁)の項で、前記の検察側の報告書でもある。スローガンの欠字が埋められているのが注目されるが、これが全文である点に、彼等のスパイ能力も判定出来るだろう。

コップ加盟演劇同盟の第一回拡大中央委員会は、昭和七年三月二十六、七日の両日、厳重なる取締の中に開催され、(1)帝國主義戦争に倒、(2)ソヴェート同盟、中国革命の擁護、(3)ファシズム、社会ファシズム打倒、(4)国際的運動の諸問題を執拗に取上げて議題としたが、スローガン改正の件は議決することが出来ず、之をプロット常任中央委員会に一任し、常中委は同年六月之を議決した。其の新スローガンと前年十一月第四回大会決定の旧スローガンの主要な相違点は左の通りである。

一、植民地再分割、ソヴェート同盟干渉、中国革命の圧殺を企てる帝國主義戦争を打倒しろ!

一、ソヴェート同盟、中国革命を守れ!

一、ファシズム、社会ファシズムを打倒しろ!

一、ソヴェート同盟、中国革命を守れ!

一、ファシズム、社会ファシズムを打倒しろ!

一、ソヴェート同盟、中国革命を守れ!

一、ファシズム、社会ファシズムを打倒しろ!

一、ソヴェート同盟、中国革命を守れ!

一、ファシズム、社会ファシズムを打倒しろ!

一、ソヴェート同盟、中国革命を守れ!

ろ!

此の一連は従来の「文化主義的偏向」を克服して「政治的スローガン」を敢て追加したものである。

一、創造方法におけるレーニン主義的段階への確立

旧スローガンが掲げた「弁証法的唯物論」を以て抽象的であるとなし、レーニンIIスターリン的段階に迄発達した哲学戦線に倣って、その達成を演劇の創造方法の領野に適應する為の努力を必要とするというのである。

しかし、このように斗う姿勢が整えられている間にも、強圧はますます露骨になってきた。中央委員会開催後に、プロットの指導部の検束が進められた。

プロット機関紙「演劇新聞」第十四号(三二年四月廿日発行)に、次の記事が見出せる。

去る三月二十四日のプロレタリア文化聯盟中央協議会書記局員の検束を切っかけとして支配階級は公然たる文化聯盟ぶっつぶしの陰謀計画を押し進めている。プロットでも既に

十数人の同志が検束され、残虐な△問を加えられていた。更に奴等は、今、築地小劇場でメーデー準備公演を闘っている左翼劇場の同志達を引っぱって、この公演をぶっつぶそうとまでではじめた。

現在検束されているプロットの同志は次の諸君たちだ。

村山知義、小野宮吉、生江健次、吉谷慎矢口文吉、北原幸子 (左翼劇場)

箕川武夫、土井逸雄、島田敬一、寺田靖夫

(新築地)

平野郁子、沢村貞子 (メザマシ隊)

(以下略)

この顔振れの内には、中央委員会、報告提案を行った人々の名と重なっている。これは委員会以後における暴圧であるのは明らかである。

さて、ここで、また本筋の大阪における運動はどう進められていったかに戻ってみよう。

プロット大阪地方支部は、大阪戦旗座のI A T Bデー参加「装甲列車」の公演を二月に終えたあと、三月に大きな発展を示す事件が起った。

一つは、構成劇場が、プロットに加盟を申請して、それが承認されたことである。

一つは、その勢力拡大を期に、大阪戦旗座の移動劇場が独立して、専門的移動劇団メガホン隊を創立したことである。東京支部は専門劇団として、東京左翼劇場と新築地劇団、移動専門劇団としてメザマシ隊があり、その活動は、全国のプロット劇団の指導的地位にあったが、今回の大阪での専門劇団二つと移動劇場の創立とは、東京に並んで、西日本拠点である大阪を中心とする活動の活性化を物語るものであろう。

この三月には、その構成劇場の公演もあり、拡大常・中・委への出席、また大阪地方支部の前記コップ大阪地方協議会への参加、支部組織部の活動、宣伝紙「健達と芝居」の発刊、支部総会開催準備、国際演劇資料展の開催、プロレタリア演劇巡回学校学生募集、大阪戦旗座次回公演準備、新しく移動劇団メガホン隊の活動開始など、ほとんど三月下旬に集中して行く状態におかれたのだ。

これらの仕事を、これから一つ一つ点検し行ってみよう。

構成劇場という劇団については、すでに本

稿においても屢々その名前と発生以来の劇団行動について触れてきている。

武者小路実篤の「新しき村」運動の影響から出発して「横源座」という名称だったが、やがて、それを脱皮して「構成劇場」となり社会大衆党系の路線を選んだが、大阪戦旗座の働きかけによって、次第にプロットの線に接近、ついに戦旗座と共同公演をもち「太陽のない街」の圧倒的成功を経て、プロット加盟へと踏切るに至った。

これには前年の新築地劇団がプロット加盟が実現したことも大きく作用していると思えてよいだろう。

この構成劇場のプロット加盟と、大阪戦旗座から独立したメガホン隊の創立について、プロット大阪支部が発表した声明書をまづ先あげ、続いて、構成劇場の加盟声明書とを次に挙げてみよう。

構成劇場のプロット加盟及び

メガホン隊の創立に際して、

吾々は今二つの事を報告することの出来るのを大きな喜びとする。

吾がプロット大阪支部は、昨年末より組織を変更し当面せる切迫せる、社会情勢の内に

精神的活動を行うために努力してきた。特に二月十五日をスタートとする国際オリムピアデーに参加することによって従来の立ちおくれを克服することに全力を挙げてきた。此の時に際して、昨年十一月にあらゆる困難と誤謬を付けて、戦旗座と共同公演を持ち、大衆に正しき方向への第一歩を示し、其の後の活動を正しくプロットの線に沿って進めて来た構成劇場は、プロット常中委によって、正式にプロット加盟劇団として承認された。

吾々はこれにより、従来大阪地方のプロット加盟の専門劇団戦旗座に、構成劇場を加えることにより、今迄の不足した公演活動をば強力に遂行し要望に添うことが出来るだろう。

第二に、吾々は、構成劇場のプロット加盟と共に、大阪地方プロットの力の拡大によって、当面最も大きな問題の解決に全力をあげた。即ち、戦旗座と構成劇場との公演専門劇団を持つことによる公演活動の強力化と共に、従来の戦旗座内の一専門部に過ぎなかった移動劇場部を独立して、演芸団の確立を問題にした結果、遂に移動演劇団として、大阪

メガホン隊の創立を見るに至った。

吾々の運動が、公演活動と移動的活動の相互関係の上に立たなければ充分なる効果を挙げえない。単なる戦旗座内の一専門部門としての移動活動では充分に公演並に移動活動をなし得ないことは、吾々の従来の活動が充分に説明している。

吾々には以上の如く、公演専門劇団として戦旗座・構成劇場、移動活動の専門劇団として大阪メガホン隊を、プロット大阪支部の内に包括する全国的にも重要な支部となった。

吾々はこの二つの成果を、国際演劇オリムピアデーの最只中にかち得たことを喜びを持って発表すると共に、益々強力に吾々の活動を押し進める事を誓うものである。

構成劇場のプロット加盟萬歳！
大阪メガホン隊確立萬歳！

プロット大阪支部拡大強化萬歳！
日本プロレタリア演劇同盟萬歳！
国際演劇オリムピアデー萬歳！

一九三二年三月

国際労働者演劇同盟日本支部

日本プロレタリア演劇同盟

大阪支部

プロット加盟に際して
大阪地方の労働者、農民、及び勤労大衆諸君！

反動の嵐吹き捲る一九三二年のメーデーの前にして、我々構成劇場は、諸君に熱烈な斗争の挨拶を送る。

××ブルジョアジイの最後の切札は××××を契機として、あらゆる機関の動員を以てファシスト独裁の路へ急いでいる。そのため一切のブルジョアの文化手段と共に、日本のブルジョア演劇は封建的義理人情と、官能の美的自己陶醉を捨てて、その反動的階級性を積極的に現わして来た。この新しき彼等の積極性に烈しく対立するプロレタリア演劇は、労働者農民及び勤労大衆の高まりつつある××××的文化的生活的欲求と、一貫せるインテリナシヨナリズムの上にならぬ、××階級への果敢なる斗争を押し進めなければならない。

此重要時期に際して、我々構成劇場が正しく生き抜く道はただ、一つしかなかった。昨夏過去の一切の誤謬を清算して、関西新興劇団協議会へ加盟して以来、あらゆる内外の障害と戦いながら一意プロットの旗の下に向っ

て進んで来た我々は、其斗争過程の中から自己の任務の重大性を更に強く認識することによって、最早一日と雖もプロットの組織外に在ることの矛盾性を意識し、二月一日の総会に於てプロット加盟申込を決定したところ、プロット常任中央執行委員会は、二月十五日（輝かしいI・A・T・Bデー）に我々の正式加盟を承認された。

劇団創立以来満四カ年、その歩いて来た道は一個の人間の正しい成長の記録であり、一組織的集団の弁証法的発展の歴史である。かくして、我々構成劇場がプロット加盟の意義は二つの重要性を持つ——即ち(一)は、××の経済的の連関性に於て重要な位置を占めている大阪地方に於て、専門劇団としては戦旗座が独り活動を続けていたのみであったところのプロットの力を強化拡大したこと。

(二)大阪地方に現存する多くのプチブル劇団、或はインテリゲンチヤ及小市民層に対して、プロレタリア××へ向って彼等の進むべき道標を確立したこと、とである。

それと共に、我々の当面する任務の徹底遂行は、国際オリムピアデーに於て、各カンパニヤを通じて各地域への進出による大小の公演活動に於て、又戦旗座其他の同盟内劇団と

の共同斗争に於て、諸君の前に精力的に押進められるであろう。同時に、かかる斗争を強化し、プロレタリアートの××的勝利の日に向って如何なる困難にも屈せず、常に諸君と共に戦列に伍することを堅く誓うものである。

構成劇場プロット加盟萬歳！
プロット大阪支部拡大萬歳！

ファシズム、社会ファシズムの演劇運動を××しろ！

国際労働者演劇同盟萬歳！

一九三二年四月二十日

国際労働者演劇同盟日本支部

日本プロレタリア演劇同盟加盟

大阪 構成 劇場

また、メガホン隊の発足については、次の二つの資料を示そう。

一つは、プロット常・中・委の報告書で、プロット機関誌「プロット」(三二年四月号)に掲載されたもの。

一つは、プロット大阪支部組織部発行の「俺達と芝居」第二号(三二年三月二十八日発行)に掲載されたものである。

A註V 「俺達と芝居」については、次号において説明する。

プロット常・中・委、書記局による「二月、三月に於けるプロット各地活動報告」の大阪地方の項には、メガホン隊について、次の如き記事がある。

☆メガホン隊、誕生す。

大阪地方支部は、構成劇場の正式プロット加盟により、力の拡大を見、従来戦旗座内一専門部だった移動劇場部を独立せしめ、移動専門劇団「メガホン隊」が生れた。誕生早々、活動は目覚しく、東京メザマシ隊と共に、プロット内の強力なアチプロに劇団として、今後の発展は期待されなければならぬ。

移動演芸団専門

大阪メガホン隊が生れたぞ！

これ迄戦旗座の内部に移動演芸団と云うのがあって、労働者諸君の集会や、ピクニック、又はストライキ等に、詩の朗読、落語、

カンタンな芝居、斗争歌等の持ち込みをやっていたが、戦旗座が公演をやる場合には、移動活動を休まなければならなかったので、労働者諸君に非常に迷惑をかけたが、今月、戦旗座から独立して、戦旗座の公演の最中でも、何時、何処へでも出動出来る様にと、メガホン隊が生れて諸君の希望に添う様、隊員一同熱心に活動している。

諸君が、例え四人、五人しか集まらない場所でもいい、「メガホン隊」を呼んで、其の集会を有意義に終らす様な方法を積極的に取って欲しい。

ストライキの場合等は、何故ストライキが起ったか、又このストライキ中に、こんな面白い話があった等と云う様な事を、一週間程前に申込みと同時に、くわしく話して貰えば、それを簡単な芝居の中に折り込んで演る事が出来るので、非常にアチが利くと思う。

メガホン隊の芝居は、舞台もいらなければ、花の様な衣裳もいらぬ、ほんとうに着のみのままの芝居だ。

サークルの人達も、うんとこのメガホン隊を利用して、何も知らない職場の人達をどんなサークルの中へ引っ張り込む様な方法を取って欲しい。

費用なんかはいらぬ。若し出来るなら、

交通費だけ出して貰えば大変有難い。

メガホン隊を自分のサークルへ呼んで、ピクニックなり、集会なりを一月に一回でもいい、持つ様にサークルの世話役の人や、個人プロット員達は活動しろ。

申込所(成可く一週間程前に申込んでくれ)

北区中野町三丁目九三

戦旗座事務所内 メガホン隊へ！

(くっく)

(21頁より)
「ひしめきあう不毛の季節から」の研究
現代にドラマはないのか？

戦争をつきぬけ、戦後の民主主義の昂揚を体験し、歴史の前進を信じ続けてきた作者の世代からみれば現代ほどむなしなものはない。我々が生命をかけてきつぎあげようとしてきた世の中はこんな管ではなかったというおもい、いきどおりと自分の存在への不安すら、ある。「明治にはドラマがあったが、しかし……」とこばやし氏は自問する。「現代はどこにドラマがあるか？」と。「ひしめきあう」で現代を(従って未来を)手に入れようとする苦闘し、従来のリアリズムの手法を自ら破壊し、自分自身傷つき、怒罵しながら先頭をすすむこばやしひろしを、昌夫のラストシーンにだぶらせて見るおもいがする。私も節子のように立止ってはいけなないと思っ



劇団通信

アンケート依頼の要領

- ①一九七七年をむかえての展望
- ②本年上半期のスケジュール
- ③最近の特長的な公演活動
- ④わが集団における問題点
その他

(通信はほぼこれに準じて答えてある)

演劇サークルやき

謹啓。烈寒の候、編集局の皆様本当に御苦勞様です。さて私達演劇サークルやき、昨年12月25日の総会、今年1月23日に旗びらきを行い、七七年度の公演予定及び役員選出を行いました。

◇七七年年度公演スケジュール

4月24日(日) 第一回青少年劇場

木下順二・作「陽気な地獄破り」

演出・宇間太郎 於・伊丹中央公民館

9月3日(土) 第一回市民劇場

「若者たち」 演出・山本哲也

於 伊丹文化会館

12月11日(日) 第二回親子劇場

児童劇(脚本選定中) 演出・永野希民子

於 伊丹中央公民館

◇役員改選

代表・山本哲也 事務局長・宇間太郎
(東・西リ演担当) 書記・山田みどり
・永野希民子 会計・中崎真起子

◇昨年12月初めての親子劇場では、移動公演を含めて約八〇〇人の観客を動員し、児童劇が多くの子供から望まれていることを痛感しました。又新人育成を今年に重点におき、演出の養成・演技者の育成に力を注ぎたい考えです。本年も全国の皆様の御協力・御支援をお願いいたします。敬具。(宇間太郎)

(伊丹市千僧字船原20-9坂上方)

世仁下之一座

世仁下も5年目に入り、東リ演の課題に答える様な創作集団へと成長発展してゆく年であると考えていますが、同時に、まわりの我々に対する欲求とは裏腹に、妊娠等の理由により第一線のメンバーが数名一時的に可動不能になるといふ時期でもあり、厳しいところでもあるわけです。

七七年は3月末自主ゼミ、6月25日四谷公

会堂にて第2回研究公演(創作中)を企画、

七六年は11月12・13日の2回公演「賽の河原の船遊び」を終りまして、きびしい批判を多くの方々よりいただき、勉強に拍車をかけています。集団員の拡大が今年度の活動を左右すると思います。(岡安伸治)

(東京都練馬区羽沢二一三第一美好荘)

劇団レオ

① 劇団員の確保(募集、基礎訓練)

・出稼ぎに焦点をあてた創作劇をつくる

・劇作宣伝の体制を固める

② おやこ劇場公演「うぐいすの尻」(創作劇)の上演

・人形劇の映画を制作する(劇団の宣伝をかねて移動上映したい)

・定期公演の創作劇台本の練上げ

③ おやこ劇場公演「ももくり物語」(創作劇)

・劇団員の相次ぐ病氣、転勤、退団

・休団で、全く不意なできであったが

・ミニ・シカル風な民話劇をやる見通し

・が見えたことが収穫であった。劇団員を

・ふやすことが今何よりも重要であり、制

・作体制の弱さも反省された。

・近代映協の「竹山ひとり旅」に出演した

・り方言指導した。

④ 経験者が次々と退団、休団し、今団員の補充が深刻な問題である。又、当劇団が主体になっ

ている劇をみる会と、おやこ劇場の赤字がのしかかっており、この解決も迫られている。何はともあれ、若い団員の演技力、演劇運動に対する意欲をどうもりたて、育てていく

かが、重要な問題であり、再出発の気持ちでスタートしたいと思っている。

追伸・誌代の送金うっかりしてまして申訳

劇団いこら

厳寒の折柄御元気ででしょうか?

34号の発言欄に書いていた事務局長の佐々木敏明が二月十三日投票の金屋町議選に出馬しました。突然の決定でした。たいへんきびしい選挙です。(後報・当選の由)同時に劇団いこらとしても年頭早々より悲壮感におおわれ、緊急総会で急遽事務局体制と公演計画をたてなおしました。

事務局・和歌山県有田郡湯浅町湯浅一二五

九の一栗原省内(T.E.L.湯浅〇七三七六一三

一〇三三三)事務局長・藤本昂二(臨時)

事務局次長・岩本明児

公演計画 三月・四月。「ともたち劇場」

「さるかにばなし」(低学年)「はだかの王様」(中学年)

「どこで踏みとどまるか」です

中野動演 (住所・事務局内栗原省)

① 俳優座の佐伯赫哉氏の協力のもとと

くんだ昨年の「ベトナム以後症候群」は創造的なひろがり今年のエネルギータンを与えてくれた一方、客演に頼らなければ公演できないメンバー不足を指摘しています。民衆劇場アンタレスという集団のあり方もまだ十分に討議されておらず、ともに目ざせる新しい劇団体制をどう生みだしていく

か、その課題は容易なものではありません今年の四月下旬より一年間に渡って、公演を含めた実習講座を企画しており、内部指導者の育成と新人教育に重点をおき、劇団に必要な人間をつくりだしていくことを今年の仕事としました。

② 1月23日「イルクーツク物語」の技粋を稽古場発表

4月15・16日「車椅子の王女とその騎士」

公演、於中野文化センター

7月中旬または末、区内喫茶店にて小公演

の予定。

③ 昨年11月公演「ベトナム以後症候群」2ス

テージ。自力動員600人、関係劇団40人

◇ベトナム公演は東リ演関東ブロックのモデル上演としてたくさんの方に観ていただき

ました。この場をかりてお礼申し上げま

す。ありがとうございます。(牧山)

(東京都中野区新井二一八一五渡辺方)

劇団からっかぜ

① 地域に根ざした芝居づくりを目指し「浜松のからっかぜ」になるよう活動してゆきたい。そしてこの「カルラールのおかみさんの銃」をどうこの地域の人達に理解してもらいたいのか、今の時代を把握し、どうアピールするかが問題になっていきます。

② 4月中旬、或は下旬に「カルラールのおかみさんの銃」の公演が予定されています。2回又は3回のステージを考えています。

③ 今年1月16日に、県委託の移動公演「わんぱく地獄やぶり」(かたおかしろう作)を行いました。この劇は東海、甲信越ブロックの観劇ゼミになっており、みなさんの沢山の御意見を受け、からっかぜ一同、その反省をもとに次の公演どうい

いかしてゆくのか話合っている所です。

④ レバ選での候補作品がなかなか出ず、一本

に決ったとしても作品に対する執着性がかけており、それをどう回復させまたどう持続させるのが集団としての課題、問題点となっています。

劇団未來(徳島)

いつもお世話になっています。

昨年末より徳島の地域に密着した自主的演劇創造運動の確立をめざして、私たちを含めていくつもの集団が協議を始めています。今年中に目標とする新しい演劇集団が生れそうです。この動きと併行して、未来でも近く、久々に新劇団員を迎えての総会が開かれます。今年少しは、全国の仲間にも報告できるところまでできそうです。とりあえず適当な作品を選んで、それを上演する会ということでスタートし、その成功をふまえて劇団結成をめざそうということです。候補としては「無法松」「アンチゴーン」「おんによる盛衰記」などが上がっています。この動きに現在22、23人が集っています。

「未來」としてはさきに2年程前からやっている看護学校演劇部の公演が、3月「夕鶴」の予定のほか、総会で具体的な計画ができると思います。今後ともよろしくご指導下さる良いのか迷ってしまおう。「戦中派」の公演では市内四ヶ所のケイ古可能な施設を適宜利用しています。ケイ古場の建設はあらゆることに優先する急務となっています。

劇団ふくしま

- ①七七年度にむけての展望。別送の通りの確認をしているところですが、この確認を2月5日までにとめあげ、その後で時間をかけて体制確立のために討論する。柱として、八演劇教室・研究生制度・同公演活動Vへけい古場の確認と団員新規拡大について。
- ②上半期スケジュールいまはたたず。
- ③最近の公演活動。「橋」「奴の嵐平」―観客創造一二〇名。「モデル上演」―県演連交流会。
- ④わが集団の問題点。結果の悪さ・団員としての自覚の不足・けい古場の固定化がない。

(福島市笹木野梨下十四―三嘉藤方)

劇団轍(わたち)

前略。さっそくですが「演劇会議」35号より下記のように送先を変更して下さい。(編集部註・中略)と申しますのは、グループ「ひまわり」はS50年に解散しており、間を置かずして全くの別意志により劇団「わたち」が

い。(斎藤さとし)

(徳島市南佐古八番町五―16職員住宅24)

劇団北峯

- ①この年内に企画中の「北方領土問題」をとあげ上演したい。二、三年前からの企画なので去年秋からこのための煮詰め、初稿台本を巡る喧嘩腰の討論で暮れた。
- ②春は、お花見小劇場公演No.8(4月予定)
- ③①の次第で6月の小劇場No.7「出口なし」以降、公演はしていない。
- ④俳優不足。団員不足ではなく俳優不足ノ嗚呼!
- ⑤希望と自信と誇りをもってただやるだけ。

(鋼路市宮本町二―11) (木村)

劇団はぐるま

- ①集団の創造主体の確立とレバのストックに努める。その先頭を切って秋の創作劇(こばやし・ひろし)を流産させずに生み出すこと
- ②3月27日岐阜市民会館、5月1日中津川市文化会館にて、「ひしめきあう不毛の季節から」(作・演出・こばやし)再演
- ③2月6日投票の知事選で「一をきすく会」(革新)の事務局長として、こばやしが東奔西走中。劇団もまきこまれ、「ひしめき」の

生れたのでありますが、今までのように唯購読するだけでなく、当劇団でも大いに利用し勉強していこうと思ひまして窓口を変更させていただきます。尚35号より一部増して下さいます。

土の会

- ①イ・矢野喬の創作劇、76年に書けなかったもの、どうしても今年書いてもらって秋に上演する。ロ・現在けい古中の「橋からの眺め」でもそうですが東リ演加盟の劇団と交流を大いにする。現在銅鑼より一人客演で来てもらっており我々の力量をつけるのに寄与している。
- ②3月3・4日「橋からのながめ」(作・アイサーミラー、演出・矢野喬)於豊島区民ホール。6月4日「新人発表会」予定。
- ③東働演参加、第2回スケッチ劇場「昨日のわたしたち」(11月20日勤労福祉会館)
- ④「稽古時間(始り)」がおそくなって来てい

る・新人が思うようにのこってくれない・団員の演技不足が目立ち。(田久)

住所が変わりましたのでよろしく。(東京都練馬区大泉学園町四七四の八)

人間座

- ①最近の京都では「ヒューマニズム」だとか

稽古もたえがち。(編集部註・開票結果は善戦情敗。むしろ保守王国の岐阜県にあってそれは勝利との評価もあった)「尾虫記」脚色に松岡が奮闘中。

④米春の「郡上の立百姓」再演のための力量をたくわえること。一部の者にシワ寄せされてきた大道具製作を、どう集団全体の作業にしていくかということ。(藤本昭)

追伸・東リ関係、今年度の新メンバーが決定しました。山口和紀、藤本昭、山田恵子の三名です。よろしく。

劇団四日市市民劇場

(岐阜市西野町一丁目)

(一)結成十六年目に入ったとは言うものの、実質的には若者たちの集団で地域に根ざすという課題の第一歩を踏まえた所です。四月以降小劇場、移動公演が多くなりそうです。

(二)2月26・27日に向けての「戦中派」公演に「鬼のケイ古」を積み重ねています。

(三)「戦中派」公演の次は、こども向けで移動しやすい作品に取り組みます。足かけ三年になりましたが、こども向けの「土曜劇場」も定例化して来ました。

(四)ジブシー劇場で、ケイ古場が絶えず移動、日程表でよく確めないと今夜はどこへ行った

「本格的な名作」だとか、うろたえたことをいう手合いが多くて困ります。いったい新劇はどこまで牙を抜かれたらいいのでしょうか。これでは困るのです。座は、今年積極的に新しい方向へ向けて一歩でも歩み出すべく、まず手始めに、今迄あまり交流のなかった「民主文学」の書き手の皆さんとこいっしょに仕事させて頂くことにしました。本年は座創立の二〇周年にも当りますので、「民主文学」の右遠俊郎さんの『呼松水路(よびまつすいろ)』という作品を、同じ「民主文学」の草川八重子さんが記念公演台本に脚色して下さいます。私たちなりに、新劇の革新的伝統の継承と発展を考えてゆきたいという気持ちです。イイカッコしすぎ?

②③「人形師卯吉の余生」は初演以来七年、継続上演中です。これに加えて、四月の新年度以降、「奇峰亭先生の幻の壺」を巡演レパトリイに加えるべく目下準備中です。生産と流通、伝統と創造等のテーマを考えながら「京都」を考え「現代」を考えたいと思います。オモロイ芝居ではありません。

(京都市左京区下鴨東高木町十一)

演劇サークル愛の会

- ①春1ステージ、秋2ステージの公演を行う

②春公演 6月3日(金) 於東京勤労福祉会館
飯沢匡・作「多すぎた札束」

③第14回東京勤くもの演劇祭・10月28・29日
藤川健夫作「傷だらけの手」

全税関労組東京支部旗びらき1月12日
芳地隆介作「現認書」

④観客動員の定着化、スタッフ会議の定期化
新人教育の制度化が課題。(宮島舞好)
(東京都港区5-5-30全税関労組内)

関西芸術座

劇団は今年創立二十周年を迎えます。記念行事の委員会が組織され①公演②劇団史発行(二〇〇頁程度)③パーティなどが予定されています。

これとは別に新稽古場建設を特別事業にあげ、具体的な作業に入りました。予定としては三階建延一五〇坪程度を考えています。稽古場については、劇団員の長い夢でした。今の稽古場はすでに可成老朽化し、雨もり、床のふみぬきなど、今ではその荒廃ぶりは劇団を知る人にとっては名物となりました。

十年近く、ささやかな給与から3%を積立て、それを基金に銀行融資と募金カンパ(五〇〇万円)を資金に考えています。

一般公演では2月25・26日。「愛火」(泉

鏡花作、岩田直二演出)を郵便貯金ホール。6月22・23日「奇蹟の人」(富田悦史演出)・郵便貯金ホール。

10月6・7日。「桂春団治」(渋谷天外II館直志台本、道井直次演出)を予定しています。「奇蹟の人」は53年3月まで高中学生対象の移動公演になります。

昨年にひきつづき「つちぐも」は本年3月まで、「おやこ劇場」「中小学校」公演。4月以降は新作「たちあがれビノッキオくん」が全国おやこ(こども)劇場の巡演、近畿の小学校公演を予定しています。

現在劇団員八〇数名ですが、職業演劇人として、公演班やマス・コミ出演で生活しているわけですが、個々の劇団員の生活は、収入の落差もあり全体に高年令層が深刻な問題をかかえています。

一般公演はひき続き赤字の連続で、特に創作劇については可成ひよわい体質が有ります。二〇周年という一つの節に、劇団がもっている潜在的なエネルギーを、新稽古場の建設を機会に創造的にも結集していきたいと思っております。

(大阪市阿倍野区文の里4-18-6)
劇団新劇場

たい。

②6月7・8日公演予定で現在「にんじん」を稽古中です。演出舞監を決定し、公演に向けて全団員がスケジュール通り綿密に計画性を持って活動することに頑張っています。

③昨年9月劇団あまんじゃく第1回公演「ひげ」(原作・作問謙二郎)を上演して以来、会場との都合、劇団内での問題点の再検討などにより、公演活動というものはしていない

④・劇団員の拡大にいかに取り組みか・ひとつのサークル活動として演劇をどう考え、その中でどう活動するか・働らきながら演劇活動を続けていくことの問題・脚本の選定と劇団の主張そして各団員の要求希望との問題。

以上様々な問題点、困難がありますが、我劇団はとにかく次回「にんじん」公演に向け前進させることにより克服して行く意欲です
(仙台市沖野字無尻橋三六佐藤節男方)

演劇集団鋼籬

①七七年は集団が創立して五年目である。創造的にも組織的にも大きな節目をむかえることになるだろう。今年には新人を中心とした小劇場公演を精力的に続けようと思う。二月二十六日・二十七日鋼籬小劇場公演の第一弾(No.1)として、G・フィゲレードの「狐とぶど

う」を上演する。そしてそのNo.2、No.3と準備されている。二月、三月、四月、五月、六月と小劇場公演と平行して「橋」「僕生きたかった」の短期的な地方公演を設営する。七月、八月(或は九月までは)「イカカスの冒険」の西日本公演、十二月に本田英郎作・八橋卓演出の「高野長英(仮題)」を上演予定

②2月26・27日 武蔵野公会堂
鋼籬小劇場No.1(第2回新人公演)
G・フィゲレード作・小野泰次郎演出
「狐とぶど」―奴隷イソップ物語―

③前述のように劇団は五周年をむかえる。五年目は矢張り一つの大きな節目になるだろうと思われる。この節目を創造的、組織的にどう越えるかが問題点といえれば問題点であろう。昨年の暮から創造的、組織的に五年の総括を行い、そうした会議を重ねて、それを全体会議に持って行く。そうした全体会議を今年初頭にかけて五、六回持った。結果新しい組織づくりの発表をした。と云うより、新しい組織づくりのための準備の初めについて云った方がいいだろう。それは専門劇団を目指すほんの初歩の初歩と云ったたくいものであるが、私たちは大いにそれに期待し、夢を持ち進み続けるだろう。

①過去15年間、年2回の劇場公演をしてきた新劇場の活動は北海道の自立劇団の活動に一定の役割を果たしてきたといえます。15年をひとつの区切りとして16年目の今年からは今まで劇場へ足を運んでくれなかった人々々々どのようにして私たちの活動を認識してもらおうかその具体的な作業にとりかかりたいと思えます。

②「彦市ばなし」を昨年につづいて小劇場で市内の地域で上演する他、低学年のこども向けの作品をもう一本つくり上げる。

③寺島アキ子作「三人の花嫁」を12月に上演
④若い人を劇団に定着させることに頭を痛めています。

(札幌市中央区南24西11)
劇団あまんじゃく

全国の劇団の皆さん、今年もよろしく。

①今年からは年2回の公演を目指して劇団の名前と団員の力量をつけようということ年間計画をたてています。劇場の少ない仙台市内だけで年2回の公演を確保していくのは非常に難しい状態なので1回は市内で他の1回は市外での移動公演を持ちたいと思っております。それにより観客層の開拓と地域に根ざすという劇団の存在意義をなんとか結びつけ

(東京都杉並区永福町二一六〇―二三)
劇団道化

3学期、および来学年度の学期までは、小学校、「まわれノクランタンピン」(しかたしん作・森実重雄演出)と、中学校・高校、「奇蹟の人」(W・ギブスン作、内山昇演出)の巡回公演にとりくみます。「奇蹟の人」は福岡、直方、熊本、広島、伊勢のこども劇場高学年例会にも参加します。夏休みに新しい小学校用作品のけいこの予定ですが、作品決定は難産中です。年に一回の一般公演もぜひ実現したいと思いつつながら、これも作品選定をめぐって、結論の出ない会議の繰り返しです。わが集団の問題点の第一はこれです。相変らず苦しい経営、一人も欠かせない少ない組織の中での健康管理、教育、研修体制の確立といった問題にいつもぶつかっています。しかしこの四年間、一人の退団者もなく、新しい力が蓄積されつつあると思っています。
(福岡市中央区春吉一七七一―八)

名古屋演劇集団

①七月に移転期限をひかえいよいよ、土地と新しいけい古場獲得のために二四〇〇万円募金を開始します。また昨秋自主公演を行いましたので、今年には上演活動も大いに盛

り上げ、その中でけい古場新築も達成しよう
とハリ切っています。候補地は名古屋の東端
で本郷という所で、一応地下鉄の駅からも近
く約九〇坪です。

②3月11・12日、名古屋市教育委員会主催
の青少年のための芸術劇場として「奇蹟の
人」を市民会館中ホールで上演します。一昨
年初演以来26ステージの学校移動公演を重
ね、昨年末総括を行い、一月より三〇〇〇人
動員をめざし、けい古と普及に、「これまで
やらなかったことをやろう」とがんばってい
ます。七月には大須事件記念として「FS6
工作・菅生事件」に取組もうと討議中です。
③昨秋はけい古場資金獲得のために自主公演
を中止、学校移動に集中、「奇蹟の人」9回
「夕鶴」2回「三家福」1回、他に名古屋市
芸術祭で「トロイアの女」に19名が参加し、
大へん忙しい時期でした。

④劇団員数が多いのに結果が悪く、又名古屋
市芸術祭や名古屋労働等の外部企画に対応す
るだけの企画力に乏しく、悪い意味のアマチ
ュリズムに運動が足をとられる。望みは大
きく現実にはキビシイのです。(丸子礼二)

(名古屋市中区東区二八八一九)
演劇集団未踏

5月11ちびっこ劇場(字部マンドリーノ・
字部奇術クラブ等と共催)

③最近の公演活動

第13回定期公演「アディオス号の歌」(作・
秋元松代、演出・岡田和善) 51年10月9・10
④近況報告

2月6日第12回総会。役員の新旧交替によ
り運営委員会若くは、全員はりきっており
ます。劇団事務所後記に変更しました。

(山口県宇部市松山町四丁目10-24)

東洋針灸科内 浜田義治

TEL宇部二一七四六八)

演劇サークル土くれ

①第9回公演「ある労働者作曲家の生涯」を
ピークとした観客動員の低落傾向をどう克服
していくかが七七年の最大の課題となってい
ます。そのため、制作活動の強化を中心に新
人の拡大、創造力量を高める、創作の取組強
化などが総会で確認されました。10年目を間
近にひかえ新たな飛躍の土台を築こうと思
っています。

②昨年まで続いた「国税万事始」を本年も引
き続いて開催するため奮闘中です。5月下旬
頃が春公演で、現在創作も含めてレバと運考
中です。この他「青年館文化祭」「国税若人

①七七年度に向けての展望について。

集団結成以来追求しつづけてきた本質的な
職業化(専門化)への道をさらに具体的にお
し進めるための五ヶ年計画が昨年初頭にたて
られ、その初年度(昨年)の成果として、稽
古場のかくとく、専任(専従)制の設置等が
あったのですが、今年これをふまえて、よ
り進展させた型として、団員の集団への集中
度が一層高まり、さらには創造活動・運動体
としての機能が質量共に高まる方向を展望し
ています。

②上半期のスケジュールについて

・昨年にひきつづき子供劇場を精力的にう
ちつづけたが、新作・立川雄三作「猿引き
健太」を四月上旬公演を目標に取組めます。
・「朴達(の裁判)」の移動公演を実現すべく
鋭意計画中。

・日常訓練を創造部からの提案、要請を受
身の姿勢でまつのではなく団員個人が自主
的に企画、方針をたて、自己に生々と訓練を
課していく方向を打ち出します。

③最近の公演活動について

今年には昨年よりも数ヶ月早く子供劇場の移
動公演がスタートし、すでに(2月5日現在)
三つの小学校、一つの市民会館で延七ステ

ジを消化。目下普及、上演共に進行中です。

④わが集団の問題点について

・昨年は拠点(稽古場)の確保ということ
もあって、全員一丸となってフル回転しまし
たが、それに伴って、これを一層持続発展さ
るためにはどうしても現有以上の人員が必要
という深刻な問題に後半から直面し、目下新
戦力獲得が大問題。

・集団への集中度が昨年は頭初のもくろみ
通り非常に高まったが今年はやや逆行。

・子供劇場等の普及活動が専任者任せとい
う主体性の欠除がやや出かかっている風潮は
由々しい問題です。

(東京都新宿区新宿一-10-15)

新宿御苑ビル内)

劇団若者座

①七七年度活動方針

・西リ演、文団連、並びに関係文化団体と
の交流を深める。

・市の文化助成を大巾に引上げる為、積極
的に働きかけを行う。

・「演劇会議」誌を基にして学習を行うと
同時に、誌の普及を強める。

②上半期スケジュール

2月11小野田工業高校記念公演(2・23)

の集い」など発表の機会をとらえて、小作品
を持ち込む予定です。

③第14回東働演に「日本海流」(菅竜一・作
福田悦雄・演出)を発表しました。

④厳しい文化状況のなかで私達の芝居を職場
にどう持ち込むか、観客をどう定着させるか
をメインにして、そのための創造技術の向上
新人拡大、組織の団結強化、創作など課題は
一杯です。次号から20部お願いします。

(東京都目黒区緑丘3-11-2田中)

石塚幹雄(気付)

劇団十年実

①インフレによる生活のむつかしさの中で私
たちが真の暮しよい生活を求めるなら、まや
かしのない文化の発展育成が叫ばなければ
ならない年だと考えます。その叫び声を末広
がりに伝える行動として地域におけるそれぞ
れの集団が、ある程度統一した認識・スロー
ガンをもって根強く活動するなら、マスコミ
に育てられた若者もこの不況期こそ真の文
化にめざめる時だと考えています。

②そのためにも当劇団が参加する大阪自演連
では、府に後援させ、府の青少年活動振興会と
共催して、府下の若者たちに呼びかける「大
阪春の演劇まつり」に積極的に参加します。

③2月27日神戸のモミの木学園の依頼公演に
取り組み中。

④劇団員の増員。劇団員の演劇に対する姿勢
の向上と技術の発展。若者が中心になった組
織体で生き生きとした活動が進展中です。

(大阪府平野区喜連東三-36-32-10号)
福岡現代劇場

福岡現代劇場

①七七年秋に福岡で「ドイツ祭」が計画され
ていますので、プレヒト作「アンチゴーン」
で参加する予定です。二月に「女抗夫」の作
者山崎暁一郎の創作劇があがりますので、こ
れを舞台化する作業が並行するでしょう。

劇団の創造が、形式的・技術主義的になっ
ているという反省のなかで、まさに今日的で
ある舞台創造をめざして、きびしい出発の年
にしたいと考えています。

②プレヒト、ロルカ(イニエルマ)の研究會と
「アンチゴーン」と創作劇の台本づくりが中
心になります。

③なし。④は①を含む。

(福岡市中央区菜院一-16-15)

たつむらホワイテイ菜院四-10号)

府職演劇研究会

①七七年に向けての展望

創立12年目を迎える今年は、集団内での創

作劇上演活動に中心を置いて質的、技術的向上と観客のアップ(千名)を目標としています。又一月の総会では西リ演に加入することも確認し、市広い知識の吸収をめざしたいと思えます。又わが集団は、府庁内にある、うたごえ合唱団やバンドサークル、芝居グループとの合同公演も考え市広い企画を行っています。

②上半期のスケジュール

大阪の自演連の仲間を進めている大阪春の演劇まつりに参加を予定しています。今集団内で創作劇の討論を行っている最中です。これが長時間(1・5H)ものでは初めての経験でもあり燃えています。公演日は5月17・18日。

③最近の公演活動

昨年5月に10周年記念公演「イルカトーク物語」を終え、その後職場の文化祭(6月)平和友好祭(8月)で小レバを行い、12月23・24・25日に我集団では初めての小公演を行いました。会場はいつも練習場所である職員会館で、そこを劇場風に工夫をこらし、照明器具もそろえて行ったのです。3日間で約一五〇人の人に観てもらいその場で感想も大きく思う思いきったことを行いました。演目は

「鳩」「僕生きたかった」。

④我集団の問題点

いつも新人獲得を目標にしていますが、思うようにいかず、人手不足の状態があります。これらの克服と全員の質的向上対策を何とか手を打って存在感をもっと大きくすることがどうすればできるか。

(京都府綴喜郡八幡町大字八幡荘)

小字柿ヶ谷14-38東山猛方)

福井劇の会

未加盟にもかかわらずたえずご通知いただき心うれしく思っています。

「演劇会議」を通じ、地域に根ざした演劇運動に苦闘している全国の仲間の痛みが、我身の痛さとして感じられる今日この頃です。

当「福井劇の会」も創立以来の一貫した創作運動の追求により一定の市民権を得、来年は20周年を迎えるに到りましたが、これまでの運動の延長線上を歩むのでは、市民の期待に充分応えられないところへきています。不況下のインフレが公演財政を圧迫し、観客の足かせとなってきたこと。市民の共感を得る今日的テーマの発見が困難なこと、本来、演劇創造を主体とする会が脚本創造を第一義的に追求せねばならない限界と矛盾。30

す。一〇〇〇円と二〇〇〇円を振替で送って下さい。ナカミの良さは本誌の編集長が「演劇会議」を自信をもって人さまにおすすめるのと同じ重みで「読んで下さい」と訴えます。(先払い頂いた方には毎号精算書をお送りします)「演劇会議」と「季刊えひめ」を併読しよう!

申込は松山市市坪町八六九一五愛媛文化団体連絡協議会(T.E.L.〇八九九一五六一五八六〇)郵便振替一徳島三一四〇三

追伸—去年一本演出しました。今年も一本ありませう。(尾瀬明)

編集長からお葉書をいただきまして何を書いて出そうかと迷いました。雑誌の編集・資金ぐりなど自分でやってみてはじめて萩坂編集長のご苦労が身にしみてわかります。近頃では人を見ると「季刊えひめ」を読んでくれているかしらなど考えてしまいます。もっと多くの若者の力を集めて、わが愛媛に、この雑誌あり、としたいものと考えています。

それと当然です。「演劇会議」の読者拡大(二〇冊を目ざしております。(上村令子)

(松山市市坪町八六九一五)

編集部註・読者には通じにくいかとも思うが尾瀬・上村両氏はもと劇団こじか座で活躍

され、当時から「演劇会議」への御協力は過

分であった。季刊「えひめ」は地方文化誌として出色のもので、郷土出身の俳優「評伝丸山定夫」など、ぼくなどにも俟たれるものが多い。掛合いじみるが、ぜひ購読をおすすめしたい。(萩)

劇団さっぽろ

①三年目の定期公演を一層定着させること

来年の全道巡演への道を展望していきたい。それと念願の俳優教室(研究所)を発足させ劇団の弱点である、層の薄さ、を解消していきたい。

②2月25・26日の定期公演終了のあと、小学校公演「チボリーノの冒険」(ロダリー作)の仕込に入ります。5月7月、道内巡演します。平行して小劇場班が2本の作品をもつてまわります。

③2月25・26日道新ホールで、第3回定期公演「西の国の人気者」(シング作・飯田信之演出)の稽古の最中です。完成した新稽古場で張り切っています。この作品で、市内の3つの中学校で公演する予定です。

④女優の層の薄さと制作の専門家がいないことを痛切に感じています。

(札幌市西区手稲宮の沢四八五一四一)

名の会員の5%がここ2・3年の入会者で、これまでの蓄積が容易に継承できないこと。会活動への参加が、職場家庭がらみで困難になっていることなど、大胆な発想の転換と体制の強化を余儀なくさせられています。

1月25日第15回総会では、これらの現状認識の一致のもとに20周年へむけての展望をさぐりましたが、まだ充分な形をとっていません。当面6月18日の第3回小劇場を新人中心の公演として過去の蓄積の継承に専念し、同時に創作劇運動をどうすすめるかについて、会内外のえい知を集めるべく準備をすすめています。幸い会員の意気は高く、目下集中的に議論を集めていますので次回にはもっと形あるものに報告できそうです。

福井県坂井郡津町旭九二一田島方)

尾瀬明・上村令子さんからの便り

編集長、ならびに西リ演の皆様、ごぶさたしています。酔っぱらいの尾瀬もようやく肝臓の方のお医者様の許しが出ましてポツポツやり始めています。いまの所、忙しいのは先号でご紹介頂いた南国四国愛媛での郷土文化誌作り。三ヶ月に一回発行、定価六百元(ずっとなんてくれる人には百円オマケします)。当然のことながら(?)マッカケの赤字で

演劇集団和歌山

春はもうすぐそこまで。今年こそは年間計画を実行しようと決意を新たにしました。

①「アンネの日記」は3年で8ステージ、約四千四百人に観ていただき一段落しました。今年からの3年は、10周年をめざし、さらなる飛躍を願っています。現在15名の団員を倍増し、表裏方ともにひとりりだちできるようにすることです。

②一月に「アンネの日記」高校公演をします。総会を開き、今後の方針と秋の公演について話しました。二月には日舞教室を再開します。創作劇「寝太郎の夢」第6稿が完成します。二・三月は団員拡大期間です。3月10日は「花刀」の中学校公演です。

③昨年10月の「アンネの日記」田辺公演は現地で実行委員会を組み、また付近の青年団等の協力も得て、一ステージ、八〇〇名で成功裡に終了、「またいい芝居持ってきてね」という声援に追られて帰ってきました。12月のブリストリーイ作「夜の来訪者」は、キャスト、スタッフ、制作グループがフル回転して作り上げた舞台でした。一月の「アンネの日記」高校公演は体育館という会場条件にもめげず2ステージやりました。

④今まで借りていたけい古場を出なければならなくなり、日常生活に支障が出てきました。早く自由に使える稽古場を手に入れることです。

創立7年目を迎え、いつまでも若い劇団として甘えていられなくなりました。質量共に飛躍させる手だてを考え行動に移す事です。

(尾代)

(和歌山市湊四一六一二七別院方)

劇団協同

連絡運くなってしまい申訳ありません。

現在「ある遅い出発」(石上慎・作/車田悟 演出)の移動公演を行っています。

移動公演といっても舞台の設備も何もない地域の集会所を使用しているもので、観客も七〇〜百名規模のものです。一月三十日(日)の立川をはじめ、青梅(2ステージ)府中、東村山と三月一杯まで5〜6ステージの予定で、すでに立川、青梅が終了、観客数合計三〇〇名、上演後の交流会ではかなりきびしい批評が出され、劇団にとっては大変勉強になる活動です。四月以後は児童劇での移動公演を計画しています。活動の中心を立川に引き、立川でのステージ数を増やして行う予定です。相変らずの小人数の集団ですが、移

動活動の中で、集団が一丸となって燃えています。

なお、演劇大学に申込みが遅れ、参加できませんでした。貴重な機会を無駄にしてしまい残念に思っています。(車田悟)

(立川市曙町三十四八〜七黒田方)

劇団東風(やませ)

今年一月六日に正式に東リ演加盟を決定した青森県八戸市にある劇団東風です。よろしくお願いします!

ここ数年の停滞状況を呈していた劇団活動が昨年の10月31日の公演、クジム・フロロフ作「愛について」より『十五才』：何でこんな訳があるのか?をきっかけとして、団員それぞれが燃え、一九七七年を再出発の年と考え、同時にその意気込みを表わすためにも東リ演に加盟した次第です。

現在は3月12・13日の小劇場公演「笑う男」(「ぼんち絵」に向けて稽古に励んでおります。この後の予定としては、6月に市民劇場創立15周年記念公演として、地元作家下斗米謙一氏の作品を一本、十一月の本公演では創作劇(構想としては八戸の一漁師の一生みたいなもの)一本を予定に組んでおります。(八戸市十八日町二 新堂方)

TEL〇一七八二二一三〇二二)

劇団上野市民劇場

仲間のみなさん、お元気ですか。僕らも朝夕冷えこみの厳しい伊賀盆地で頑張っています。昨年11月に25年の念願が実り新しく拠点を確保しました。けい古場としては十分な広さではありませんが、市内の中心地であることが最高の条件です。又演劇センターとして広く活用して行くことを考えています。

目下、伊賀上野の青年たちが連日センターに結集して、わらび座公演の取組みを進めています。互に人生を語り、交流を深め、上野の文化を若い力で押し進めようという張り切っています。こうした連帯の輪の広がりと共に、よりいっそう演劇の根をはらねばと決意を固めています。

活動計画

移動公演1・20、3・12、4・上旬、「吉四六さん」他

総会 3月6日

子供劇場 6・18・19「題未定」

劇団の課題

・スケジュールに追われる活動を克服すること・組織、創造上の問題を集団的に解決すること・地域の求めるテーマに出来る創

造(作)を編りおこすこと。

(上野市丸の内共同ビル3F)

仙台小劇場

手ちがいで前号に劇団通信を送らないでしまいました。仙台小劇場、相変らず健在です。昨年の秋の公演は11月26・28日、こぼやしひろし作「ひしめきあう不毛の季節から」を4回上演、観客動員は一千名を割り、制作上失敗しましたが、演劇集団末踏の岡部政明さんに客演していただいたりして、創造面では評価された舞台でした。

今年2月23日の新人班公演、石上慎・作「ある遅い出発」と構成詩「宮沢賢治の世界」で幕をあげ、8月に本公演、3月に中堅劇団員を対象とした演技面でのゼミ等を計画しています。

演劇大学終了後、諸般の事情で延期していた総会をすませ、第二次3ヶ年計画、目標達成に向けて結果しています。

(仙台市鉤取字大谷地三三早川方)

劇団名古屋

寒さが続いています。皆さんお元気で御活躍のことと思います。

①最近の公演活動

附属研究所第九期卒業公演「愛」三部作

(作・勝山俊介、演出・安藤美生子)を12月25・26日(3ステージ)に名演小劇場にて上演。また移動公演として「あお野麦峠」(作・大橋喜一、演出・久保田明)を1月21日に名古屋市公会堂にて上演。(主催・名古屋市定時制高校)

②これからの公演活動

5月20・22日(5ステージ)名演小劇場にて上演予定。今年には劇団創立20周年にあたるので過去上演し、好評を博した戯曲及び創作劇も話題に登っています。討議されている戯曲は「金冠のイエス」(金芝河)「神と人との間」(木下順二)「小市民」(ゴーリキイ)「にっぽんすいこでん」(熊谷昭吾)「むくげとモーゼル」(しかた・しん)など。

③今年には附属研究所より8名が劇団研究生として入ることとなり、彼等が劇団をになう若々しい活動力となることを期待しています。(歩)

(名古屋市熱田区新尾頭町五〇)

劇団尼崎ファーベル

◇一月に総会を開きました。この中で結成後2年間の7本の上演作品の成果と組織成果について、総括しました。そして77年・78年の2年間の一番大きな目標は劇団の明確なオリ

ジナリティを創造する……と云うことを全員で確認しました。創造集団である限り当然のことですが、この当然のことが出来ていなかっただ2年間の7本の公演であったからです。

◇七七年の公演として

秋元松代作品一本、T・ウイリアムで作品一本。

の2本を決定したばかりで詳細は未定です。昨年からの劇団内部問題について西リ演の皆様に暖かい助言をいただきましてありがとうございます。生まれ変わった様な新しい創造をめざしてがんばる決意です。

(尼崎市杭瀬北新町3-47尾尻コーポ4F)

劇団きづがわ

いつもながら「演劇会議」の編集、本当にご苦労様です。

◇秋の、新劇フェスティバル初参加の「吹雪のうた」は様々な反響を呼び、無事成功裡に終え、一同ホッと胸をなでおろしているところでした。

◇創立15周年を来年に控え、さらに劇団の足腰を鍛え、地域の要求に応え、地域の仲間たちとともに生み出す文化、演劇運動への取組みを強めたいと考えています。

◇その第一弾として、うたごえサークルや地

域の婦人、学童保育、PTAまで巻き込んで団地の広場を借り切ったので、春を呼ぶぶちっ子広場を開催しようと、その取り組みの真っ最中です。

◇上半期主な公演は、大阪自立演劇連絡会議が、青少年活動振興協会とタイアップしての「大阪春の演劇まつり」への参加公演です。これは自演連加盟の九集団が、提携あり、合同あり、単独ありと、バラエティに富んだ形で、五月中旬と六月初めにかけて、5公演10日間、集中的に取り組まれる自演連フェスティバルとも云うべきものです。

「大阪春の演劇まつり」参加公演

5月25・26日 森の宮青少年会館小ホール

『愛』三部作 八作・勝山俊介

◇在阪の自立劇団が続々とけい古場を確保、実現していくなかで、ジブシー生活を続ける私たちのなかにも、一日も早く自前のけい古場をの声をたかまっています。けい古場持たない悩みとそれとあいまって働く者の劇団にありがちな精々年2回の公演中心の活動からの脱皮が課題です。

(大阪市大正区泉尾四丁目二一七)

劇団つくし

今年度は劇団の25周年にあたるため、春か

ら秋にかけて忙しい年になりそうです。

◇51年10月24日秋の子供まつり。構成劇「キツネにだまされたオサムライの話」

10月31日三島親子ファミリー劇場「ぶす」

11月21・28日山梨県移動公演、富沢・栄・睦合・万沢。「ぶす」「みんなであそぼう」

「3びきの子ぶた」

◇これからのスケジュール

2月13日 文連合同文化祭

「タイムショック」「みんなであそぼう」

「キツネにだまされ」

3月5日 公立保育園卒園式 「ぶす」

3月6日 公民館祭り 構成劇「ラブ」

5月1日 25周年記念公演

「小さなお城」、構成劇、他おはやし

5月5日 春の子供祭り 演目未定

◇現在「富士宮ばやし」を5月に完成の予定でがんばっています。問題点としては新人が仲々入らないことです。若い力と行動力を必要としています。

(富士宮市西町20-2)

人形京芸

①毎年公演スケジュールの多忙から、仲々実行に移せなかった附属研究所について、今年から実験的に九ヶ月間の日程を組み、専門科

を富士吉田市で開き、表現座、どんぐり座、演集、やまなみ参加します。制作は吉田チームの担当、次回は甲府市で実施します。一月が10期生の研修が河野司の担当で始まりまし

た(10名)。二月五、六日のプロクセミに新人五名が参加しました。

③五月公演にむけてまた逢う日までで「とろろ」が選ばれ、討議が始まりました。「また逢う日まで」は小谷道雄が手を加えますが、全面的な改稿になるのではないかと思えます

④一月三〇日定期総会を開きました。それぞれ理由あってのことなのですが欠席者が多く事務的処色の強い総会となりました。新人を養成する一方で退団者の承認をしなければならぬ切ない想いは宿命なのでしょう。ママさん劇団員の活動について、劇団としての真剣な対応を迫られています。

(甲府市青沼一丁目八一五)

演劇集団わたち

①新しいけい古場を持って二年目に入りました。センター公演と合せてアトリエ公演を定期的に開いていこうと思っています。

②③・2月18・19日於大阪郵便貯金ホールで、W・ギブスン作・広渡常敏氏台本「奇蹟の人」を又川邦義の演出で上演します。

も含めて実行に移すことになりました。この

研究所卒業生を対象に劇団入団者を採用します。

②「おしゃべりな玉子やき」をもって親子劇場を巡回する劇団班は三月中旬まで活動を続け、「夢の島の白い船」という新しい作品の仕込みに入ります。この班は同じレバで小学校も廻る事になります。

・更に「りすとくるみの木」「にげた仁王さん」をもって学校巡回する班は昨年引き続いて活動をはじめます。

・幼稚園・保育所を対象に新しい作品をもって活動する班が春には仕込みに入ります。

④文芸活動のたちおくれが、公演レバの選考を困難にさせています。基本的に今、どんな作品を人形劇で上演するかが、まだつかめきれずにいる状態です。

(宇治市白川鍋倉山35-20)

劇団やまなみ

①県内移動公演を強め、劇団の行動範囲を一層拡げてゆくこと、けい古場の建設に着手すること、このところ減少続きの甲府の観客とのつながりを回復することなど、難しい課題ですが着実にとりくんでゆきます。

②四月、出演協の第一回演劇フェスティバル

作、酒谷忠雄演出)「鳩」(勝山俊介作、貞包演出)両方とも再演。

・7月21日と24日(6ステージ)第一回夏休み親子劇場「牛鬼退治」(かたおかしろう作 貞包演出)

③昨年11月12・13日やりました第13回公演「牛鬼退治」は観客七六〇名でした。観客層は大人から小人までねらいましたが、特に子供用として創った舞台ではなかったので、子供に伝わるかどうか心配でしたが、小学校の低学年生でも受けとめてもらえたというのは新しい発見でした。

④劇団員がやっと10名になったがこれからどう増やしていくかが課題である。

(藤沢市辻堂新町一四二五貞包方)

劇団大阪

演劇大学の成功おめでとうございます。参加のみなさまおつかれさまでした。

今年の劇団大阪は、新劇団協議会合同公演に参加するのを手始めに、四本のケイコ場公演作品と、一本の青少年劇場・春の演劇まつり参加作品、一本の本公演と、大小七本の作品を上演する予定で出発しました。この中には、昨年文工隊の公演が極めて少なかった事などから「玉のような文工隊作品を」との

スローガンで、「日本繁栄学入門」よりの抜粋作品と、創作による作品と各々三〇分位のものを仕込んでいます。

ケイコ場での公演は、着実に力をつけて行く事と、地域に根ざす事、ケイコ場を大いに解放してあらゆる文化サークルとの交流を深め、文化創造の拠点にして行く事を旨として公演です。

もう一つの柱は革新府政とタイアップして行政に、文化創造の現場に目を向けてもらい行政、創造者、府民一体となって大阪の文化を考え創って行こうと、自演連、青少年活動振興協会が共催して行う「青少年劇場・春の演劇まつり」に創作劇「巡礼殺人事件」で参加します。その後、第九回本公演を青少年会館で二日間と同じ作品で新劇フェスティバルに参加（堺市民会館にて公演）することになっています。

こう書いて来ますと前途洋々としているように見えるのですが、この劇団も同じでしょうが、六年目に入って劇団の主力が三十代になり、職場での責任が重くなったり、いそがしくなったりで結果が悪くなったり、出産のためベテランの女優が休団したりしています。当面五〇名の劇団にするためには新しい

力をどんどん吸収して行かなければなりません。そのため研究生制度の充実をはかる計画です。それに私達のケイコ場は一ケイコ日（週三日として）一人、一〇〇〇円費やしての運営です。一回一人休んだり何もしなければ一〇〇〇円どぶに捨ててしまいます。従ってそれだけの価値のある芝居創りも要求される中で、次の様な日程で今迄に書いた公演が持たれます。

- ・ 3月22、26日、新劇団協議会合同公演、作・かたおかしろう「四季の女たち」於島の内小劇場
 - ・ 4月3、4日、作・内村直也「夜の来訪者」4月17、23日、作・宮本研「五月」於けい古場
 - ・ 6月3、4日青少年劇場・大阪春の演劇まつり参加、作・杉本浩平「巡礼殺人事件」於青少年会館小ホール
 - ・ 10月5、6日、第九回本公演・作品未定、於青少年会館文化ホール。
 - ・ 11月14日、新劇フェスティバル参加、作品未定、於堺市民会館
 - ・ なお電話が新しくなりました。
- （大阪市南区谷町七丁目二一―
新谷町第二ビル一〇三号

TEL〇六一七六八一九九五七

岡山職場演劇集団

①「物事急激には変らない」が集団のモットー。改まって展望などと聞かれると、どう答えていいのか……。

②五月下旬、集団内の書き手志摩敬子の白のシリーズ第四作（二・三幕作）上演予定。目下創作中。六月、全国鉄演サ協のゼミ参加予定。現在アクセントの勉強会、週1・2回。

③五一年三月十三・十四日志摩敬子作「白い星流」三幕、於岡山中央労働会館。六月二十六日、全国鉄演サゼミ、滝ノ内吉一作「夜の対話」、於大宮。九月二二日、国鉄演劇祭、滝ノ内吉一作「夜の対話」（改訂版）於神戸。十一月二七・二八日、集団第一回試演会、滝ノ内吉一作「夜の対話」チエホフ作「コーラスガール」、於岡山中央労働会館。

④取り立てて問題点はありません。

（総社市富原四八〇―三岩城薫）

劇研さっば

「さっば」六年目の本年、//昂揚に満ちた年//を期待はできませんが、過去五年間の成果の上に立って、創造上の充実、向上を計ると共に、地域に根ざす活動を探り出してゆきたい年です。

②上半期のスケジュールは、三月「若者たち」再演、五月「GOOD・LUCK」高校公演予定。そして友の会（後援会）交流会を予定しています。

③昨秋の「GOOD・LUCK」公演は観客数の激減（三〇〇名）に劇団一同ショックでした。しかし、この公演を通じて脚本を読む必要と力を一定程度知り、加えてゆくことができました。結果、作品を私達自身のものにすることができ、高校生に喜ばれました。④結婚、出産が相次ぎ、女優不足に悩む年頃の「さっば」になりました。強力な演出を望む劇団でもあります。

（栃木県下都賀郡大平町川連六〇八）

劇団すがお

寒い冬もそろそろ峠をこえそうですが、全国の仲間の皆様お元気のことと思います。私たちも細々とはありますが頑張っています。さて念願の稽古場に着工しました。資金面では不足はありますが、市当局も協力を約束してくれていますし、子ども劇場も30万円を目標に取り組んでくれますし、展望はあります。

私たちの責任がますます大きくなってゆきそうです。自覚とその責任に応える力量づく

りが急がれます。3月末日を竣工の目途にしており、6月に柿落し公演として、ロボットポトル作「花咲くチェリイ」を上演する予定で稽古にはげんでいます。秋は親子劇場として稽古場だけでなく、他会場での公演もやる予定ですが、稽古場完成の年でもありフルに使う年にしようと考えています。今年もよろしくご指導ご援助下さい。（阿石記）

（桑名市夕日丘30号加藤武夫方）

劇団名芸

演劇大学ご苦労さまです。名芸は色々都合が重なって参加できませんでしたが、これからのブロック活動などを通じて吸収していきたいと思えます。

現在の主な活動は『ロミオとジュリエット』の本読ゲイコと、研究生の卒公準備です。結果状態はまずまずです。今年前半期の公演予定は次の通りです。

- 4月24日（日）第6期研究生卒業公演
 - 『笛』（田中千禾夫作）予定
 - 7月16・17日第14回公演
 - 『ロミオとジュリエット』
- 演出・池田博 市民会館中ホール

「ロミオ」は劇団の総力を挙げて舞台、普及ともども一つのピークをつくりたいと張り

切っています。

また創作劇が中断していますが、今年の秋ぐらいいは上演に耐える作品を生み出したいと思えます。厳しい寒さが続き、春が待たしいものです。名古屋市長選もがんばらなくては。（栗木英章）

（名古屋市中区汐田三の四〇）

劇団山形

私たち劇団山形も昨年11月13日に「北方の記録」（相沢嘉久治作）の公演を無事終え、（観客動員数2ステージ千五百人）、五十二年度の運動方針を確認し、ようやく活動を開始しようとしております。例年になく大雪もあってか、結果も思うようにいかないようですが、ねばり強く頑張るつもりであります。

さてニュースをひとつ。今年四月四日から放映されるNHKの朝のテレビ小説、五回目に劇団の団長松井先生が出演することになったのです。原作が、「ああ東京行進曲」で作者が松井先生と同僚の国語科教員ということもあり、また昨年三月公演の「雪の墓碑」に出演願ったこともあり、原作者の要望で出演ということになったわけです。時間がございましたらぜひ御らんになって御指導をいただければ幸いです。さて、演劇会議の誌代運

なって申訳ございませんでした。34号の25冊分と次号の32冊分お送りしますのでよろしくお願ひ致します。(安部信子)

(山形市緑町四一八一松井方)

編集部註・おわかりのようにこれは私信ですが、劇団山形からの便りは減多にないことなので、私の一存で登場してもらいました。しかし黙って7冊増誌は感激です。(萩坂)

劇団埼玉

劇団事務局の手落ちで、二回続けてこの通信を欠かしたことをまずお詫びいたします。そのため今回は去年の第12回公演から報告しなくてはなりません。

埼玉の第12回公演は、真船豊・作「いたち」を塚田恒夫演出で、去年の2月18・19日(2ステージ)、大宮、商工会館ホールで行いました。舞台の方は一応の成果を挙げるこ

とが出来たと思われませんが観客数は少々淋しく四五〇名あまりでした。「いたち」が終るとすぐ、既に今年の児童劇レパートリーとして決定していた「ゆきと鬼んべ」の稽古に入りました。この作品は埼玉の所沢に住む、さねとうあきら氏の創作民話劇で、川村武夫の初演出となりました。公演は「埼玉第2回おやこ劇場」として8

に東京公演も企画していますが、まだ会場がとれていません。今年の年間スケジュールは「日本の幽霊」につづいて10月に秋の本公演、12月に埼玉第3回おやこ劇場を行う予定です。(川口市領家五一―一六九)

劇団未来
寒さがしぶとく居坐っていますがお元氣のことでしょう。劇団通信、いつも遅くなり、申訳ありません。よろしくお願ひします。劇団はすでにご案内の通り15周年に入っており、三つの記念公演を企画しています。20年に向っての飛躍が、創造普及両面とともに組織面でも成しとげられるかどうか、一層の奮起を期している所です。

◇2月13日、演劇教室から入団した1・2期生を中心に、新人研究発表会を持ちました。(原博作・西尾臣示演出「静かなる朝」於けい古場、2回上演)。舞台削りのきびしさを感じ、しんどさも含めて体験し、自分達の手で学びとろうと、熱気ある発表会になりました。

◇上半期は記念公演No.1「どん底」です。今更いうまでもなく多くの劇団が上演して、夫々独自の舞台で評価を得てきた名作ですが、

月7・8日(大宮商工会館) 8月21日(川口市民会館) 計3ステージ、9月28・29日に県教育委員会主催による「埼玉県少年移動文化センター」で、児童部で2ヶ所で3ステージ続いて10月2日、浦和市大久保中学校の文化祭で1ステージ、更に11月3日、恒例の川口市主催の文化祭で再び川口市民会館で1ステージ、合計8ステージの公演を行いました。これで打ち止めしようとしたところが

三郷市の教育委員会からこどものための文化活動としては始めて演劇鑑賞を企画したもので、ぜひやってほしいと要望され、今年2月6日、三郷市の行事ですが、同市内に適當な会場がないため、江戸川を越えてすぐ隣の千葉県流山市の市民文化会館で1ステージ公演し、埼玉としては始めての通算9ステージと云う公演を行いました。この作品は内容もすぐれていますし、ステージを重ねることによる俳優にとってプラス面もあり、加えてキャストが6人と適當な員数ですし、出来れば埼玉のレパートリーとしていつまでもやれるようにしておきたいと云う意見も出ています。「ゆきと鬼んべ」公演を行いながら併行して一般対象の公演として、こばやしひろし作「ひしめきあう不毛の季節から」を塚田恒夫

「未来の」「どん底」でなければ観客の期待にこたえることは出来ません。劇団の総力が見事結果するよう燃え始めています。◇区画変更で劇団住所が変わりました。御訂正下されば幸いです。大阪市西区江之子島一丁目七十一新うつぼビル4F TEL〇六―四四八二―〇二二

京浜協同劇団
◇金芝河作、小田健也脚本・演出の「金冠のイニスソウル三文オペラー」を昨年暮から2月にかけて川崎、横浜、東京で上演、三千人の観客に共感をいただきました。東リ演の仲間劇団のみなさん、観劇と御協力ありがとうございました。(現在、再演を検討中)

◇川崎市教育委員会主催の第6回のかわさき演劇まつりに、地元の新しい演劇集団高津と合同で、関芸の道井直次さんの「しげばん太郎」をもって出演する予定。3月19日から26日にかけて2会場6ステージ。観客五千人を目標にがんばっています。◇次回公演は、「九〇二番船、進水ノ」に続く集団創作で、職場の自由と民主主義をテーマにとりあげたい現在準備に入った所です。(川崎市幸区古市場二一〇九)

演出で稽古に入っていました。稽古への結集、創造的集中がよく、一時はこの作品による公演を中止しようとするところがあったが、数回の全員討論の結果、このところふえてきた新人、若い層が創造的に成長していくための一つの過程としてこの作品を生かす、なんとか埼玉の「ひしめきあう」を創ろうと云うことで、再度全員意志確認をし、ようやく本格的な稽古に入ったのが去年の11月中旬、それ以後は稽古内容も上向いてきて、どうにか去る1月22・23日の公演にこぎつけ、一定の成果をあげることが出来ました。

会場は大宮商工会館ホールで2ステージ、観客数は前回より若干のびて約五五〇名。東リ演、東働演の仲間が多数観に来て下さったことはうれしいことでした。さて今年には埼玉創立10周年になります。10周年目を刻む最初の公演は、旗挙げ公演と同じ、小山祐士作「日本の幽霊」を再び塚田恒夫の演出でとり組みます。なおこの公演は埼玉と少からぬ関わりがあり、私たちがお世話になるところ多かつた故八田元夫先生の追悼の意もこめて行なうことにしています。公演予定は6月25(土)26(日)の2ステージ、大宮商工会館ホール。なお今回は久々

「未来の」「どん底」でなければ観客の期待にこたえることは出来ません。劇団の総力が見事結果するよう燃え始めています。◇区画変更で劇団住所が変わりました。御訂正下されば幸いです。大阪市西区江之子島一丁目七十一新うつぼビル4F TEL〇六―四四八二―〇二二

京浜協同劇団
◇金芝河作、小田健也脚本・演出の「金冠のイニスソウル三文オペラー」を昨年暮から2月にかけて川崎、横浜、東京で上演、三千人の観客に共感をいただきました。東リ演の仲間劇団のみなさん、観劇と御協力ありがとうございました。(現在、再演を検討中)

◇川崎市教育委員会主催の第6回のかわさき演劇まつりに、地元の新しい演劇集団高津と合同で、関芸の道井直次さんの「しげばん太郎」をもって出演する予定。3月19日から26日にかけて2会場6ステージ。観客五千人を目標にがんばっています。◇次回公演は、「九〇二番船、進水ノ」に続く集団創作で、職場の自由と民主主義をテーマにとりあげたい現在準備に入った所です。(川崎市幸区古市場二一〇九)

◇上半期は記念公演No.1「どん底」です。今更いうまでもなく多くの劇団が上演して、夫々独自の舞台で評価を得てきた名作ですが、

札幌労働

誌が遅くなりました。大雪のせいではありません。ゴメンナサイ。寒い日が続きますネオンボロ事務所ではマイナス一九度の時、電話線がしばれたとかで一日使えない日がありました。私の家の水道のメーターが凍って、ハレットして、五〇〇〇円もかかってしまい、はやく春が来るといいなアと思う毎日です。今カゼがはやっています。お体には充分気をつけて下さい。

今年のはじめの例会、「奇蹟の人」(劇団民芸)のチケットです。(見本同封)前回一六五サークル今回一八〇サークル。のびました。それに私が専従になってはじめての黒字でした。今年はいい年にしたいです。もうすぐ22才になる事務局のチー。(札幌市中央区南2西6石黒ビル内)

鍋島演劇集団

今年のはじめに寒波の訪れで、毎日マイナス一五度から二〇度、けい古場もストーブを真赤にしても寒い。そのため結果もよくない。

第六回公演は五月十三・十四日、ロバートポルト作「花咲くチェリー」と決まり、けい古に入っている。演出・東野正博。彼は二月

に行われた東リ演劇大学に劇団の派遣により受講してきた。三月は友の会の拡大と劇団の組織強化のため日常に活動に対する点検や全体会議の開催など多忙な毎日。

今秋は創立5年を迎えるので創作劇の上演を予定し中村博をキャップにとりこんでいる。ご期待下さい。

劇団の問題①地域劇団としてのかかわりや自覚についてどのように活動を継続するか②当面一公演一千名の動員③創作劇の早期完成などが当面の課題です。

(鋼路市貝塚一六―一九加藤方)

編集部附記・鋼路演劇のニュースに、東野正博氏の東リ演劇大学参加の感想がのっている。全文紹介したいほどのものだが、残念乍らできないので、ごく一部分を拝借する。

「なぜか作家・作品研究の分科会に加わりました。東リ演劇作家群を目の前にして近い将来に夢をはせながら、芳地隆介氏を囲んでの激的な討論?約十五名の参加者、自己紹介だけで二時間。課題をかかえた参加者の意気込みがうかがえる。夕食後、芳地作品の今日性について、その足跡をたどりながら話合われたが、複雑な情勢が幾重にも積み重なった今日、芳地氏は三角形の面積を明らかにする上

で、自分の作品はその補助線としての役割にあると語ってくれたが、この分析の課題を与えられたような気がした。」

青年劇場

前略。大へん遅くなりまして申し訳ありません。間に合わないかもしれませんが、兎に角上半期のスケジュールを報告いたします。

「かげの砦」が2月と3月迄、関東近県の学校公演及び各実行委での上演。4月と7月東北、関東近県での公演です。

5月には新作「男一四十七才」の東京公演と引きつづく学校公演があります。

2月東京公演の「多すぎた札束」は5月に各地域の実行委員方式で公演があります。現在決定はしておりませんが新潟県での公演も考えています。2月15日初日(俳優座劇場)の「多すぎた札束」は反響も大きく、連日満席で、成功を取ることができました。ありがとうございました。

①④については3月末総会があり、そこで討議されることになりました。その時また報告させていただきます。(菊地弘二)

(東京都千駄谷5―33―6)

劇団新妻

11月13・14日道演集演劇祭は「観客のいな

い芝居なんて」の意気込で千余名の売上げで赤字を出さずに終わりました。出品作品も演劇祭向けの小品ではなく、既に自主公演済みかこれから公演に持ってゆく作品という事で函館(友達)・鋼路(俺たちのベガス)が力作をもってきてくれたのと、波、うみねこ、グビエロ、新芸の後志プロダクション4劇団の着実なちから、劇団さっぽろなどの他プロダクションの援助から生れた成果でした。

終演後、はぐるまのこばやさんの貴重な批評と共に直接観客へ地元劇団を育ててやってほしいと訴えて下さったことは感激でした

道演集総会(1月15・16日)後志プロダクション総会(2月5・6日)も終え、私たちの新芸総会は3月13日予定しています。

春の小公演は作間謙二郎(犬を喰ってはない)磯野博(初)演出。6月5日、公会堂で2ステージの予定。秋の10周年記念公演には、秋元松代作「アディオス号の歌」が第一候補に上っています。この作品では実績のある演出家を迎えたい考えです。現在団員、男8女6。東リ演「演劇大学」には3名参加しました。劇団のちからとしてどう浸透してゆくかたのしみです。(宮津泰子)

(小樽市銭函2―47―16鹿角優一方)

「演劇教室」10年間と私

山田 昭子

(劇団四紀会)

「演劇教室が地域に果す役割について」というテーマで岸本さんからレポートを書けと言われた。そんなカッコイこと私には書けない。私にとって「演劇教室」の10年間は泣き笑いのカッコワルイ人生である。今年で19年の劇団生活の半分をひたすら教室に全力投球してきただけである。こんなこと今更書いて、しかも北は北海道から南は九州まで全国の仲間目にもふれるなんてただただ恥しい。みなさん、なるべく読まないで下さい。

△はじめのころ▽

「神戸働くものの演劇教室」は「劇団員拡大を第一義的の目的とせず、広く職場、地域のサークルで中心になれる演劇活動家を育てる演劇教育機関」として、呼称は西リ演の共同事業として取組むために「神戸働くものの演劇教室」と名付られ神戸労働や神戸職演連

等、他団体にも呼びかけながらともかく劇団四紀会の後援のもとに「どこにも附属せず、演劇の基礎を学ぶ場」として、一九六八年六月に創立されました。

主事・岸本敏朗、事務局・多田井淑代(山田昭子)・応募者25名を迎えて、六月より翌年五月まで一ケ年間、週3回の授業でその第一歩を踏み出したのです。最初の一・二年は主事が何もかも教える「寺小屋」方式で進められ、モタモタとしながら三年目を迎えた頃から事務局の体制が確立して、劇団内・外からも講師陣が強化されていったように覚えて

います。

神戸でもはじめての試みですし、何の手本もなく、それでも一年、二年と積重ねる中で手さぐりしながらみんなに楽しくのびのび勉強してもらうためにはどうすればいいか、この教室に来て良かったと思ってもらうため

には。生まれも聞もない小さくひ弱な教室をどう守っていくか。ただ必死でやるしかありませんでした。

劇団はその頃忙しいスケジュールで動いていました。「演劇教室」のことはまだそんなに重要視されていません。教室の講義スケジュールはともすれば劇団のスケジュールの影響をもろに受けてガタつくこともしばしばでした。団内の講師の確保、教室の授業を止めないこと―教室を独立したものととしてその主体性をどう守るか―私はそのことに全力をつくしました。劇団に文句を言い喧嘩もしました。今もってまだこの種の葛藤はつづいています。

「劇団にとって教室とは何なのか」「教室と劇団の関係とは」そんな疑問や不安の中で言知れぬ孤独感におそわれるのです。

それでも5年目をひかえた時の喜びはひとしおでした。

△五周年のこと▽

コソコソと積み重ねてきた教室の活動が果して何であったのか。

少し落ち着いた私は周囲をみまわしてみました。調べてみると5年間の卒業生50名、受験

者即名、卒業後も演劇をつづけている人が27名いることがわかりました。「教室で学んだ人が50名もいる」。このことは大きな驚きでした。私はこの卒業生達と一語に教室の5年目を祝いたいと思ったのです。

一期/五期までの卒業生の手による「神戸働くもの演劇教室五周年記念公演」はこんな単純な発想から生まれたのです。

主として劇団にいる卒業生の各期の代表者が世話人となり呼びかけたこの企画に東京から松江市まで散らばっていた卒業生から、大きな反響があり又々びっくりしたので。

最初の集りは、なつかしい顔が30名も集まったのです。同期生以外の人とはほとんど初対面という状態の人達を集めて芝居をやるうと言うのですからみんなの交流がうまくいくか、それが大きな心配でした。就職差別と闘う、静岡大学教育学部の若者達の生きる姿を描いた「明日の教師たち」を、五年間主事をやってきた岸本敏朗の演出でやることに決まりました。稽古場の雰囲気は最初の危惧を覆えて、実に和やかに、ほほえましい交流の場となりました。先輩も後輩も、卒業後演劇をつづけた人も止めてた人も、「教室で学んだ」と言う共通点が全員の心をつかりつな

いだようです。

教育の問題を真正面からとりあげた「明日の教師たち」の公演は演劇教室も教育の場であることを改めて認識させてくれました。差別と選別の受験中心の今の教育制度がどんなに若者達の心を荒廃させ、人間に対する信頼を失わせているか、だから演劇教室の「誰からも強制されずそこで学ぶ人が主人公」と言う当り前の方針が若者達にとって新鮮なものであり、おどろきであったのだろうと思います。テストもなく面接だけで、誰でも、入る意志さえあれば落ちることもなく、授業をサボっても注意はされるけど強制されず、その代りサボった分だけ自分が後で困るだけです。教室の一年間は自分自身との闘いです。外からみればこんなに暢気な、しかし本人にとってはこれ程きびしい学校はないでしょう。応募者の半数しか卒業出来ないことがそのきびしさを物語っています。だから一年間をくぐり抜けた卒業生達にとっては「青春時代のまん中」を生きたしるしとしていつまでも心にとり、その後の生き方にさえ影響を及ぼしているのでしょう。

五周年記念公演の成功は卒業生の教室に寄せる熱情が原動力となりました。

半数が卒業生で占められ、各推進班の中心的な働き手の大部分は卒業生です。いつの間にか「演劇教室」は劇団四紀会にも大きな影響を与えはじめていたのです。

七期では地元の劇団から勉強のために入学してきた人もいました。「劇団わだち」からは、代表者を含む5名が入学して、卒業していきました。劇団員不足で悩むこの劇団に同期生達は客演したり、裏の仕事を手伝ったり、力になっていくようです。「劇団どろ」へ帰っていった卒業生は今度、研究所の担当になったと張切っています。

神戸には「演劇教室卒業公演」のファンがいます。一期生の公演からかかさず観てくれている人が、私の知っているだけでも、415人はいいます。「この卒業公演はいつ観ても気持ちがいい。初舞台を前にしての期待と不安に、体ごとぶつかって創り出していくその真摯な態度が、他の数多の公演に見られぬみずみずしさとなって、観る者の胸を打つのだ。」こんな文章が、五周年記念公演に寄せられたのです。

毎年、夏はコーラス、秋は新劇史、そして民謡と外部の講師の方も多種多様です。神戸労働の委員長さんから国鉄の助役さんまで

「演劇教室」は卒業生達やこれらの人々によって支えられてきました。この細長い神戸の街に「演劇教室」がジワジワと確実に広がり、息づいていることを10年目にしてやっとこの目で確かめられるところまでできました。

「これからもつづけていくために」
「演劇教室」をこれからもつづけていくために問題は沢山あります。

ひとつはこれまで「演劇教室」を支えてきたのは「若い人を育てる」ことへの熱意に燃えた人々の個人的な負担によるものでした。忙しすぎるスケジュールをさいて、毎年、工夫した授業をやって下さる外部の講師の方々、劇団スケジュールに追われながらの授業はしんどく、ついに病人まで出してしまった団内の講師、事務局にいたっては稽古場の確保から募集事務、また卒業公演の演出助手の仕事から制作指導、それに身上相談係と、一人で二人前、三人前も動かないとやっていけないありさま、しかも卒業式をやった翌日は新しい人の面接と休むことなく歩きつづけるしんどさは気が遠くなるほどです。

観客員でも同じ問題を抱える神戸大学教育学部部に徹底的にかかわり、自治会に「見る会」が作られ、110名の大学生が観劇する中で、神戸大学の就職差別斗争にも大きな影響を与えたばかりでなく、大学に労働サークルまで生まれるオマケまでついたのです。

公演当日は舞台も客席も若い人達の熱気がムンムンとして十二月と言うのに寒さも吹飛びそうでした。

私は神戸の若者達のためにもこの「演劇教室」をつづけなければと、さらに決意を新たにしました。ところで五周年はもうひとつ大きな副産物を生みました。卒業生の横の連絡組織として「卒業生の会」が誕生したことです。卒業生同志がこれからも交流を深め、みんなの教室をみんなの手で育てて、もっともつと後輩をふやそうと言うことでした。そして、一期から十期までの卒業生の手で「10周年記念公演」を行うことも申し合されました。

この「会」は今迄に卒業生同志で結婚した人の祝賀会や、総会を開いたりといった独自の活動をやってきました。五周年をきっかけにして新しく劇団へ入団した人2名、復団者2名が加わりました。そして今では劇団員の

お蔭で私は10年目に事務局体制が出来てからは自分自身が「役について」舞台に立つことが出来なくなっていました。

「演劇教室」がその出発点で地域における演劇活動の重要な仕事として位置づけられていたにもかかわらずこの10年間劇団全体が責任をもったものとして進められていく点が弱かったのではないかと思います。

劇団の中心メンバーを講師に送りこみ、とにかく休むことなく続けてゆくために劇団は大きな努力を払ってきました。しかし、神戸に演劇を広めてゆくうえでどうしても「演劇教室」を強化していく必要性が実感として理解されていらないのではないかと思います。

多くの仲間が教室へ参加してもらったため、募集についても事務局任せになっているし、若い人をどう育てるかという、カリキュラム等創造方針についても講師や事務局任せです。

お互いの稽古場が地理的にも離れていることも災いして時々卒業生が姿をみせるくらいで劇団員はほとんど教室をのぞきません。

教室の自主性、独自性を尊重しながらもやはり劇団全体が責任を持ち指導していくことが大切なのではないか。また、六月になると

自動的に教室を卒業した新しい劇団員が増えている。このことで本当に自分達の手で同じ道を歩む仲間を増やすことへの意欲さえ風化してしまっているのではないだろうか？新しい仲間を生み出す一年間の講師、事務局の不断の努力がわかってもらえているのかと、不安になるのです。

6年間ひとりぼっちだった事務局も今年は4名にもなりましたが、「教室の事務局をやっている」と芝居が出来なくなるのでは……という不安をずうっと持っているようです。そんな時、果して今迄やってきた私なりのやり方がよかったのだろうかと考えざるを得ません。そうするしか仕方がなかったのです……。

事務局も新しいメンバーの創意工夫によって今迄と違ったやり方が生まれてくるでしょう。その時、「演劇教室」は私をも乗りこえて大きく飛躍してゆくことでしょう。

そんな時がきたら私は一寸淋しいだろうけど、どんなに嬉しいでしょう。とにかくしんどいけど歩みつづけるしかないのです。それが遠廻りにみえても一番の近道なのです。

今日、一月三日。劇団四紀会家族劇場で

八期卒業の劇団員が初舞台を踏んでいます。劇団の稽古場では九期生が卒業公演の台本を印刷しています。「神戸働くものの演劇教室」は今日も動いているのです。

演劇教室の歩み

- 。一九六八年六月 劇団四紀会後援のもとに設立
- 。一九六九年五月 第一期卒業公演「獅子」(三好十郎・作、岸本敏朗・演出)
- 。一九七〇年五月 第二期卒業公演「女の一生」(水木洋子・作、岸本敏朗・演出)
- 。一九七一年五月 第三期卒業公演「女子寮記」(山田時子・作、新木祥之・演出)
- 。一九七二年六月 第四期卒業公演「五月」(宮本研・作、永井久朗・岸本敏朗演出)
- 。一九七三年六月 第五期卒業公演「共働き」(長谷川伸二・作、岸本敏朗演出)
- 。一九七三年十二月 創立5周年を迎え、一〇五期卒業生による創立5周年記念公演「明日の教師たち」(石崎一正・作、岸本

敏朗演出

- 。一九七三年十二月 「神戸・働くものの演劇教室」卒業生の会発足。
- 。一九七四年六月 第六期卒業公演「明日を紡ぐ娘たち」(廣渡常敏・作、梶武史・演出)
- 。一九七五年六月 第七期卒業公演「楠三吉の青春」(大橋喜一・作、岸本敏朗・演出)
- 。一九七六年六月 第八期卒業公演「サークル物語」(鈴木政男・作、梶武史・演出)

(52・1・30)

劇団息吹の誕生のこと

田 中 実

豊かな流れのために

作 広田江美子

二つの川が合流する
するとどうなるだろう
明らかに
その一つのときよりも
水量が増し
より豊かな流れとなって
人々のくらしを潤おす
と 思ったのだが
はたして
ほんとうにそうなるの？
ねえ 君
「そうなる!!」
と君は胸を張って答えてくれるかい？
川を築いてきたひとりびとりだからこそ
豊かな流れのために
今一度
心静かにして

想い起してみよう

その流れを築くのは 私たち
この場に一同に集まった私たちひとりびとり
冷えきった体でふるえながら
ペンをとる君
やっと子供が寝入って きて それから
本をひらく君
幾晩もかけて理想の小道具を
つくる君
一人でも多くの人に
語りかける君
そうだ
その流れを築くのは 私たちひとりびとり
(合流のためのアピールから抜粋)
一九七六年十二月十八・十九日、大阪わら
び座会館に集った十八名の顔は嬉しさに輝い

ていた。

その日は、一九七五年四月、劇団「かみがた」から演劇集団「息吹」へ合同の申し入れがあったから一年八ヶ月を経ている。

当時の「いぶき・かみがたニュース」には、次の様に記されている。

「……両劇団は、文化の退廃化が進行する中で、自分たちの手で、自分たちの文化を創るという目的でそれぞれ活動してきました。そういう劇団が、将来合同しようという意志を確認しました。……細部まで一致出来るまで合同出来ないということもなく、大筋で一致したのだから、具体的公演活動をしながら、解決すべき点を解決しようという意味で、合流準備公演としました。又「合同」でなく、「合流」という表現は、小さな二つの流れが合流して大きな流れになるという思いです」
こうして将来合流の意志確認をして、両劇団から選出された上演委員会のもとに合流準備公演を経ての合流総会であった。

団員の隠しようもない嬉しさに単に団員が増える、機動力が出来るというだけでなく、合流の条件づくり困難を乗り越えた充実感、解放感がそうさせたにちがいない。

合流確認前夜

〈息吹〉

演劇集団息吹の前身、東大阪自立劇団息吹は、一九五八年四月、東大阪市、八尾市を中心にした、東大阪地域に点在していた演劇愛好家の青年二十数名の結集によって創立された。一九六二年一月、それまでの演劇サークルを脱し、演劇運動体としての性格をより一層明確にする必要にせまられ、名称も演劇集団息吹と改めた。

一九七四年、創立十五周年記念公演直後代表者をはじめ劇団員の減少、とりわけ記念公演で自覚させられた演劇力量の未熟さの前に、次の創造計画がなかなか決まらない状態にあった。

劇団の歴史は長い、創立当初からの団員が皆無であり、創造の中心である演出者がいない中で、演出者を育てることからはじめねばならなかった。そしてやっとの思いで決めた「良縁」（作・山田時子）の創造も団員一人ひとりの努力にもかかわらず思う様に進まずにいたが、大阪自立演劇連絡会議の合同公演に参加した。

〈かみがた〉

一九七二年春、民青文工隊活動を終って劇

団2月の研究所に通い、一九七二年九月、研究所とともに学んだ仲間を含め結成された。

一九七四年、劇団かみがた旗上げ公演をしたが、職場や地域の人々の援助、文工隊の仲間、息吹の協力でようやく幕を上げたのである。劇団員個々のかかえている困難な条件を克服しきれず、当初の意気込みは第一歩から揺れていた。

秋の移動公演も中止せざるを得なくなり、はやくも劇団の存続について考えざるをえなくなっていた。

そんな時、大阪自立演劇連絡会議の合同公演に参加して、困難を抱えながら頑張っている仲間のはげましを受け、自らも灯を消したくない、生きつづけたいという思いの中で、一度は解散をいながら、苦勞した仲間ともう一度やりたい、劇団結成当時の「ゲタばき」で観に行ける劇場づくりという精神を貫きたいという思いが、息吹への合同申し入れとなった。

予備会談

かみがたから息吹へ合流の正式な申し入れの前に双方の劇団員による予備会談が行われた。

かみがたからの問題提起

題にならないという思いをしていた。

よった。

かみがたとしては、劇団員一人ひとりの矛盾と困難の前に劇団の存続を断念せざるをえないが、かみがた結成に託した、演劇への情熱と主張は、どうしても引きつぎたい、この思いを受け入れてくれそうな劇団といえ、息吹しかないだろう。

かみがたの「ゲタばきで観に行ける」舞台をつくるという表現と、息吹の「劇場のないところへ劇場をもって行く」ことでは、一致するし

①それぞれの劇団単独ではできないことができる。

②公演のテンポを速くし、観客との交流を深めることが出来る。

③その結果として、民主的文化の発展に寄与することが出来る。

ことを確認し、合流のための具体的活動を通じて理解し合っていくことにした。

合流準備公演

実践的に合流を準備する第一弾として、息吹から「良縁」（作・山田時子）かみがたから「めくらぶんど」（作・川村光夫）をもち

公演記録

〈公演月日〉 〈場所〉

| | | |
|-------|---------|-----|
| 十月十七日 | 八尾市民ホール | 二五〇 |
| 十八日 | 〃 | 〃 |
| 十月十九日 | 東大阪女子短大 | 二〇〇 |
| 十一月七日 | 東大阪文化会館 | 一七〇 |

〈観客数〉

第二弾は「河童訛証文」（作・栗原省）

| | | |
|--------|--------------|------|
| 六月五日 | 八尾市民ホール | 二二〇 |
| 六月十日 | アポロホール | 二〇五 |
| 七月四日 | 東大阪青少年婦人センター | 一四〇 |
| 十一月六日 | 山畑会館 | 二六〇 |
| 七月 | 〃 | 〃 |
| 十一月十三日 | 上之島中学校 | 一三〇〇 |

第二弾では、地域にあって、日頃発表の場を持たないサークルと共催して、地域文化発展を目指して取りくんた。その結果新しい公演地観客を開拓出来たこと。「しんどい生活の中で、観せてもらって生き返った気分がした」「子供が河童のマネをして遊んでいます」

一、息吹の「八尾、東大阪を中心に、地域に根ざした創造」活動で、地域に根ざした創造には異議はないが、八尾、東大阪に限定することは、自らの手足を縛って活動を狭く小さなものにしなないか。

一、民謡とおどり、太鼓等で、文工隊活動をしているが、劇団員は、おどりをやらねばならないのか。

一、もし合流した場合、稽古場を変えられないか（かみがたの団員が息吹の稽古場に通うと一回五〇〇、七〇〇円の交通費がかかる）。

息吹からの質問

一、かみがたをなぜ続けられないのか。

一、なぜ息吹を選んだのか。

一、なぜ合流でなければならぬのか。

かみがたの結成当時、息吹を含め2・3の劇団から入団勧誘があった。

息吹としては、かみがたを続けられない実情を理解することは出来るし、劇団員が増えることにはもとより歓迎するのであるが、矛盾と困難をいっしょに持ち込まれるのではないか、いったん解散して一人ひとりの資格と自覚で入団すれば、活動方針も、稽古場も問

「来年もぜひ来て下さい」など聞かされ、又中学生が、稽古場を訪ねて来てくれ、何か手伝いたいと申し出てくれるなど、創造水準はさて置くとしても、「やっついてよかった」「次はさらに良いものを」という思いを強くした。残念なことは当初の計画であるサークルとの共催ということでは、「素人落語大阪風の会」「演劇サークルありんこ」の二集団にとどまり、他集団との間で実現できなかったことである。

合流準備公演の成功は、合流の時期を早めた力を合せれば出来ることが実証され、早く次の創造課題がほしいという欲求、地域に根をはった創造の方向に確信を与えたこと、これらのことは、組織的にも、財政的にも、単一の集団としてスッキリさせたいという思いを強くし、年内合流を可能にした。はじめは、準備公演を年積み重ねてという見通しが、予定の最も早いところで実現したのは、団員の創造への意欲はもちろんだが、観客の力であり、「河童訛証文」という作品であるといえる。

さて、合流のための新しい劇団の基本方針と規約の作成は、合流準備委員会で作業が進

められた。

一、働きながら演劇活動を続けること
を明確にしたこと。

一、地域々については、準備公演の取り
くみで認識を前進させることが出来たこ
と。両劇団の歴史を尊重し合い、そのこ
とを基本方針前文に明記することで本文
には、創造の基礎は働く人々をはじめと
した広範な人々の生活です」と表現する
にとどめた。

一、民謡とおどり、太鼓については、新
劇の歴史・日本民族の伝統芸能、さらに
他のジャンルからも学びつつ常に新しい
演劇創造の可能性を追求する」として今
後も積極的に取り組む。文工隊はその
結果であって目的ではない。

合流したことの真価が発揮されるのはこれ
からだと思いますが、まさに劇団を発展させ
る力は、観客であり、いい戯曲の出現とい
う思いをしています。

最後に、劇団名は
演劇集団息吹、劇団かみがた、劇団河内座
劇団息吹、河内芸術劇場……等提案され、投
票の結果劇団息吹と決定した。

劇評

意欲的だが未消化

中野勤演「海が碧いのは空のせいよ」

中野勤演が、小坂チェウ作、佐伯幹哉演出
の「海が碧いのは空のせいよ——ベトナム以
後症候群」を上演した。(七六年十一月26・27
日、東京・中野文化センター)

東リ演劇東プロダクションでは、今年度の観劇交
流会の第一弾としてこの創作劇を選び、観劇
のあと、合評会をひらいた。観劇したのは八
劇団、二十数名で、一つの集団の公演をこれ
だけ観たのはおそらく初めてのことと思われ
る。合評会に参加したのは六集団十五名であ
ったが、肝心の中野勤演が、一般客との合評
会のため出席できず、不本意ながら欠席裁
判となった。

その合評会の内容はよくメモしているの
でそのまま載せることも可能ではあるが、当
日出席できなかった中野勤演に誤解されない
ように伝えきれぬ自信がないので、あえてほ
く個人の感想と意見を中心に書いてみたい。

紹介 フランス芸能人の生活 その1

先ず殆んど無権利状態と云っていい日本の芸能人たちにとっても、この書は多くの示
唆を与える貴重な生きたレポートであると云えよう。

フランスには芸能人の地位をまもる法律が二つあって、一つは芸能人の法的地位、今
一つは芸能プロダクションの営業条件を定めたものだが、それはまだ弱々しいとされて
いるが、それすら実に七九年にわたる長い闘いの結果であるとおしえられると、日本で
は殆んど絶望的にももえてくる。

しかし、何とフランスにおける芸能人の「神話」と「現実」は日本のそれに酷似して
いることか。スターにまつわるペールを割いで芸能人が労働者であるという発見は大き
な明日へのステップだ。芸能人の歴史とも云える正確さでそれが説き明かされている。
これは現場ではたらくフランス芸能人労働組合の人たちの共同研究による労作で甚大
なものだが、実態調査や統計などを加えて、オペラ、演劇、映画バラエティ等各ジャンル
にわたって克明に記述される。

雇傭関係、賃金、失業問題、養成制度等々、当然のことながらそこには現実こそくし
て改革案や提案も出されている。

今回はその第一分冊として「序論とオペラ」である。訳者はその人を得て、青年劇場
の土万与平氏。

発行 社団法人 日本芸能実演家団体協議会

東京都港区新橋二一八 藤田ビル

電話(〇三)五〇一五七六二・五七七二

頒 価 六五〇円

城 谷 護

(京浜協同劇団)

意欲的な挑戦に拍手

作者の小坂チェウ(以前は小坂忠)は、ま
ったく意欲的な人だ。書きたいと思ったモチ
ーフでバリバリ書く。数年前にも「真謝部落
陳情口説」を書いたが、今度もベトナムを通
して、アメリカ—日本—「韓国」とも
っとも今日的な問題をとらえた。タイトルの
つけ方にも見られるように、彼の大胆さには
いつも衝撃を受けずにはいられない。ほくら
が手をつけたいと思いつつながら、手をつけられ
ないことをズバズバやっけてける。ぼくは今
回もまた、ためらいなくその意欲に拍手をお
くりたい。

「だが、演劇がこうした問題に立ち入るこ
とは、見る側にもやる側にも様々な困難があ
る。」と彼は言う。(公演パンフより)

「僕自身、『大政談』のような作品の方が
楽しいし、そういうタイプの作品にしようとな
あれこれ考えた。が、結果はそうはならな

った。現実をはるかに暗くドロドロと流れて
いる。せめても、あるがままの現実を記録す
る以外に、未熟な僕の対応策はなかったの
だ。」(同)

たしかに、ぼくの目からみても戯曲は、未
消化であった。十一の場面やショットから成
るこの作品は、アメリカになったり、ベトナム、
「韓国」になったり、短かい場面を折り
重ねながら、最後に、「日本・一九七六年
夏」と題する一労働者の夫婦の会話で終わ
るのであるが、一つ一つの場面の意味がよくわ
からないまま次の場面へすべっていき、作者
が言いたいのはわかるのだが、舞台そのもの
からは伝わってこないのだ。

たとえば、「韓国」の一青年労働者が妻の
出産費用をホテルの一室から盗み、逮捕さ
れ、民青学連事件にまきこまれ、KCIAの
拷問を受ける場面がある。この場面は非常に
ショッキングな場面である。しかし、こうい
う場面というのは、ドラマのテーマとかかわ
りなくそれ自身ショッキングなものである。

しかし、今日の日本で描いてみせるべき
は、目に見えるショッキングな事件ではな
く、見えないビストル、見えないオリ、見え
ない拷問ではないのか。見えないオリやビス

トルをどう発見し、描き出すのかこそわれわれの今日の課題だと思ふ。作者もおそらくそれを書きたかったのだらうが、それは未消化だったように思う。

この点について、合評会でも意見が出された。「新聞記事の域を出ていない。」「感覚は鋭いと思うが、作者の中をまどくぐり抜けていない。」などがそうである。

執筆期間が上演前の二か月間であったことも災いしているとは思ふが、上演後、作者が一定の期間をおいて練り直せば、きつと見ちがえるような作品になるような気がしてならない。

もっと鋭角的な演技を

舞台の方にうつるが、この戯曲が、これだけの緊張した舞台になったのは、俳優座から招いた佐伯赫哉演出の力によるところが大きい。その点では、中野勤演にとって、外部の演出者をたのんだことの意義は小さくないだらう。ぼくは、佐伯さんの他の仕事をみていないので口はばったことは言えないが、演出手法はあくまで小坂チュウの作品を、彼の視点をどう生かすかにしぼられたようで、心配していたキザさがなく、好感がもてた。

ただ、気にかかるのは、中野勤演が、#Bの演出者にどれだけ刺激を与え得たかという点である。

こういうオムニバスのドラマの場合、心情的な夜づくりや自然主義的な演技ではいけないとぼくは思うのである。もっと場面の意味を明確にさせる演技があるはずだ。

この点について、合評会では、末路の牛崎さんが、「もっと意識的な演技が必要。言いたいことだけは言う、ぶつけるというのが必要ではないか」と発言され、京浜の黒沢が、「役づくりは、心情的ではなく、かえって記号化、パターン化した方がよい」と言っていたが、なるほどとぼくも思った。

たとえば、「靴みがき」の場面では、靴みがきの少年は、米兵をだましてでも金をとらなければ生きていけない、そういう鍛えられかたをしているはずであり、演技も当然そういうものであるはずだが、ぼくの目に映ったのは人のいい、そして少し智慧のある少年でしかなかった。

小坂チュウ独特の、クールなセリフや人間の描き方が、演技のうえで薄められたところが随所に見られた。作品の遅れがそのまま、未消化の演技となって現われたのかもしれない。

い。

最後に、幕切れについて触れたい。観客もおそらくそうであったにちがいないが、次から次へ場面が変わっていくなかで、幕切れの、それも唯一の日本の場面がどうなるのか、に最後の希望を託したのである。ここでは、当然のことながら作者も、新しい出発を出したかったのであるが、残念ながら、問題提起にはなり得なかった。ベトナム戦争が終わり、「ベトナムの平和によって(反戦歌を)唄えなくなった」ホサカタケン夫婦が、ベトナム産の煉炭に手をかざしながら、「大事ななくしたものがひよっこり見つけたような気がしたの」というセリフに象徴させる幕切れは、作者の視点をかえってぼかす結果となった。「海は本当に碧いのだらうか」という作者の問題提起は、日本のこの現実にごそ向けられなければならないなかったのではないだらうか。

劇評

劇団四紀会家族劇場

「さしやのやえもん」「ねずみのよめいり」

浅野良 二

一月二十九日(土)の夜の公演をみせてもらった。招待者には夜の部という指定があったのは、昼間は子どもが多いので、できるだけ静かな鑑賞を、との劇団側の配慮だったのかもしれないが、会場は、子連れ?か、はたまた親連れ?か、のチビッコたちの熱気があふれていて先ず驚き、あしたの日曜日ほどさぞかし大変だらうと、余計な心配までし乍ら、(これはうけているなア)と直感。この公演は、劇団の家族劇場推進班の制作で、市教育委員会、地元新聞社、テレビ局、子供を守る会、子ども会連合会、親子劇場等の、いわゆるお役所、マスコミ、民間の組織を総動員したような、劇団独特の活力にいつも乍らの怪物的な四紀会ムードを感じずにはおれなかった。

「さしやのやえもん」

この作品の原作が小説家の阿川弘之氏であ

り、神戸では小学校二年の国語読本にのっている「さかんしややえもん」であることも、私は一年前までは知らなかったのだが、或る事情で親戚の二年生チビッコをしばらくあずかることになり、たまたま「さかんしややえもん」を学校で学んでいたところだったらしく、「やえもんはなぜにくまれるようになったのしょう?」などの宿題までやらされるハメになり、二年生チビッコと「老朽機関車やえもん」が、わが家の話題を独占した一時

期があったので、そのお陰でと言ってはおかしくない話だが、劇の幕切れで「やえもん」が風呂屋のカマに身をおとすくだりなど、原作ではたしかな博物館へゆく筈だった、などの比較ができ、成程、風呂屋のカマとはうまいこと考えたものだと、荒木昭夫氏の脚色を感心したりするのだったが、さきにのべたように、小学校の教材になっているせいもあってか、

幕あきから客席のチビッコたちの興奮は相当なもので、舞台からの呼びかけには、すかさず一斉に大声で応答し、舞台と客席が一つになっただけで、まるで事前リハーサルでもやったような名場面が連続し、開幕三分間で劇の成果をきめてしまったようだったが、積み重ねたダンボール箱一ぱいに描かれた機関車の絵が、場面転換と同時に積木を崩すようにテキハキ変ってゆくさまは、いやが上にもチビッコたちを舞台へ引きつけ、「機関車やえもん」を演じた三村省三氏の機関車そのものの風格?も技群乍ら、劇を支えた劇団のベテランたちの、終始生真面目な演技(役者として当然かもしれないが)と、それをスピーディに統一した振付と演出の力によって、この劇が、家族劇場の極め付になることはもはや疑いがないようにさえ思えた。

「ねずみのよめいり」

作者の桜井敏が何をかくそう(実は二十年もかくしていた?)岸本敏朗氏の筆名であることを私は劇団の人にささやかれて知った。苦節二十年?いよいよ演出の岸本敏朗氏劇作家としての登場である。それだけに一段と興味があり、立派な台本もできていたので開演前の短い時間にむさぼるように読んだ。

「ねずみのちゅう子が年頃になり、いざ嫁入りさす段になって、ふた親は人間の世のならしいにも似て高のぞみし、ちゅう族ではない、「お日さま」に目をつけるが、「お日さま」のかわない相手が「雲」だと知ると、「雲」に乗り替え、「風」「壁」と次々に婿をえらび直す、当のちゅう子は同じ仲間の中ちゅう太が好きだと言い、ふた親ともびっくり仰天するが、結局ちゅう子はちゅう太の嫁になり、ちゅう太が餅つきちゅう子が売って嫁入り餅と名付けたら——というのが劇のあらすじだが、この諷刺は、むしろ子どもよりも子どもに付いてきている親たちへ向いているように感じられ、或いはそのことが作者の狙いかなアとも思わせるのだが、客席の子どもたちは親たちがしきりに頷いているにもかかわらず、提起された問題にすんなりなじめないのか、急におとなしくなってしまう乍らも、お日さま、雲、風、壁、と次々に現れる異様な風体の人物？と、カラフルなれん画が間髪を入れずにくるくる転換する装置と、歌(きしやのやえもん共に岸本敏朗氏作曲)と劇画的なアクションにかたずをのんで見入るのだが……残念なことに、狂言まわしの餅売りが逆に狂言に振りまわされた恰好で説得力

を欠き、餅売りだけではなく全体的に歌とセリフのトーンが弱く、演技も余計なところに力が入りすぎ、かんじんの決め手が出ないの、芝居が散漫に流れ、観ている方を無性にイライラさすのだったが、しかし、殆どが顔なじみのない劇団のニューフェイスたちで、恐らくは演出の言うことをつかみきれずに、それ以上どうにもならない限界の中で、シヤニムニぶち当たっているかのような、悲壮に近いものが私のイライラを कारणうじて静めてくれた。芝居を自分の力でマスターし、一年先、いや二年三年先には自信をもって舞台に立つ日を信じてニューフェイスたちよ頑張っ

ッコ内筆者)とあったが、それは単に外交辞令的御礼の意味ではなく、まさにズバリだと私も思うが、この一月の家族劇場が二月公演の「吹雪のうた」(作きしだみつお演出梶武史)とのダブル稽古だったことにもふと思いをはせ、「四紀会は連日夜遅くまで稽古してゐる」という風聞と合せ考え、新しい稽古場をもって意気さかんな劇団の活動のさまが、羨ましいような、頬笑ましいような、そしてちよびりではあるが、突ッ走りすぎて故障でも起きれば、という心配も実はあるのである。



劇評

手さぐりのリアリズム

△中野プロダクション76年度後半の上演から▽

丸子 礼二

(名古屋演劇集団)

△創造委員△という空恐ろしく、又何だかわからない名前のもとに、76年の下半期の上演を見て廻った。しかし、自分の劇団活動も(そして生活も)多忙をきわめる中なので、辛うじてスケジュールをこなしたというのが実際である。そこで創造の成果について報告を書けと云われても、あまり責任が持てそうもない。とにかく、記録する仕事は必要だと思うので、あわせて印象のようなものだけは述べておこうと考えた次第。

と子の劇場 三重マシカルグループと合同 10/30 於四日市市民ホール
しかた・しん作・山本じゅんこ演出『はやてに走れ あまんじやく』
☆劇団名古屋 11/4・7 於名演小劇場
集団創作・演出『見ている』
☆劇団はぐるま 小さな親と子の劇場 11/10・14 於はぐるま小劇場
野呂祐吉作・こばやしひろし潤色・島源三演出『吉四六さん』
はぐるま実験劇場NO1 11/24・28 於はぐるま小劇場
つかこうへい作・上野紘士演出『出発』
☆劇団名芸 11/20・23 於名芸小劇場
W・シェークスピア作・池田博演出『十二夜』
☆上野市民劇場 12/4・5 於上野産業会館

△中野プロダクション9劇団の下半期公演は以下のとおりである。
☆劇団つむぎ座 第1回創作劇 10/19・20 於・名演小劇場
栗木登喜夫作・河合博介演出「仮横」
座馬一也作・栗木登喜夫演出「島へ」
☆四日市市民劇場 四日市市民文化祭・観

と子の劇場 三重マシカルグループと合同 10/30 於四日市市民ホール
しかた・しん作・山本じゅんこ演出『はやてに走れ あまんじやく』
☆劇団名古屋 11/4・7 於名演小劇場
集団創作・演出『見ている』
☆劇団はぐるま 小さな親と子の劇場 11/10・14 於はぐるま小劇場
野呂祐吉作・こばやしひろし潤色・島源三演出『吉四六さん』
はぐるま実験劇場NO1 11/24・28 於はぐるま小劇場
つかこうへい作・上野紘士演出『出発』
☆劇団名芸 11/20・23 於名芸小劇場
W・シェークスピア作・池田博演出『十二夜』
☆上野市民劇場 12/4・5 於上野産業会館

G・フイゲレイド作・杉森正美演出『狐とぶどう』
☆岡崎演劇集団 12/5 於岡崎勤労会館
大橋喜一作・平岩千尋演出『月の横町のネコの店』
……この他名古屋芸術祭としてエウリビデス作・内山千吉演出『トロイアの女』(11/16・20 於名演小劇場)に名演集・つむぎ座・名古屋が中心勢力として参加している。
名古屋演劇集団と桑名の劇団すがおが自主公演を持たなかった。前者はけい古場建設のため学校移動公演に主力を注ぎ、後者は燃えることのできる作品がなかったため△と云うことである。
以上のうち上野市民劇場は自身のミス(上演期日変更)に気づかなかった)のために見ることが出来なかった。残念であった。
秋の上演の第一印象は演目の多様さであり、東リ演△という名の公約数が成立するかどうか考える必要を感じさせる。第二は小劇場公演が大変目立つこと。偶然であらうが、流行語をつかえば、各劇団のバイオリズムが一致したという所か。次のシーズンには、大きな企画が予定されている所が多いので、小劇

場主義のせいでもないようであるが、岐阜の
はぐるまと名古屋の三劇団がそろって小劇場
又はけい古場で公演を行ったことはやはり見
逃せないことである。

(四) かつて東リ演劇団の上演作品に、「イ
ルクック物語」とか「若ものたち」といっ
た同じものが期せずして揃って、一寸問題が
あるのじゃないかと指摘されたことがある。
では多様化した方がよいのかというと、私は
又別の問題を多様な演目の中に感じたの
である。

つむぎ座の創作二本の内「假構」は自らを
天才と称する若者が黒衣の僧と会うことによ
り死の世界を垣間見て、現実の生活と断絶し
てしまう話であり「島へ」は何人も女を殺
して金持に売り、その金で「島へ」へ行こうと
する殺人者の心理と詩(うた)。いづれも主
観的抽象的な作品である。(抽象的といっ
ても、逃げようとする女を絞殺する場面や、そ
んな事をしておいて「島へ」は俺を暖かく迎えてく
れるだろうか」という幕切れの独白等は見て
いる方がはかしくなってくる)

また、舞台の密度とか、流れの手際の上さ
はつむぎ座よりは十分高いものだと感じた

劇団名古屋の「見ている」は五人の作者と
三人の演出者によって朝鮮についてのプロロ
グとエピローグを加えて10の小品。見てい
るとは行動することのはずという訴えかけを
結核、食事、観光、教育、帰化といろいろな
面から語りかけ問ひかける。いくつものテー
マが整理がきかず雑然としている。やや押し
つけ過剰の感はあるし、小人数の劇団員が
ぎつぎとエピソードの変るたびに種々の人物
になるので、表現が類形的になってしまっ
ているが、迫力があり考えさせられた。対照的
なのは岡崎演集の「月の横丁のネコの店」で
作者の大橋喜一氏も観劇に訪れ、「私の見た
夢をそのまま書いたもので、芝居になるかど
うか全くわからない。どうなるのか知りたく
て来た」と語っていたが、ベトナムや現代の
諸問題から受ける心象で、さまざま歩く二人
の男、掘り出されて一言しゃべるガイコツ、
ネコのホステス(?)との踊りと会話、火に
包まれる女とそれを横目に一一〇番をかけよ
うとボックスを探す男、行先のわからない電
車等々たたみかけて来る、立派に舞台化に
たえる作品だった。人間が焼そばを食べるは
馬や、犬や猫の骨に変身したり、大ファロス
を砂漠の住民が拝んだり、一見非リアリズム

けれど、そして実験劇場として、やりたいも
のをやって見て、何かを得ようとする姿勢も
わからないではないけれど、はぐるまの舞台
を見てもつかこうへいの「出発」は私にはわ
からない芝居のままであった。

わかるとかわからんとかテーマとか理屈こ
ねなさんな。とにかく面白ければいいのだ。
現にお客は喜んでいてではないか、という論
理?)もあるかも知れない。(つかの作品は
日常的約束事をひっくり返す面白さを武器に
どうしようもない人間の断絶を見つめている
のだと私は思うのだが……)

これが名芸の「十二夜」ともなると、シニ
ィクスピアの作劇の妙味と、酔っぱらいや道
化達を演じた柘植洋・栗木英章らベテラン陣
の乗りに乗ったベースに引きづられて、三十
人程のお客の中で私も笑いこぼしてしまっ
たのだから仕方がない。演技者としてはかなり
未熟で、役の形象化どころかセリフを並べる
のが精一杯のような新人達まで、トチリもも
たつきも又笑を呼んで、にぎやかに終りまで
行ってしまった。(もともと次の日は乗りそ
こねて、サッパリだったそうであるが。)

ここにも、あまりムツかしいことを云わず
に楽しくやりましようやというコースがあっ

でも、これは夢にも忘れぬ作者のリアリズム
精神のアブストラクトである。岡崎演集とし
ては精一杯の冒険だったと思うが、受けた印
象は意外と平凡なもので、もっと演出をこら
して思い切った舞台にして欲しかった。

以上見て来ると正に多様である。とても一
つの旗印をかかげた連盟にまともなものと
は思えない。勿論、旗印とか理念とか云う面
倒なものを持ち出してモノサシの如くはかっ
て歩くのはナンセンスである。それぞれの集
団は「やりたいものをやる」とか、「面白け
ればよい」といった無原則の原則に立ってい
るように見えても、一步一步真剣に自らの道
を手さぐりしつつ進んでいるのだ。たとえそ
れが「くらやみの中の手さぐり」であって
も、それにしても、東リ演の「リアリズム
演劇」とは一体どんなものなのか。「地域に
根ざす」とか「若者の共感をよぶ」と云った
部分的には正しいと思われる方法論はあるの
だが。

(三) それぞれに出来不出来はあるにせよ、下
期をふり返って、やや心ざびしい感があるの
は否めない。小劇場での演技は観客にキメの
細かな動き―心も身体も―見取ってもらえる

たと思う。

一方には、はぐるまのもう一つの小劇場公
演の「吉四六さん」のような民衆の中から生
れたおらかな小品喜劇や四日市市民劇場の
「はやてに走れあまんじゃく」(あまんじゃ
くが可愛い村の女の子も)にひかれて素直に
なるが人間の子達の意地悪に怒って去って行
くお話)がある。はぐるまの「吉四六さん」
はかなり面白かった。欲を云えば演技陣がや
や都会的なコセコセした感があり、以前見た
上野市民劇場の素朴な面白味と比べて損をし
ていると思う。(ついでながら吉四六と女房
のおへまが名主のニワトリを追まわす場面、
足の先に棒をつけ、その先にニワトリをつけ
て、人間がバタ／＼追うとニワトリもいかに
もそれらしく動くしかけや四日市のカラスを
棒の先につけて動きながら、カラスのセリフ
をしゃべる黒衣などは大面白く、人間より
人気があった)しかし、四日市市民劇場は演
技者がまだ力不足で、全体的にのびのびとし
た童話劇の面白さが出るまでは行っていな
い。それでも熱のあふれた舞台で、子供達も
喜んで見ていた様である。四日市の場合にか
ぎらず、役づくりを学びあうための交流が、
プロット単位で出来ないものかと思う。

という強みがあるのだが、そう云う面での俳
優の努力の成果も見られない、ただ入れ物が
小さくなっただけなのである。観客の側から
云えば役者が身近に見られるので、親近感が
わく。多少下手でも、熱意だけでも感じられ
ると云うもので、一寸なれあいの様な気分も
あった。

二劇団の自主公演中止もあり、どうも上半
期の場合の劇団名古屋「野妻峠」の感動やは
ぐるまの親子劇場「龍の子太郎」のりり上る
楽しさのような事がなく、もどかしさを覚え
ているうちに終った下半期である。
既に77年上半年期に入り、各劇団の企画が期
待をこめて話られている。又長い年月の中の
半年間でもあり、こういう時期もあると云う
ことなのかも知れない。リアリズム演劇の
「手さぐり」にしろ、演出・演技の向上にし
ろ、一朝一夕で出来る事でもない。要はお互
いの苦心努力にかかっていることなのだろ
う。

◇編集部・注

ここまでが丸子礼二氏によって書かれ、こ
のあと丸子氏が見落した上野市民劇場を、
同じ中部プロット創造委員藤本氏が見ての
メモが届いたので次に補足する。(80頁へ)

—— 静芸・埼玉・世仁下・中野動演・青年劇場 ——

萩坂桃彦

静芸の小島真木さんに新作ができたというので取るものとりあえずというぐあいで見に行った。選挙投票日直前の12月3日だった。片道三千円の旅費は静岡も遠くなってしまった。若し仮に、台本のプリントでも事前に見せて貰っていたら或は行かなかったかもしれない。真木さんの本は、前々から、それが舞台でどう出るかは別にして独立してたのしませる味わいを持っていたからである。しかし一回きりの上演という貴重な舞台を見て、久しぶりに、そこに静芸の甦ったような若い舞台にふれて、真木さんにも洒れかかったと云いきれぬめんが、こうして、若い俳優たちによって瑞しく支えられているのを眼のあたりにして、ぼくはさわやかな感動をおぼえた。尻込みする真木さんを叱るようにして、本号にも戯曲「旅立ち」が載ることになった。

「旅立ち」は非行におちいった中学生の淡い恋物語である。（「非行を扱った問題劇」という云い方をぼくは避けたい）こども達が非行に陥入るいきさつは肌目細かい配慮で納得がゆく。（少女の方の動機は弱い）。愕いたのは、トルエンに酔い、セックス遊びの現場をゆっくりと見せたことである。それが、不思議に汚れて見えないのは、真木さんの、控え目にしてでもこれだけは描きたいというひたむきさから来ているもので、このひにして始めて出来ることであった。

少年（博之）少女（千里）に扮した俳優たち（右左元男・望月妙子）は、もとよりぼくにとって初会の顔だったが、この一対はまるでこの「旅立ち」のために生れたように、可憐であり、稚拙であり、全く穢れていない感じで、ぼくは、暫し、見惚れた。打上交流会の席で、その魅力は殆んど演技以前のもので

あることは判ったが、そこにはやはり演出（西根太）の目に見えぬ苦勞もあったかもしれない。

少年がみるみる破滅に陥ちこんでゆき、立直った少女がそれを励ますやりとりは、どこか少女趣味の匂いがあるけれど、茲でも真木さんの一途な執拗さが、甘さを破ってゆく。

ぼくは樋口一葉の「たけくらべ」を思い返していた。美登利や信如たちである。しかし、実際の舞台は、印象づけられてこうしてぼくが書いているようにには、滑らかに運んだということではない。

上手に少女の部屋、下手に少年の部屋をしつらえて、登場は逆に交錯させるのである。つまり歩く時間をわざわざ長くさせた趣向は多くの「死に間」を作るようになっていく。照明や効果にも透明度がうすく、定まらず、必要以上にこの芝居を長く感じさせる。裏の仕事の人達にとっては、リハーサルなしの一回切りの上演などというものは、致命的な打撃だったにちがいない。

配役では、優しい坂本先生（鎌田三郎）冷ややかな朝比奈先生（会津佛一）が安定感を見せ、千里の母（米沢純子）博之の母（秋野政子）がコントラストがきいており、非行学

生では達也（西郷豊）という少年が良かった。この達也は戯曲の上でも可成重要である。博之と達也が綱いままざってゆく関係、真木さんはゆきとどいた筆で書いている。或はこの人は、小説などで「男」が書ける人かもしれぬと思ったりした。

小島真木さんの戯曲のセリフには散分的要素が濃く、説明的で長いという指摘はかねてからあった。このことでのこぼやしさんの言葉なども思い起す。確かに、それはそう、しかしこれがこの人の文脈なのである。ここまできて、それを技術的な模様替えのようなことでは改まるまいとぼくは思っている。やはり、自分の中で息づいてきたテンションをそれが長ければ、どこでスパッと僅かな数の言葉にするかというところは彼女自身で見つけ出すしかない。今のままでも彼女は、最後には良いセリフを作り出しているのだ。前作「綿ぼこの中の娘たち」も、今度の「旅立ち」も、屈せぬ、婉やかな真木さんの力作である。

「旅立ち」が中学生の非行なら、「ひしめきあう不毛の季節から」は高校生の非行を扱っており、当然のこと乍ら、ぐっと骨っぽく大人っぽい。しかし、見えて「怖さ」から

云ったら「旅立ち」だということだけを云っておいて先にすすもう。

一九七四年七月に書かれた「ひしめきあう不毛の季節から」が、今になって時ならぬブームを呼ぶことになった。前の年の「河」に次ぐ盛況である。この戯曲の出現時にどうして、とびつく劇団がなかったのか。時移ってこの作品にある「毒」が薄れたとみるか。

劇団埼玉の舞台は戯曲からの構築という演出（塚田恒夫）の仕事には一票を投じるが、幕切れのおさとのせりふの殆んど全語にわたるカットは気になることである。成程、切られてみると無くもがなと思えぬこともないが、ぼくは、こぼやしひろしのこういう食出たところが好きで戯曲の結構からは或は破綻かもしれないが、そんなところにこの人一流のユーモアと暖か味が出る。まあ、これはとりたてて云うほどのこともないと思うが、埼玉のおさと（平林多恵子）の幹がかった達者な口説には実はもう一度ふれたかった。これも脱線した話である。どこか間の抜けた、而し芯の強い、病院の暗附添婚おさとしにしては、埼玉の女の女は伝法肌過ぎる。この役は、本家岐阜はぐるまの大塚鏡子にはとても敵わない。岐阜あたりの話で、京都から先汽

車に乗ったことが一度もないというようなおさとがその儘出る。埼玉のおさとは、全国股にかけていそう。この作品に意外にローカル性があるとしたのはこんなところである。それにしても「ひしめきあう不毛の季節から」を真正面から問題劇にしようとしたのは唯一塚田演出であって、戯曲のフレイムになっている頭と幕切れの、茶の間の親子の対話を立姿の象徴劇にしたのはおもしろかった。国鉄職員のお父（沢沢洋俊）が、どん底のサーチンながらのボリュウムで（事実、彼はサーチンに扮した）堂々と吠えたのは痛快である。またギタリストの歌唱にある「八この世の中はくもの糸。けおとし、ひきづりおとししてしまつて。この世の中ははしご段、天までのぼるはしご段。けとぼしはねとぼし。ぼってゆく。ーVをパイプのジャングルを組んで、実際のエキストラ高校生を奨励し、上りつ降りつ、くもの巣のゆらめきのように見せた。これだけは、作者のこぼやしさんに見せたかった。

埼玉・リズムというのをぼくは云いたがっている。「どん底」を四時間かけて、イヤなら帰ってくれと云わんばかりに見せたり、「仏さわぎ」で芸歴20年もの男どもが何人も

ゴロゴロしてみせるのも埼玉である。

「ひしめき」は岐阜と大阪と見えてきているので、もはやぼくの記憶の中にはそれらが混在し、消し合って、印象の濃いものだけが浮んでくるようなことになっているが、埼玉では母親の立花由紀が刻まれた。ちからが入って若くなったらはいはあるが、庶民的「母ちゃん」の浮影は鮮やかである。「土の会」からの移籍ときいたが、埼玉も備けたものだった。

ここでも、それは岐阜以来、主人公の、転落の高校生昌夫にはもはやベシミズムはない。これは「旅立ち」も同様であって、藤圭子の艶歌のように酔ってくるのである。

この思わぬ現象は、作者の思惑が分岐して出ていてドラマの結晶度の不足からくるものではないかと、ぼくはこの頃思うようになってきた。昌夫の家族にむけた鋭い切先、「親って一体何だ？」というような扶ぐり方と、昌夫などに与えた、二流高校、劣等感、差別、教育不毛に対する作者の怒りの概念が、可成通念的なストーリーラインとして語られたということでの分離である。

実際の舞台では主題歌をうたうギタリスト

のと呼応して暴動に加わるという虚構の恐怖劇がここに現出し、警察と軍隊の連撃のなかに、登場人物の悉くが、時には仲ま割れして相対し、全員血まみれになって死ぬのである。女教祖の絶句は朝鮮独立であった。

この劇的衝動のしつらえ方におけるしたたかな岡安伸治の発想に、ぼくはカブトを脱ぐが、彼が、是を作り乍ら、どこの芝居も面白くないという時、そこに何かが踏み砕かれた粗さを感じるのである。一方、それにしても集団世仁下乃一座は昨年夏の東リ演ゼミナールで「秩父ばやし」を披露し、骨格のたしかな曲者ぶりを見せた。

この二つがぼくの中でどう成り立つのか。

中野勤演の意欲作「海の碧いのは空のせいさ」(ベトナム以後症候群)については、幸い、城谷護氏の劇評を得たので大巾に省略するが、作者小坂忠が「白い鴉あるいは衣がえ」や「真謝部落陳情口説」で見せた大型ぶりは決して彼の術字(ペダントリイ)でないことは証明された。

瞭らかにスタイル上ではブレヒトの「第三帝国の恐怖と貧困」の模写であるけれど、根底に小坂忠の熱い怒りがある。

が吾が応でも前面に出てくる。岐阜では、なみ悟朗と金沢稔郎のジュネットで殆んどスターダムにのし上り、劇団大阪の竹田幸雄の熱唱も客を喜ばせた。埼玉の歌手内幸夫も悪くない。こうしてこの戯曲はぼくなどが予測しなかった「青春のドラマ」になったのだ。そう云えば作者もこの作品の想を得た当時、「現代の若者の恋愛劇を書きますよ」と云った筈だった。

さて、この原稿をすすめている途中、東リ演「演劇大学」などが入ったりして全く、脈絡を得ぬことになってしまったが、ぼくが受持った分科会「作家・作品研究・ゲスト芳地隆介氏」のコーナーは、このことはまた別に仕立てて書く必要があるけれども、その折、「どこの芝居もよくやっていると見受けるが、何故かちっとも面白くない」という、世仁下的一座・岡安伸治君の求める「劇的衝動」についての発言は面白かった。それは、これを云った彼の集団の実際の「身悶え」を、「賽の河原の船遊び」で見っていたからである。

舞台を客席の平土間に移して(四谷公会堂

舞台は中野勤演の実力を無視し、二夜、三夜で、演出を買わされた俳優座の佐伯綺哉氏を苦しめた。当日は甚大なスライドを小坂忠自らが操作するという奮闘ぶりでも、頼母しい。幕間に彼の詩集「終戦つ子口説」を購めて、飯りの車中から読みはじめたが忽ち倒になってしまった。

最後に青年劇場の「多すぎた札束」が間に合ったので、これを喋ってこの饒舌を閉じよう。舞台の出来は、かなり好意的な朝日新聞の劇評などが目にふれたりして、或は、これは機に投ずるかもしれないと思えたが、出かけてみて、制作の土方与平さんから約束の日をたがえて行って苦情を云われる程の盛況であった。民芸の上演予定が外されたというようなことが世評になるのか。このへんのところは全く判らない。選挙も負けきって後の祭りの解放感ということもある。とにかく、2月19日、俳優座劇場立錫の余地がなかった。

ぼくは飯沢匡氏の戯曲を読み込んでいる人間ではない。残念乍ら新劇の中に本格的な喜劇が如きように少い。少くとも飯沢氏のような洒脱な作品は皆無である。そういうこともあってぼくなども喜劇に対する理解は極めて

は椅子をとりはらうことができる)、三方を薄べりで囲み、客を坐らせる。勿論椅子席もある。薄べりの客は、早やばやとワンカップや一升瓶をあけている。

話の自身は「ガマの脂売り」仕立ての売人の口上から、小栗判官照手姫の物語をコマ切で見せる俄芝居の遊びなど、次々と展開するが、彼らは、土地を追われた農民だったり、職を求めて新しい彼の地に明日をもとめる若い出稼ぎ夫婦であったり、どういう訳か新興宗教の女教祖などもいる。

見ているうちにこれが悉く日本内地へ、労働力として売られてくる朝鮮人(当時は半島人と称した)難民であることがわかる。

胡坐を掻いた客席と同じ平面で、彼らのむきだしの、セリフ、表情、格闘が目の前でやられる。カブリつきで、レスリングかボクシングを見る感じである。

舞台(土間・床)は船上のしつらえであって、いよいよこれが東京湾についていた。大正十二年九月一日関東大震災の直後で、陸地は仕組まれた朝鮮人暴動で、逆にその朝鮮人たちが、民間の自警団の竹槍によってすら殺されるという惨事が起きている。朝鮮人を乗せた船は棧橋につけない。船内の彼等が陸地のも

偏狭である。モリエールなどについても、理窟を山ほどつけて、全くおもしろくない舞台を作ったりした苦い経験もある。

しかし喜劇はくつろいで格を下げろということではないだろう。その点、「多すぎた札束」は確にかなりふざけた本であるにしても青年劇場の生真目さが、これを正統喜劇に仕立てたと云えるのである。

たとえば後藤陽吉の棚岡格兵衛は、そっくりである以上に独立した人格をつくることに成功している。見ている観客は彼を許せなかつたり許せたりするが、どこか憎めない。ただこういう男に一国の政治を任せていたのかと思うとゾッとする。そういう人格形成に成功している。

話は他愛がない。待合のおかみや格兵衛の隠し子が出てくるのは飯沢氏得意のストーリーイで、芸者に生ませた格治(中津川衛)という若者が名乗り出て、親父をハラハラさせ乍ら、逆に格兵衛が政權買収の資金ぐりの窮地に立ったときに、トマトを詰めこんだ段ボール箱や冷蔵庫で、三億円、七億円とはこびこむ。この金の裏づけが、オートバイによる三億円犯人を思わたり、銀行出納係の女子行員が男のために何億円に買いだりするという有

名な話が巧みに入れられて、大胆に原物の裏刺で見せる。

格兵衛の秘書・元愛人・クインと呼ばれる実力者、中年女の牧村みどり、小竹伊津子が時に色気をまじえて達者なところを見せ、待合のおかみの端々たるおもしろさを、あの勝山春子がよく努力して出せたものと感心した。

カーテンコールで飯沢匡さんが、この劇団（青年劇場）をこれまで知らなくてこんな素晴らしい俳優（後藤陽吉）が隠れていたとは、というような挨拶をした時、最前列にいたぼくは泪ぐんだ。

あの後藤陽吉が隠れていたなんて、ノソウだろうじゃないか。

（75頁より）

補足

上野市民劇場「狐とぶどう」を観てのメモ

中部ブロック創造委員藤本昭

（劇団はぐるま）

1 大作に意欲的にとりくんだことは評価したい。

2 しかし及第点はクレイアの美しさ、気品とドラの音のみ。クレイアもイソップへの心の動きは不十分。

3 手の動かし方がみな一緒に、無駄があり、邪魔をしている。目線の位置、動作も不的確。イソップに魅力、クサントスに威厳がほしい。総じてセリフに力がなく、役を自分のものにしていない。

4 喜劇にしては笑いに乏しく、演出のポイントがよくわからなかった。

5 温かく見守ってくれる観客がいるのは嬉しい。この人々に報いる努力をつけて欲しい。

劇団静芸上演台本

旅立ち

2 幕

小島真木

人物

第一幕

谷口千里 朝比奈先生

齋藤博之 坂本先生

鈴木達也 高校生（男）

修二 高校生（女）

直樹 2

少年A 生徒指導主任

少年B 生徒課教師

谷口登美子 中学生

千里の父親 2

博之の母親 補導員

達也の母親 その他

1

千里の家と博之の部屋。二つの小さな空間。それぞれ電話が置かれている。博之の部屋には天井から片方の翼がもぎとられたプラモデルの飛行機が吊されている。

（電話のベル。エプロン姿の登美子走ってくる）

登美子 もし、もし、谷口ですがー千里は市

の体育祭とかで、朝から出かけておられますがーいいえ、テニスの方で出場するとかでー何か御用ですかーじゃ帰ってきましょうかー四六のこちらからお電話させましょうかー一八五五、齋藤さんですね、はい、わかりました。ごめん下さい。ー勝ったかしらーどうせ負けてくるわね。あの子ったら嬉しくって今朝なんか五時から起きてそわそわしていたのよ。日曜日だって云うのに。おかげでこっちは睡眠不足になっちゃったわーそれにしても遅いわねえ、暗くなって来たからちよっと見てきてくれない。

父親の声 大丈夫だよ、子供じゃないんだか

つねに
働らく人たちとともに
歩んだ作者の、劇団の
苦節二十年をここに

こばやしひろし 作品集2

劇団はぐるま創立20周年記念出版

収録作品 「書けない黒板」「つくられた英雄」「樫の木」「豚」「ひしめきあう不毛の季節から」

装幀／板板晋治 頒価 1700円

残部僅少

○発行／演劇会議発行所

○申込先／演劇会議発行所 川崎市川崎区渡田4-11-3萩坂方 TEL (044) 333-0775

劇団はぐるま 岐阜市西野1丁目 TEL (0582)65-1852振替名古屋4525

ら。

登美子 だから心配なんじゃないの。いいわ
あたし、角まで行ってみるわ。

(外に出ようとして、ひっそり立っている千里に気付く)

登美子 あ、びっくりした。—どうしたの—
なんでこんなに遅かったの。

千里 なんだっていいじゃん、関係ないもん

登美子 あ、負けたんでしょ。ま、勝負は時
の運って云うから仕様がないわよ。さ、早
く着がえておいで。今日はちよっと御馳走
よ。勤めがあるといつも間に合わせばっか
りだからたまにはね。ちいちゃんが初めて
出させてもらった試合だし。

千里 どうせあたしは下手なんだから。(去
る)

登美子 もうめんどくさくなっちゃう。先生
は第二反抗期だって云ったけど、いちいち
だもの。—あ、ちいちゃん、さっき学校の
連絡だって電話があったわ。斎藤さんって
云ったわ。ちよっと電話してやって。

(千里、しぶしぶあらわれる)

千里 だって次の連絡は斎藤さんじゃないも
ん。

登美子 でも斎藤って云ったわ。男の子だっ
たよ。

たよ。

千里 女の子だよ、斎藤さんは。

登美子 だって男の子の声だったよ、四六の
一八五五だって。

千里 (ダイヤルをまわす)もし、もし、斎
藤さんですか—あの、谷口ですが、さっき

(登美子去る)

(博之の場にスポット。寝そべったまま
電話をかける博之)

博之 あ、ごめんね。—おれ、わかるかな—
一年の時間じクラスだった斎藤博之だけど

—わかる?

千里 ああ、—クラス連絡だと思った。

博之 ごめん、ごめん。今日テニスの試合だ
たって—勝った?—一年の時谷口さんす

ごく一生懸命やってたっけじゃん。ローラ
—引張ってコート整備やなんかよくやって
たっけね。俺なんか部はさぼってばっかい
たや。二年になってからは空手部に入って

一生懸命やったけど。—ちよっと合わな
い感じだろ、俺が空手部なんてさ—そいで

勝ったの?負けた?
千里 ……

2

たいなと思って。

千里 ……

博之 わるいけど交際してくれや。

千里 ……だって、わからないもの。

博之 一度付合ってみてよかったら、ずっと
付合うことにしてさ。もし友達同志の方が

いいと思ったら友達になればいいじゃん
か。

千里 いま、そんなこと考えられないもん。

博之 うん、それはわかるよ。だから、今で
なくたっていいよ。もっとたってからだっ

ていいからさ、交際してくれや。

千里 —わかんないもん。

博之 いいよ、今でなくても、また電話かけ
てもいい?

千里 うん。

博之 元氣出せよ、先公のことなんかほっと
けよ。じゃ、また、さよなら。

(電話をきる)

(登美子、千里の後ろに立つ)

登美子 ちいちゃん、あんた。

千里 云わないで/何も云わないで/絶対云
っちゃいや/ (走り去る)

(不安そうに見送る登美子)

博之 どうした?—何かあったの?

千里 ……何でもないよ。(語尾がふるえて
涙声になってしまう千里)

博之 どうした?ねえ何かあったんだろ。—
負けたのか—おれ困っちゃったな—試合だ
もん、負けることだってあるさ、元氣出せ
よ。

千里 そんなことじゃないもん。
博之 じゃ何かあったんだね。

千里 朝行ったらね、先生があたしだけ呼ん
で、おまえサーブが弱いから、悪いが他の
子とかわってくれ、テニスが勝てば学校は
総合優勝できるから—だからあたし、
はいて云ったの。

博之 ひどいよ、それは。先公なんかみんな
そうだよ。おれっちこと考えてやったこと
だなんてうまいこと云うけど、いつだって

学校や自分の面子ばっかしか考えていない
んだ。そんなのこっちはすぐ見えちゃう
のさ。

千里 わたし、下手なのは自分でよく知って
る。だから別に試合に出られなくても仕様
がないとあきらめてきたんだよ。そりやと
っても出たいけどさ。二年生があたしを
とびこして試合に出て仕様がなと思

博之の部屋。千里、緑先に腰かけてめず
らしそうに部屋を見廻している。博之、
庭先から缶ジュースやお菓子の袋をかか
えてとびこんでくる。

博之 ごめんな。—ジュース飲む?

(乱暴にお菓子の袋を破ったり、缶ジュ
ースのフタをとったりする)

博之 夏季講習サボっちゃって大丈夫か。

千里 平気よ。どうせ学校と同じで、黙って
聞いて帰ってくるだけだもの。行ってれば

お母さんがなんとなく安心するってだけな
んだもの。働いているからあたし一人で家
におくのが心配なのよ。小さい時から休み
はずっとどこかへ行かされていたわ。

博之 行くだけえらいよ。僕はもう学校だけ
でたっさなんだ。一日中わけのわからない
ことを聞いているのはさ。

千里 家にいても退屈じゃない?

博之 そうでもないよ。つれがここへ集って
ワイワイやってるからね。でも夜は淋しく
なるな。だからすぐ電話かけちゃうんだ。

—部活やってる?

博之 え?……なんだか云いにくくなっちゃ
ったけど—僕さ、一年の時から谷口さんが
いいなあって思ってただよ。だから、僕、
いまわりと悪いことしたりなにかしてる
けど、それでもよかったら付合ってもらい

何の用事?

登美子 ちいちゃん、あんた。
千里 云わないで/何も云わないで/絶対云
っちゃいや/ (走り去る)

暗転

千里 家にいても退屈じゃない?
博之 そうでもないよ。つれがここへ集って
ワイワイやってるからね。でも夜は淋しく
なるな。だからすぐ電話かけちゃうんだ。

千里 適当にね。もう前みたいになれないわ……。

博之 先生はあれっからなんにもいわない？
千里 あんなの、先生にはあたりまえのこと
でしょ。一部の友達とも普通にやってる、
でも、一緒にいてもなんともなくひとりぼっ
ちだなんて思っちゃうの。

博之 クラスの友達はいないの？
千里 みんなグループに別れてかたまっちゃ
ってるからね、あたしの入りこむ余地なん
かないのよ。

博之 ぼくら遊んでる仲間だけだ、七人い
るからいいよ。大勢でワイワイやってりや
絶対発散できるものね。一年の時、同じク
ラスに鈴木達也もいたの知ってる？

千里 うん、マラソンやってた子でしょ？

博之 そう、あいつが親友なんだ。達也は
さ、兄貴が遊んでいたもんで三年生に目を
つけられたっけだよ。廊下をさ、二人で歩
いていてたぶつかっただけなのに呼び出
されてね、便所でなぐられたっけだよ。六、
七人にぐるぐるかこまれちゃってね、あ
いっ、最後に土下座して謝まれて云われた
けど、絶対謝まらなかつただよ。だからひ
どくやられちゃってね。頭をなんども床に

ね。

千里 うちも三人よ。わたしも一人っ子だ
ら。

博之 一人っ子で、ひとりぼっちか。(笑)

千里 二人いたって、二人ぼっち、三人いた
って三人ぼっちよ。いつだって自分ひと
りだもの。

博之 谷口さんはまじめでおとなしいからな
千里 あたしそういう風にしか見えない？
(激しく)

博之 なんて？

千里 おとなしくてまじめな子なんて、あた
しあきあきしたわ。あたしなんかどこにい
たって、いないもおんなじよ。先生だっ
て気がつきもしないわ、あたしがいるなん
て。叱られることだっではないし、ほめられ
ることだっではないわ。友達だっ、あたし
なんか面白くもないのよ。あたしがおとな
しい子？なんていやなのよ。ほんとうのあ
たしはそうじゃないわ。みんなの思っ
てるようなあたしじゃないと思うの。ねえ、
斎藤君、あたしそういう風にしか見えない
？本当のこと云ってよ。

博之 ……うん、まあ。そういう風に見える
けど……でもいまはそうは思わないよ。

こすりつけられて謝まれて云われたん
だ。それでも達也は絶対謝らなかつたん
だ。

千里 斎藤君？

博之 僕はついていっただけだから。ーそれ
っから強くなるうって決心して二人で空手
部へ入ってさ、強くなった頃やめただよ。
僕ら番長だなんだって云うの嫌いだから、
みんな平等でいかせえってグループつくっ
たんだ。

千里 わりかし計画的だね。

博之 達也がそうなんだよ。僕なんかさ、小
学校の時は泣き虫で弱虫だったからよくみ
んなにいじめられたじゃん。だから強くな
ってお返してやるかって思ったんだけど、
達也はしんから根性があるだよ。

千里 いいね、親友がいるなんてーわたしも
たつた一人でもいいからなんでも話せる親友
がほしいわ。

博之 僕でよければさ(照れて)ー谷口さん
NSP好き？レコードかけようか。僕、
「赤い糸の伝説」が好きなんだ。(レコー
ドをかける)

千里 すごいステレオね。

博之 母さんが無理して誕生日に買ってくれ

たんだ。僕が欲しいというものは、まあだ
いた買ってくれるよ。

(間)

千里 斎藤君はプラモデル好きなの？

博之 わかしね、うちで一人でこんなことば
っかしていったんだ。この飛行機ね、片っ
方の翼がとれちゃったんだけどなんだか持
てられないんだよ。(天井から吊してある)
(博之の母、一見してホステスとわかる
身なり)

博之の母 ヒロちゃん、あらお客さん。まあ

かわいいひとね。

博之 なんだよ。

博之の母 そんなこわい顔しなくともいい
でしょ。母さんちよっと早く出かけるけど
ごはんは岩木屋へ頼んでおいたから。きた
らおばあちゃんと一緒に食べて。お風呂つ
けといたから今日は入ってよ。そのまま寝
ちゃ駄目よ。

博之 うるさいな、早く行けよ。

博之の母 はいはい、じゃ、火を気をつけて

ね。行ってきます。ごゆっくり。(去る)

(間)

博之 うちはおばあちゃんと三人なんだ。お
やじと別れておばあちゃんちへ来たもんで

千里 なぐさめてくれなくていいよ。斎
藤君だっって別にあたしと付合いたいと思っ
たわけでもないでしょ。誰だっってよかつた
んでしょ。斎藤君たちは名簿見てやたらと
電話をかけてくるんだってみんなが云って
たわ。

博之 ちがうよ。ーそりゃそうだったけど、
谷口さんはちがうよ。電話でテニスのこと
聞いて谷口さんがかわいそうだった。僕だ
っっておんなじような気持になったことがあ
ったもん。誰でもないなんて思やしなかつ
たよ。本当だよ。そりゃ僕だっって夜にな
るとやたら淋しくなって電話をかけちゃうけ
どさ。今は谷口さんにしかかけないよ。

千里 ーもうどうでもいいわ、そんなこと。
ーごめんね。ーあたしだっって講習にい
くのもいやだったし、家に一人っきりでいる
のもなおいちゃだつたから来ただけだもの。お
あいこよ、ね。あたしね、前々友達に云わ
れたの、友達とちょっとサラサラと付合っ
たらいいって。そんなに一生懸命に付合わ
れると気が重くなっちゃうって。

博之 僕だっってサラサラなんてできないよ。

学校なんかさ、友達がいるから仕様がな
い行くけどさ、いなけりやなあ。

千里 ほんと。それだけだね。(淡い笑い)

(達也と少年直樹、修二走りこんでく
る。畳に寝ころがって大げさに笑い出す)

博之 どうした？

達也 ああ、まいたーこいつらと公園ぶら
ついでだよ。そいでさ、駐車している車
にいたずらしてたらドアがあいちゃったも
んでな、中で休んでいたら補導員がきて
「何してる？君らの車か、学校は」なんて
聞くしさ、ヤバイからパッと逃げたら追
いかけてくるの。しつこい野郎だっけ
な。

直樹 達也なんか突然さつと逃げ出すだろ、
こっちはあわてちゃうよ。

達也 馬鹿野郎、俺なんかさ、ずっと追いか
けられたんだぞ。そのおかげでおまえっち
逃げられたんじゃねえか。こいつら横の道
にスーッと入っちゃうだから。

修二 ヤバイっけな。夏休みはやたらと補導
されるから頭にきちゃうよ。

(直樹薄いTシャツを服の下からひっぱ
り出す)

博之 チョンボしたのか。

達也 ほれ、これは山川書店。(ポケットか
ら小さな辞書を出す) ヒロユキ、おまえに

やらあ。

博之 俺を殺す気か？それだけはいらないよ
達也 あれ？谷口さんじゃんかーふうん、俺
はおまえがかったっつけると思ってたっけ
や。

博之 格好なんかつけるか。

直樹 へえー、見なおしちゃったぜ。

修二 やるじゃんかよ、いいなあ。

博之 よせよ。ーおまえはやらないっけの
か。

修二 俺は女の子に電話なんかかける趣味は
ないからよ。

博之 馬鹿野郎、そっちじゃないわ、こっち
だよ。(少年たち、千里を意識してことさ
らほほのところ指をあて大げさに話す)

修二 こっちは「見て、見て、ニコッ」
(足を出す。新しいクツ)

博之 すごいな、おまえ。

修二 いえ、いえ、ほんのおそまつで。ーバ
ーゲンでこたがえしてたから、履いてっ
た靴は棚においてきてあげた。(笑い)今
日のチャンピオン。(腕を上げる)

達也 あの本屋さ、新入りみたいな店員がい
たっけじゃん。おれのとこ、ずっと見てる
だよ。やりにくいっけや。昔あいつ自分も

チョンボしたことがあると思ひや。だから

俺としたことが辞書など持って来ちゃった
んだ。

直樹 それ持って俺のかわりに塾へ行ってく
れ。俺の組の山田って奴がこの間のテス
ト、学年で十番になったら、あいつあい
にくと近所の奴だもんでおふくろったら山
田の行ってる塾へ切りかえろって毎日せま
るだよ。

達也 おまえのおふくろにチョンボすると
こを見せてやれよ。一辺で云わなくなる
ぞ。

直樹 ああ、達也はおふくろの恐ろしさがわか
らない。そんなとこ見せたら、余計に俺に
ビタリくっついて塾にだっておふくろつ
きで行かなきゃなんないよ。俺が南高校へ
入れなかったらおふくろの奴完全に生きる
目的を失っちゃうよ、そんな感じだよ。

達也 おまえも調子いいよ。外で遊んでさ、
おふくろの前じゃカッコつけちゃって。

直樹 俺は余分なエネルギーはつかわないこ
とにしているんだ。友達と勉強する、参考書
買っていく、図書館へ行って云やおふく
ろなんてイチコロだもん。チョロイ、チ
ョロイ。

達也 俺はそういうのは嫌いだなどこでだっ
て俺は俺だ。

修二 もう番長なんかつっぱるのには、はやら
ないだっけ。今はウラ番の時代だから
な。

千里 (博之に) ああ、あたし、もう帰るわ。

博之 いいじゃんか、もう少し。

達也 俺のことは気にしないで。すぐ行
くからさ。

博之 なんだ、いいじゃんか。

直樹 おじやまでしよ。

達也 追っかけられたらア、自転車置いてき
ちやっただよ。ー行かぜえーあ、兄貴の友
達来たっけ？

博之 こないよ。

達也 どうしたかな。もうとっくに来るはず
なのに。

修二 達也の、持ってきてやるか。あれをこ
こへ持ってくりやいいだろ。

達也 あれを持ってきてくれるから、俺がい
た方がいいと思うだよ。

直樹 そいじゃあ行ってくらア。

達也 気をつけるよ。さっきの奴につかまる
なよ。

修二 まかしといて。

(二人去る。ぎこちない間)

博之 みんな食い荒しちやっただけ、谷口さ
んもたべなよ。

達也 (手をのびしかけていて) ちよいと食
いにくいな。ー谷口さん、何組？

千里 九組よ。

達也 だれ、先公は？

千里 坂本先生。

達也 坂ニイか。一年の時教わったっけな。

あゝの先生はわりかし話せたよな。ーヒロユ
キ、タバコくれや。

博之 はいよ。(投げてやる)

(オートバイの音。「ここだな」「ああ
斎藤って書いてある」)

達也 あれ、来たかな。(庭からとび出して
行く) こっちだよ、こちから入って。

(高校生の男の子と女の子、オートバイ
を持って入ってくる)

高校生(男) 待ったらア。悪いっけや。

達也 すぐわかっただけ。

高校生(男) おう。

達也 上げえ、ナナハンじゃんか。

博之 いいなあ、やっぱ。自転車なんて馬鹿
みたいだな。(後ろに暴走族のグループの

名前を印刷したステッカーが貼ってある)

達也 「桜時雨」か、かっこいいな。これ暴
走族のグループでしょ。

高校生(男) そうだよ。みんなで金出し合
って五百枚印刷したんだ。いろんなところ
へ分けてくりようって、六〇名位いるから
さ。一人五枚位配ったんだ。おまえにも一
枚やるか。

達也 欲しいノおれ、自転車に貼るや。

博之 おれも欲しいなあ。

達也 もっとない？みんなも欲しいと思う
だよ。

高校生(男) 金出すか？

達也 うん出すよ。

高校生(男) そいじゃ今度持ってきてやる
よ。今度の日曜日御前崎へ行くことになっ
てんだ。ーシンナーやりながら走ると面白
いぞ。スピード感がぜんぜんないんだ。だ
からいっくらでもスピード出しちゃうだ
よ。

達也 上げえな。

高校生(男) おまえっちも早く高校へ入っ
て免許取るだな。これ頼まれたやつ。(笛
を渡す)

達也 ありがと。シンナー？

高校生(男) トルエンだよ。

達也 よく手に入ったっけね。

高校生(男) あんまりうるさくない頃さ、や
たら住所と身分証明書持ってって塗料屋
でうまいこと云ってさ、一斗缶で買っただ
よ。もう少しぐらいは分けてやるよ。

達也 また、たのむね。

高校生(女) あんたっち、ここがたまり？

達也 うん、毎日学校からここへ直通だよ。

高校生(女) ともかせぎ？

博之 いや、おふくろが勤めてるから。ばあ
さんはいるけど。耳が遠いしね。

高校生(女) ふうん。

高校生(男) (タバコを見つけて) 一本貰
うぞ。タバコすったり、トルエンやったり
おまえらも一人前になったな。だいぶ派手
にやってるみたいじゃん。川中と番張りや
って勝ったってな。川中でもと番長やって
た奴と一緒にだもんでな。おまえっち後継者
強くなっていいなと云われたぞ。

達也 番長なんてでっかい顔してつっぱって
るからね。俺そう云うの、気にさわって仕
様がないだよ。

高校生(女) (タバコ吸いながら、千里に)

あんたっち、チョンボしてる。あんなのジ

ヤリすることだね。もうあきちゃったな、あんな危いことしなくたって、お金の入ることあるもんね。

高校生(男) 女はいいよな。おれっちとちがって財布くつつけて歩いてるようなもんだから。

高校生(女) 馬鹿みたい。(笑い) ねえ、アンパンやらない。トルエンがあるじゃん。

高校生(男) こいつら子どもだぞ。

高校生(女) だってもうやったことあるんでしょ。

達也 五、六回かな。

高校生(女) そいじゃいいじゃん。なんだかむしゃくしゃするんだもん。

達也 やらぜえ、ヒロユキ、いいら。

博之 いいけど、谷口さんが。

千里 あたし、帰るから……

高校生(女) あんた、やったことないの？

この子遊んでる子？

博之 ちがう、俺の友達だよ。

高校生(女) あんた、やってみな。ただ吸うだけだもの。頭がポーンとしてきてさ、フワッとして何んにもわかんなくなるよ。

あたしはブラボンが甘くて一番好き。

高校生(男) おれはトロールがいいな。あ

れやったら、他のはできない感じ。

達也 俺さ、きいてくると暗いところにひとりいる感じになって一夢みるだろ、螢光灯がチョウチョウに見えたり、灰皿がまわったり、飛行機が浮いていたり——なんにもわからなくなるのがいいな。

高校生(女) 早くビニールを出しなよ。(博之、ビニール袋を出し、わけ)

博之 (千里に) いい？ やってみる？

千里 ……………

高校生(男) 初めてだと気持ち悪くなるかもわかんないからやめとけよ。

高校生(女) のまないで見てるなんて厭味だよ、真面目ぶるなんて馬鹿みたい。

(千里、袋をうけとる)

博之 袋の隅をしばった方がいいよ。トルエンが溶けてくると破れてくるから、それで袋を裏返しにするんだよ。

(トルエンをめいめい袋に入れる)

達也 おい、ヒロユキ、いつものレコードかけてくれよ。

高校生(男) 陽水の「水の世界」ある？ 俺たちはあれでやってるんだ。

達也 山さんちも。おれっちもだよ。へえ、同じのかけてんだね。

高校生(男) あれは曲に変化があるら。おとなしい曲に急に強い曲が入ったり、それがびびったしでいいだよ。

達也 ちようど五曲目くらいできめてきて、だんだん聞えてくるじゃん、「水の世界」さ、あの曲がいいだよ。

博之 俺はきめてきたときあの曲きくとそのまま死にたいような気がするよ。

高校生(女) ぐたぐた云ってないで早くかけなよ。(舌がもつれている)

高校生(男) もうやってるな。こいつ、いつも舌がまわらなくなるの。

高校生(女) いいじゃん、別に。馬鹿みたい。

(博之、レコードをかける)

博之 大丈夫か？

千里 面白そうじゃん。ただ吸えばいいの？

博之 軽く、五、六回吸ってごらんよ。気持ち悪かったらすぐやめろよ。

(千里、こわごわビニール袋をあてる)

博之 大丈夫？

千里 平気よ。

高校生(女) ヤマー抱いて。あれやんなくちゃアンパンじゃないよ。あたしって、頭悪いじゃん。でもヤマはすごく喜んでくれ

たよね。あたしがあげちゃったとき、あたし嬉しかったよ。あたしにだって出来ることがあるんだよ。ねえ、あたしだって人を喜ばせることが出来るじゃんか。—ねえ、ヤマ抱いてよ。

高校生(男) おまえも好きだな。

高校生(女) 自分だってノ早く抱いてよ。

(高校生男女抱き合う。達也、博之、は

っとしてじっと見つめる。四人暗闇の中に)

千里 大丈夫よ。—ああ、気持ち悪い……

(声がエコーする。すいこまれるように暗くなり、光が変化する。光が不安定な角度で大きくまわる。間、機械的につぶやく声がエコーし、舞台一杯にひびく。年号が舞台の空間に次々とうつつり消えていく)

千里 飛鳥時代、五九三年、聖徳太子摂政に

なる。六〇三年冠位十二階、六〇四年憲法

十七条。どこにもあたしがないよ。六

〇七年法隆寺建立、六四六年大化の改新。

だあれもあたしを知らないよ。六六八年

近江令、六七二年壬申の乱、七〇一年大宝

律令。あたしがなくなっちゃろうよ。七一

〇年平城京、七二二年古事記、七二〇年日本書記。

高校生(男) の声 こいつをまわしていいぞ

達也、おまえはじめてだろ、やってみろ。

千里 $a^2 + b^2 + c^2 = 0$ ($a \neq 0$)。 (x

$+1$) ($x-1$) $= 2x-1$ $x^2 + 2x =$

$(x-1)$ ($x-2$)

(その交錯)

直樹 達也、持ってきてやったぞ。(何度も

リフレインして現実の声になる)

(入ってきた直樹と修二の視線と意識の

醒めかかった千里の視線が合う。)

博之に抱かれてる千里)

達也 みんな呼び出し来たら？

修二 誰がチクった？

3の1

暗転

(その輪の中に達也、博之、修二、少年

A・B)

達也 みんな呼び出し来たら？

修二 誰がチクった？

達也 ゆうべ直樹がトルエンやってるところ

を家の人に見付けられちゃったんだって

さ。

少年A チョロいな。うちでなんかやるから

わるんだよ。

少年B あいつあれてたからな。おふくろが

勉強しろってガアガア云うもんでさ、むし

やくしゃしてやりたくなっちゃうだっ

ってだよ。

博之 俺んとこへ夜中に電話よこしてさ、お

ふくろが先生のところへ電話しちゃった

云うだよ。

少年A 馬鹿な親さ。内申書にひびくの

に。

少年B 俺ちはひびきようがないら、下が

ないだから。

修二 だらしのないなあいつ根性ないよ。み

んなの名前だけは絶体出さないっこしよ

って云ったのに。

達也 まえに決めたように、面白そうだから

一回だけ東名の裏でやっただけだっ

て云え

よ、いいな。

少年B だけん、直樹が喋ったらどうする。

博之 それだけは死んでも云わないから

云ってたよ。

修二 あてになるか。

達也 現場押えられたわけじゃないだから、

証拠はないよ。知らないで押し通せばいい

だよ。

修二 あのこと大丈夫かな。わりかし自分で

やっていないことだと喋っちゃうぜ。(博之に)おまえのスケにも云った方がい

ぜ。

博之 電話しとくよ。

少年A 俺っちは知らないぜ。

達也 自分だけいいかっこするなよ。いいか絶対に云うなよ!

暗転

3の2

(達也と母親。机を挟んで朝比奈先生)

朝比奈 おまえがそうして強情はっても杉山直樹は、あれはもう常習者だ。あの顔をみればすぐわかる。おまえらがいくら一回しかやらないって云っても先生は信用しない。

達也 そいなら何云ったって仕様がな

んか。

朝比奈 その言い方は何だ。もっと素直になれ。

達也 先生だって僕らをいつでも悪いことして

てるって決めてかかるじゃんか。

朝比奈 事実そうじゃないか。悪いこと起ると必らずおまえが入っている。暴力行為に

も必らず入っている。先生はおまえを信用したいが、これじゃ信用のしようがないじゃないか。

母親 この子は弱い子がいじめられたりする

と、すぐ頭にきて、とんで行ってしまっても損なんですよ。この子がやらないことでも日頃云うことを聞かないし、身体も大きいもんで目立ってしまってもいつも悪いことはこの子のせいにされちゃうですよ。一お父さんにわたしゃPTAも行くたびに先生に叱られているみたいなのがするから行きにくいって云ったんですよ。

朝比奈 わたくしはそう云うつもりはないです。お母さん、子供を信用しないの

いけませんが、信用しすぎてもいけないですよ。家庭でももう少ししっかり子供を見て

いてほしいですね。

母親 お父さんは残業が多くて帰りは遅いし

わたしもスーパーパートで行ってるもんで、なかなか目が届かなくて。一この頃はあたらしの云うことなんか全然聞かないですよ。もう身体もお父さんよりずっと大きいだから本当に困っちゃうですよ。先生に厳しく云ってもらって。

達也 うるさい。だまってる。

朝比奈 お母さんに向って何だノ物事にはけ

じめつてものが大切だと思ってるよ。こ

んな云い方をした時は家庭でも厳しくし

けて欲しいですね。家庭の中でいいこ

と悪いことのけじめをきちっとつけても

らわないと、小さいことのようにも、こ

うことが積重なって非行のもとをつく

ていきますからね。服装違反でも何んでも

まだ初めのうちに見逃さないでびしびし

云っていかないと問題が大きくなってから

はもう遅いですからね。家庭でもしっかり

監督してほしい。学校だけではどうにも

ならないですから。

母親 本当にどうしたらいいか。この子の兄

にさんさん困らされて、この子だけと思

っていたですが……

朝比奈 いいか鈴木、トルエンは身体も脳も

駄目にするぞ。痴人になるぞ。もう二度と

やるな。もう皆んな高校受験の準備で一生

懸命やってる。こうしている時も皆んな勉

強してるんだぞ。今のおまえの成績では絶

体高校へは入れないぞ。おどかしじゃない

よ。よく考えろ。じゃ、また何かあった

らすぐ私に連絡して下さい。電話で結構で

すから。

母親 いろいろお世話かけて済みません。

(二人去る)

(博之と母親が入ってくる)

朝比奈 どうぞ。

(二人坐る)

朝比奈 何んで呼ばれたかわかってるな。

博之 はい。

朝比奈 いつごろからやり出した?

博之 あの時一回だけです。

朝比奈 あの時って?

博之 七月はじめてです。

朝比奈 どこでやった?

博之 東名の裏です。

朝比奈 一回じゃないだろ。

博之 一回だけです。

朝比奈 どうしてそんなことした。

博之 ただ面白そうだなって思ったから。

朝比奈 トルエンなんか飲んだらどうなるの

かわかってるのか。

博之 はい。だからこわくなって一回でやめ

たんです。

朝比奈 いやにすらすらと云うじゃないか。

鈴木と同じ云い方だぞ。え、申し合せたん

じゃないのか。

博之 そんなことありません。

朝比奈 ま、いいだろう。一お母さんは気が

ついていましたか。

母親 いいえ。先生から電話もらったでし

よ、もうびっくりして。この子は気の弱い

子だから自分からとでもそんなことできる

子じゃないし、悪い友達に誘われたんだと

思うんですよ。わたしはあの子とつきあう

のはやめなさいと云ったのに、言うことを

聞かないからこんなことになったんだって

云ったんです。

博之 達也の悪口言いなよ。僕がやったんだ。

朝比奈 おまえは一人だとおとなしいのに、

鈴木と一緒に悪くなるな。

博之 (カッとなって) 俺を皆んな弱虫だと

思ってるんだらう。そう思ってたばい

さ。

母親 ヒロちゃん/この頃すぐこうなん

です。前は言うことを聞いてやさしい子だ

たのにどうしてでしょう、先生。

朝比奈 ま、そういう時期ですがね。自分

やったならトルエンはどこから手に入れた

?

博之 ……誰かが買って来たと思った。

朝比奈 誰かって?

博之 ……忘れちゃった。

朝比奈 それはおかしいじゃないか。

博之 ……

母親 あの子でしょ、お兄さんも悪いって

ってたから。

博之 違うよ。

朝比奈 じゃ、誰だ?

博之 ……

朝比奈 今はそんなことして遊んでいる場合

じゃないだろ。もうあしたから二学期

すぐテストが始まるだろ。こんなことして

いたら高校なんか行けないぞ。

(生徒指導主任の先生があたりだしく入

ってくる)

指導主任 先生、ちょっと。

(隅に呼んで話をする)

朝比奈 えっ?五組の女の子と?

(博之、はっとする)

指導主任 僕もすぐ戻ってきますが。

朝比奈 大丈夫です、一人で。その方が話し

やすいでしょうから。

指導主任 やはり問題が大きいから立ち合っ

た方がいいと思うし。

朝比奈 じゃ、先生のいいようにして下さ

い。

(生徒指導主任の教師去る)

朝比奈 齋藤、おまえ嘘を云うなよ。おまえの部屋でやったんだろ。

博之 ……

母親 本当？ヒロちゃん。

朝比奈 女の子もまじっていたな。トルエンだけじゃなかったな。

博之 違います。

母親 女の子って？まさかこの子にかぎってそんな……

朝比奈 大抵の親はこう云う時この子に限ってと云うのが決まり文句のようになっていますが、そう云う盲信が子供を悪くしているんですけど、やはりお母さんだけではどうしても監督がゆきとどかない面があると思ふんですよ。

母親 何時だって片親だからって云われるけど、別に好きこのんでなった訳じゃあるまいし——片親だと子供は悪くなると決まっているんですよ。

朝比奈 (いらいらして) いや、厳しさに欠けるというのを申し上げたかった訳で。——齋藤君の部屋がたまりになっていたのはお母さんご存知だったんですか？
母親 いいえ。——でも男の子だったら友達がいるのは当りまえでしょ、先生。

朝比奈 しかし、そこで何が行われているかと云うことには充分気を配って見ていただかないと。

母親 この子の帰ってくる頃はあたしはお店に出ているし……

朝比奈 共稼ぎの家庭とか、お宅のような場合親の干渉がないですからどうしても悪い仲間があつまるたまりになりやすいですよ。それで近頃は非行が潜在化してなかなか見つけないようになってきた訳です。これが喫茶店とかゲームセンターなんかだつたらすぐに補導されるんだけれどもね。

母親 私の方でもおばあちゃんに気をつけさせていますけれど、先生の方から他の子のお母さんにも来させないように気をつけてほしいって云って下さい。うちの責任だけにされちゃかわないもの。

朝比奈 ええ、よく云っておきます。お宅でもくれぐれも気をつけて下さい。——齋藤、トルエンだけじゃなかったんだろ。何があつたんだ、え？正直に先生に言ってみよう。

博之 (必死に) 何もありません。谷口さんはただ遊びに来ただけです！

(博之たちの場所暗くなると同時に、光が千里の顔を照らし出す)

(千里と登美子、坂本先生。きますい間)

坂本 黙っているのは認めたってことと同じなんだよ。——何度も同じことを聞くようだけれども齋藤の家でトルエンをのんだんだね。

千里 ……

坂本 そこではセックスも行われたんだね。千里 ……

登美子 千里、何んとか云って頂戴、嘘なんですよ。そんなことなかったでしょ。

千里 ……

登美子 先生、それは本当に確かなんですか？その子の言ったことは。

坂本 さっきも言った通り生徒が見たと云ってますから。本当に僕も間違いであつてくれたらと思つていますよ。

登美子 ……わかりません、わたし。この子がどうしてそんな……(泣く)

(間)

坂本 先生はね、君がおとなしくて真面目ないい子だつて思つてきたんだ。今だつてそう思っているよ。だからわからないんだ。君が突然なぜそんなことをしたか、どうし

ても信じられないんだよ。

(千里、反抗的な視線で坂本を見る)

坂本 どうした？いま初めて先生を見たね。今言ったことで何かあるんだね。

千里 ……

登美子 此頃は大人しいいい子だなんて云われるといちいち泣いて怒るんです。知り合いの奥さんがそういつてほめてくれたことがあつたんですが、それにわたしが合極をうたつて、帰ってから泣いて怒るんですよ。そう見られるのがいやだつて。わたしはほめてくれたんだつて口が酸っぱくなる程言つたんですが——。

坂本 そうですか——先生はまだ君のことを何んにも知らないんだな。——云つてくれよ、君の本当の気持ちを知りたいんだよ。先生は君をとがめようと思つて話しているんじゃないんだ。君と一緒にこれからどうしたらいいのか、考えたいんだよ。

千里 ……

(間)

坂本 やっぱ駄目か。先生には話してくれないのか。

(間)

千里 ……あたし、わかんない。自分でもわ

かんないから……

登美子 自分でやったことがわかんないなんて、そんな馬鹿なことがあるの！

坂本 まあ、お母さん——君たちの年では衝動的にやつてしまつてことはあると思うよ。わかんないって云うのも君の正直な気持ちかもしれない。だけどな、谷口、行動には必ずその行動を起す原因があるはずだろ。それはわかるだろ。——今日、もう一度考えてみる。先生も考えてみる。それからもう一度明日話し合おう。な、お母さん、それでよろしいですか。——あんまり責めないでやつて下さい。

登美子 ……どうもいろいろありがとうございました。すっかりとりみだしたところをお目にかけてしまつて……

坂本 当然ですよ。親なんだから——僕だつて正直のところ、オロオロしてしまつて——あ、谷口、これだけは聞いておきたい。齋藤とはまだ会っているのか。

千里 ……

坂本 わかつたよ、じゃ。

(二人去る)

生徒指導主任と朝比奈、通りかかり部屋に入ってくる)

指導主任 もう終りましたか？

坂本 はい。

指導主任 今年の夏休みはこれと云うこともなくて、やれやれだったのに最後にドカッとやつてくれたね。非行の低年令化つて云うけど、高校の非行がそっくり移つてきた感じだね。トルエンパーティ、不純異性交遊、まいったね。

朝比奈 亦春だけがなかつたつてことで慰めるかね。

指導主任 それだつてわかりやしないよ。セックスするのは現場をおさえにくいから、本人が黙つていりやわかりやしないからね。

朝比奈 しないって云われればそれまでだからな。あいつらそれを知つていないって云いはるんだから。こっちはなにもかもわかつていてそれから先はどうしようもないよ。

指導主任 どうだった？

坂本 何んにも云わないですよ。また明日話すことにするんだだけ。

指導主任 女の子の場合あとが一番問題だよ。ね。セックスするのは一度知っちゃつたらもう駄目つてところがあるから、あとするず

るも落こんでいくことが多いね。立ち直れるかな。

坂本 僕は正直云ってまだ信じられないって感じだな。あの子はクラスの中でもあんまり自立した子だったし、できる方ではないけど、するべきことはきちんとしていたし、——そう云うことのあった子はどっか投げやりな感じになるって云うけどそういうこともないし。

朝比奈 あんたにはまだ女はわからないよ。
指導主任 いや此頃はそういう子の非行が多くなってきたらそうだよ。おとなしい子が突然パツともうすごいことをやる。

どこにそんなエネルギーがあったかって程のすごい悪いことをやっちゃう。遊んでいる子なら免疫ができていからうまくやっちゃうのにな。

朝比奈 家庭はどうなの？
坂本 別に問題はないね。お母さんもしっかりしているし、どっちかって云うと思まれている方だな。

朝比奈 それならまだいいさ。こっちは鈴木の家は全く放任。家へ行って驚いたよ。ありや、女のいる家じゃないね。子供のことは何をしているかも知っちゃいない。斎藤

は小学生の頃亭主が女を作ったもんだの拳句に別れて母子家庭だろ。子供のいなりになるのがいい親だと思っている。ちゃんと子供を監督できるような家庭なんかじゃありやしない。問題は家庭にあるよ。

指導主任 斎藤のところが多量に場になっているのを何んとかしないと仕様がねえ。親に協力してもらってつぶしておかないと。

朝比奈 そりゃ無理だよ、夜中まで家にいないんだから。それを云ったら生活をどうしてくれるってことになるから、そこまではこっちだって立ち入れないよ。

指導主任 あのグループを切り離していくしかないか。よくもまあ、勉強のきらいな者ばかり集ったもんだな。

坂本 斎藤も鈴木も僕が一年の時持ったんだけど気のいい子たちだったけどなあ。

朝比奈 分教もろくにわからんようじゃ救いようがないよ。近頃は落ちこぼれ、落ちこぼれてうるさいけど、小学校からの落ちこぼれの責任まではとれないよ。評論家なんか教師の責任だとかいろいろ云うけど実際問題としてあいつらにわからせるなんて

から、ま、あとで他の生徒の話合いの終ったとこでまとめましょう。——ま、坂本先生もあんまり深刻にならないで下さいよ。
坂本 僕は今まで谷口みたいな子を手がかからないからって置き忘れてきたんじゃないかって思っちゃって……何か谷口につきさされたような気がしてねえ。

朝比奈 教師の鏡だねえ。イキがったって、問題はなくなるらないよ、坂本先生。(笑)

暗転

4

千里の家。千里と登美子帰ってくる。だまって坐る二人。長い間。
(電話のベル。登美子受話器をとる)

登美子 はい、谷口でございます。
(博之の場で電話をかける母親の姿が光の中に)

母親 斎藤博之の母ですけどこのたびはどうも。一学校で見かけたから話そうかと思っただけで、博之もいたもんだから。

登美子 あの、どういう御用件でしょうか？
母親 用件って云われると困っちゃうけど——

ことが出来ると思ってるのかねえ。ま、こっちはせいぜい授業中は邪魔しないでおとなしくしてもらおうことくらいしか出来ないね。

指導主任 よくしたもんで勉強のできるもの同志は絶対に固まらないのにできない者同志はすぐ固まるんだな。傷ついたことでは固まるけど、喜ぶことでは固まらない、ってよく云うたもんだな。

坂本 それじゃ谷口はどんな傷をもって斎藤たちに近づいて行ったのかなあ——引かかるとな。

朝比奈 若いね、坂本先生は。連中は思いつくままパツと行動してるだけなんだよ。連中のやることに意味があるなんて思っていることスカくわされるよ。

指導主任 これからどういう風に指導していくかだけだね。

朝比奈 もう進学指導で手一杯になっていくからね。連中も受験でばいまくるしかないと思うよ。だいたい連中も人並みに高校へは行きたいだから二学期はおとなしくなるしね。あとは遅刻、早退、服装違反なんかを厳しくチェックしていくだね。

坂本 どうしたらいいのかなあ。谷口の気持

結局はうちの博之がお宅のお嬢さんを傷めたのにしてしまったことになるでしょ。こんなことはどっちが悪いってことではないけれども——あたし考えたんだけど、お互い好き合っているんだから親が認めてちゃんと付合せてやるのが一番いいんじゃないかって思うの。押えてしまおうとかけでこそこそやるようになるっちゃうだろうし。お宅はどう思います？

登美子 —あの子はまだ十五なんです……そういう風にあの子の将来まで決めてしまうようなことはしたくないんです。あたしはいやです。——まだあたしたち充分に話し合っておりませんし……。

母親 お宅にもいろいろあるでしょうから、あたしの方は別にいいですけどね。まあ男の子の方が責任をとらなければと思って、お電話したただけのことだから。でもね、親がいくらどう云ったって好きななら仕様がねえと思うけどね。——もし何かあったら電話して下さい。いつでも責任はとりましますから。

登美子 何のことでしょう？
母親 あら、子供ができることだって考えておかなきゃならないでしょ？

朝比奈 僕はかくしたつもりはないけどね。あんまり小さいことをいちゃ問題にしていくのも生徒のためによくはないと思うことはあるけどね。
指導主任 そんなつもりで言った訳じゃない

登美子

母親 余分な心配してごめんなさいね。じゃまた。

(電話切る。母親へのスポット消える。登美子坐る)

(間)

登美子 そんな手軽な考え方はできないわ。

悪いけどその子の親の顔を見たくない気持ちよ。ちいちゃん、あんたはとりかえしのつかないことをしてしまったのよ。それがわかっているの、え？

千里 ………

登美子 —これからどうしたらいいのか、お母さんにはわからない—どうしてあんなことを？……もういやだ、お母さんはあんな顔をみるのもいやだ

(千里立って去ろうとする)

登美子 ちいちゃん、どこへ行くの？

千里 だって顔をみたくないんですよ。

登美子 何を云っているのよ、あんたは—まだ何んにも話し合っていないじゃない。すわりなさいよ。

千里 どうせお母さんが嘆げいてみせるだけなんですよ。

登美子 —あんたは一体自分のしたことをど

う思っているの。

千里 お母さんたちだっしてしていることをしてみただけじゃない。

(登美子、千里のほほをぶつ)

(父親帰ってくる。かけ去ろうとする千里の腕をつかみ、ひきとめる)

父親 待てよ、千里。—坐れよ。

(父親坐る)

千里 話すことなんかないもの。

父親 いいから坐れよ。

(千里坐る)

父親 だいたいのはお母さんから電話で聞いた。お父さんは何かの間違いじゃないかと思って帰ってきたんだよ。—おまえにはおまえの言い分があるだろう。話してしろ。

千里 ………

父親 どうしてそんなことをしたんだ。他の

悪いことならとにかく、その—何故そんなことを。

千里 大人はみんな何故そんなことしたって

ばかり云う。何故かって云ったらお父さん

んわかってくれるの？

父親 そりゃちゃんとした訳があればな。

千里 そうしたらどんなことをしても許せる

の。

父親 それはまた別のことだ。やって悪いことは悪いことなんだ。

千里 じゃ、云ったって云わなかったって同じでしょ。

父親 そんなことはない。おまえの気持ちをわ

かった上で云うのと、云わないのでは、結果は同じでも違うんだ。

千里 お父さんたちはわたしのしたことが許せないだけなのよ。あたしが女の子だからね。あんなこと別にどうってことじゃない。

父親 おまえは—

千里 今度はお父さんがぶつの？

登美子 あんたは何んてこと云うの。お母さんたちは千里の本当の気持が知りたいのよ。

(間)

千里 (登美子と父親の顔をゆっくりと見て) あたし一人にいるのやいやだったの。この家の中で一人っきりでいるのが淋しかったからよ。—もういいでしょ。(涙をみせまいとしてかけ去る)

父親 まだ話は終わっていないぞ、千里/おま

えは悪いことをしたと思っていないのか/

登美子 なんでもいいのよ。もう仕事をやめ

たい。あの子が帰ってきた時、家にいて、

おかえんなさいって云ってやりたいのよ。

(千里の部屋から挑発するように歌入因幡晃の夏が聞えてくる)

(ふりかえる二人)

幕

第二幕

1

博之の家。

博之、少年A、少年B、マンガ読んだりタバコを吸ったり、ギターをいたずらしたり、夫々勝手なことをしている。

一緒にいるがなんとなく一人一人がより合っているだけの感じがする。

(間)

(直樹庭から入ってくる)

博之 何んだ、珍らしいじゃんか。夏休みから初めてだな。

直樹 タバコくれや。

(うまそうにのむ)

少年A おまえ顔色悪いな。シンナーのやりすぎじゃないか。

直樹 もうやめたよ。いつも頭が痛くてさ。めまいがするだよ。こわくなっちゃって

な。

博之 あれは長くやらなければどうってことないさ。人の云う程じゃないよ。やめようと思えばすぐやめられるよな。

直樹 だけん、すごくやりたくなる時があるぞ。何んにもわからなくなっちゃうのがい

いなあ。

博之 勉強のやりすぎだろ。

少年A そのかわりにゃ名前が廊下に貼り出

されないな。

直樹 馬鹿野郎。—さあ、帰るかな。

博之 おまえ何しにきただよ。タバコ吸うだ

けならなんにも自分ちを通りこしてわざわ

ざこまで来ることないじゃんかよ。

少年A またおふくろにチクられちゃうもん

な。

直樹 もうこりたらしいよ。内申書にひびく

なんておどかされて、後悔しちゃったみた

い。

父親 それは子供が中学生くらいになればほとんどの母親が働きに出るだろうさ。男一人の給料でやっていける程くれやあしなからな。あんたが家にいてどうなるって言うんだい。ただ監視するだけだろう。余計悪くするだけだよ。

登美子 あたし仕事をやめるわ。

父親 何を云い出すんだよ。もうこれ以上こんがらかさないでくれよ。なんで今やめなきゃならないんだ。それなら千里のもっと小さい時にやめればよかったんだ。病気の千里をあづける先をさがして必死になっ

た頃ならわかるけど。

(間)

登美子 —あの子はあたしの弱身を知ってて

わざとあんなことを云うのよ。

(間)

父親 あいつが何を考えているのかわからない。千里じゃなくて全く知らない子供が前に坐っているような気がしたよ。千里が変わったのか、おれたちがあいつを知らなかったのか—。

登美子 非行になるのは共働きの家庭の子が多いんだって—今度だってほとんどそうだったのよ。

父親 それは子供が中学生くらいになればほとんどの母親が働きに出るだろうさ。男一人の給料でやっていける程くれやあしなからな。あんたが家にいてどうなるって言うんだい。ただ監視するだけだろう。余計悪くするだけだよ。

少年B それ先公のおどかしだつてよ。学校の恥になるようなこと言わけないよ。今までだつてそういう理由で落ちた奴はない。って他の先公が言つてたぞ。

少年A そんなら家でのみやいのに。
直樹 いいじゃないか、来たつて。——なん

となく来たくなつたんだよ。
博之 いやいれがいいじゃん。別にあのことは俺っち気にしてないよ。云わされたんだから仕様がな。いよ。
直樹 帰る時間がおくれるとおふくろがうるさいんだ。

少年A だらしない。おめえはいつもおふくろがだもんな。おふくろ、達也と博之のうちへもう二度と話わなしてくれって電話寄こしただつてな。

博之 おふくろなんて、なんにもわかっちゃいないんだから。シカとすりやいいんだ。
直樹 またくるよ。(去る)

少年B 馬鹿じゃないか、あいつ。
少年A 何が面白くて生きてるだけか。

博之 あした学年テストだ。ちつとはやんなきゃな。

少年B やつたつて仕様がな。俺さ、なんにも勉強しないで二番目に全部丸つけて

博之 あしたテストだろ。できる人は違ふな。

千里 やつたつて同じだもの。——ヒロは何し

博之 なんにもいやだなあ、毎日。
千里 学校へ行って帰つてきて勉強して寝るだけだもんね。毎日が同じようにならんで

るみたい。だけどいつも勉強強つて耳の側で鳴ってる感じじゃない？学校でも家でも自分一人のときでもさ。あんまり好きじゃないな。

博之 この間の校外テストさあ、すごい悪いっけだよ。シャモの奴、点の悪い奴の名前をわざと云うんだよ。俺も達也も云われて頭へ来たつた。

千里 それはひどいね。
博之 二学期になつてからテストばっかだ

な。今更つぱつて勉強したつてさあ、内申書で決まっちゃうだから、もう遅いよな。俺っちは二学期の成績を全部十点にしたつて足りないだつてさ。——達也は就職するつて云うしさ。

千里 本当？すごい勇氣あるね。
博之 家の人は反対で達也だつてまだ決め

ちやつた訳じゃないみたいだけさあ。——や

出したらさ、前よりずつといい点とれたぞ。こんどもそれに決めたよ。
(達也と修二入つてくる)

達也 なにくだらな話してるだよ。
博之 直樹に合わないっけ。

達也 会つたよ。べらべら喋りやがつてだらしない。あいつは勉強坊ちゃんよ。

修二 おい、町でさ、北中の奴がガンツウしてきてな。裏通りへひっぱりこんだんだけえが、謝りもしないで逃げちやつただよ。
達也 北中の奴此頃のさばつてから番張りかけようぜ。ヒロ、おめえ呼出しかけてこい。北中なんかになめられてたまるか。

博之 あしたテストだからなあ。
達也 そんなの関係ないわ、くだらない。

少年A 北中はすぐ先公にわかちやつてこつちの学校へ連絡するからな。
達也 もういいよ、俺がタイマンでやるから。

博之 行くよ。いやだつて云つてやしないよ。
達也 いいよ。お前も進学進学つてふぬけてきたなあ。だらしない。先公が髪が長過ぎるつて云えばほいほい切つちやつて。

博之 面倒臭いから切つただけだよ。別に頭

っばさ皆んな行くのに行かないなんていやじゃん。いま不況だろ、高校出てないと就職だつてあんまりいいところへ入れないしさあ。俺はまだ達也みたいに決められないだよ。

千里 別にいいじゃない。鈴木君は鈴木君、ヒロは別に自分の思うようにしたらいいじゃない。

博之 一年の時からずつと一緒にやってきたしさあ、達也と一緒にでないと、俺何んにも

できなくなっちゃうみたいなのがするだよ。
千里 別に進学と関係ないじゃん。そんなこと。

博之 だつて此頃俺のことばっかおちよくつたり、のけものにしたりするんだ。
千里 いま皆んな勉強のことでイライラしてるじゃない。だから親友のヒロについてあた

ちちゃうだと思つてよ。
博之 そうかなあ——先生ちやおふくろが何云つたつて俺ち平気で集つてたのに——子供がさ、小学校へ行くときよく親の学歴なんて書くじゃん。あれに中卒なんて書かれり

や可哀想だもんね、子供が。
千里 やだあ(笑い)——あのこともう心配し

ぐらいでどうつてことないじゃんか。
達也 あるさ。先公の言いなりになるなんてみつともねえ。

博之 今は皆んなだつてちよつとやめてるじゃんか。オチョクツてるだけだよ。

達也 おめえち来なくなつたつていいからな。

修二 俺は行くよ。
達也 タイマンでやるからいいわ。
博之 俺も行くよ。
達也 来るなよ、おめえなんか、テストの勉強でもしてろ。

(達也、修二出て行く。少年Bも後を追いかけていく)

少年A 達也、此頃いやにからむな——待てよ。

(少年A去る。博之、タバコを神経的にせわしく吸う)

(間)

(いたたまれないように電話をかける)

千里 (千里の家明くなり千里受話器をとる)

博之 あ、ぼくだけだ。——今、何してた？
千里 なんにも。だつてすることないもん。

博之 なに？——本当？
千里 毎日びくびくしちゃつた。ちよつとこわかつたっけ。(笑い)

博之 ごめんな。
千里 別に。大人つておかしいね。先生つたら毎日どうだ進んでるかつて勉強のことばっか云うんだよ。あれであたしの気を変えようとしてるつもりじゃないの。あた

しだまつて笑つてやるの。——お母さんたちは帰つてくるとあたしをサアッと眺めまわすように見るんだよ。みんなあたしに聞きたくて仕様がな。の出来ないに出来ないみたい。でも、ほつとしたみたいよ。

博之 俺ちさ、二人ともまだ十五じゃん。だからやっばCまでは早すぎると思うだよ。自分ちで責任とれないからね。
千里 いやだア、お母さんちと同じこと云つちやつて。

博之 本当はおふくろに云われたんだ。
千里 あたしね、ヒロに何んでも話せるようになったんだから、それでいいと思つてるよ。——あ、お母さんが帰つてきたみたい。

博之 さよなら。

(すばやく受話器を置く)
(ゆっくりねそべる博之)

暗転

2の1

(運動会。万国旗等の飾り。応援合戦の
声にぎやかに)

アナウンス 次は三年男子による騎馬戦を行
います。

(ピストルの音。明るくなる)

(二組、三組が戦っている。その中の馬
上の上のっている達也、博之の組がぶつか
る。もみ合い、達也、博之も馬上から落
ちて最後になぐり合いになる。わっとと
りかこむ他の生徒たち。教師たちがかけ
よってひきわけ)

朝比奈 こんなところで何んだ、みっともな
い、やめろ。

坂本 つまらないことはやめろよ。落着け。

達也 汚ねえ、なぐりやがって。

博之 俺はなぐらないぞ。達也の方が先にな
ぐったじゃないか。

達也 ごまかすなよ。おまえがなぐって落そ
うとしたんじゃないか。

(まわりの生徒も口々に応酬する)

生徒課教師 どっちが先でもそんなことは関
係ない。もうやめろ。さあ、席へ戻れ。先
生たち、向うへ戻って下さい。

朝比奈 鈴木、いい加減にしろ。おまえたち
はこんなところでつぶりたいのか。皆んな
一生懸命やってくるのにクラスに恥をかか
せるのか。いい加減にしろ。

達也 なんだよ。大きな面するな。いつも俺
ばっか悪いと決めてかかりやがって、やる
気か。タイムマンでやらせえ。

坂本 先生に向かって何んてことを云うんだ。
そんなことで先生たちがおどかされると思
ってんのか。落着け。

達也 (隅の方へ押しもどされながら)
ヒロユキ、いつものところへ来い、逃
げんなよ。

博之 ……
(唇を固くむすんで青い顔で立っている
博之)

暗転

2の2

高速道路の橋桁の下の草原。

(達也、修二、少年Bが待っている。)

修二 あいつ来るかなあ。

少年B 案外意気地がないからなあ。

達也 来るさ。男の約束だからな。

少年B 今日先公にやられたら。
修二 職員室に呼ばれて先公が四人よ。びっ
しりやられたよ。達也だって黙っちゃった
もんか。

達也 俺はあんなのは相手にしないだけよ。
くだらないノシヤモの奴、卒業式の時は絶
対ぶちのめしてやるからな。

少年B 来たぞ。

(博之と少年Aが来る)

達也 遅いな。おまえら手を出すなよ。タイ
マンでやらせえ。

博之 達也、俺は絶体なぐらないっけぞ。
達也 うるさい。なぐられた俺が云ってるん
だから確かじゃねえか。どさくさになぐる
なんて汚ねえやり方するなよ。なぐりたけ
りヤタイムマンでやりやいいじゃねえか。

博之 俺がどうして達也をなぐらなきやなら
ないだよ。

達也 そんなこと知ってるか。ぐずぐず女
たいなこと云うな。

(上着をぬきすてて博之に近づく)

博之 俺はいやだよ、達也、やめろよ。

(二人つかみ合い乱斗になる。博之組み
伏せられる)

(坂本と千里がかけ寄ってくる)

修二 いけねえ、先公だよ、達也。

(坂本二人をひき離す)

坂本 おまえらはまだこりないのか。—そこ
へ坐れ。

(修二、少年B、少し離れて立つ)

坂本 大丈夫か斎藤、なんでまたなぐり合
なきやなんないんだ。おまえらは仲が良
かったんじゃないのか。

達也 ……汚ねえなア、スケ使って先公呼ん
でくるなんて見損ったア。

博之 俺が呼んだんじゃないよ。

千里 あたしがしたのよ。ヒロは知らないこ
となんだよ。

達也 どうだか。

坂本 (修二たちに)君等帰っていいよ。

この二人と話したいんだ、もうこんなこと
するなよ。

(修二たちゆっくり去る)

(間)

坂本 (パーマをかけた達也の髪を見て)お
まえ、愛鳥週間やってんのか。面接までに

は切れよ。

博之 —俺は本当になぐってなんかない
ぜ。

達也 修二だって見てたんだからな。

坂本 そんなこといくら云ったって水掛論
だ。敵を落とすゲームなんだからものはず
みでついでなることだってあるだろう。

斎藤だってなぐるつもりなんかあったん
だからいいじゃないか。それとも鈴木、お
まえはそんな尻の穴のせまい男だったの
か。

達也 どさくさまぎれにわざと俺をなぐった
んだよ。そういうやり方が汚ないって云う
だよ。

博之 俺が何故達也をなぐるだ？俺は今だっ
て達也を親友だと思っているだよ。達也こ
そ何んで俺にばっか辛くあたるだよ。俺は
達也を裏切ったことなんかないぞ。(涙ぐ
む)

達也 —
坂本 おまえはもう斎藤を友達と
思っているのか。

達也 —俺だって別にヒロユキを嫌になっ
た訳じゃないよ。

坂本 じゃ何故だ。今迄ずっと仲良くしてき
た訳じゃないよ。

たのになんで辛くあたるようになったん
だ。おまえは自分の気持をはらせるから
いだらうが、斎藤はかわいそうじゃない
か。

達也 —別にヒロユキを嫌いじゃないよ。俺
だってヒロユキと仲良くやってきたんだか
らずっとそうしようと思っているよ。だけ
どヒロユキが俺の気にさわることをばっかす
るんだ。いやだと思ふことばっかするんだ
よ。そんなことがどうしてわからないんだ
と思うと頭にきちやうんだ。かっとなっち
やうんだよ。

博之 俺、そんなつもりはないだよ。
坂本 よし、鈴木
の気持がどっかで行きがちだったよ。二人
な。なんでそうなったと思う？—鈴木はど
ういう時、気にさわるだ？

達也 —急につぶばりやめて先公の云う通り
になつたり、テストだ何んだってさ、チイ
チイして。

坂本 あたりまえだろ。もうすぐ進路をきめ
なきやならない大事な時期だからな。

達也 (カッとなって)そういうのが俺はい
やなんだよ。シャモになんかなめられてた
まるか。

坂本 朝比奈先生だって君等の将来を考えて一番良い道を選らんでほしいと思ってるんだよ。そうすれば君等の生活態度や勉強方法なんかであらためてもらわなきゃならないことだって出てくるだろうさ。それを素直にうけとめるべきだよ。

達也 先生は知らないんだ。あいつは俺っちのことを最初から悪く思ってたよ。授業中だつて頭にくるんだ。何んか疑うんだ。授業中だつて頭にくるようなことばっかり云う。出席番号順にあててく時だつて俺っちみたいなあきらめられる生徒をぬかしてあててくよ。自分の番だから立つと抜かしてあててくよ。——別に俺は相手にしないけどね。また同じことをやったらあつて、マング読んで遊んでいけるけどさ。

坂本 先生だって、ま、人間だから感情的になることもあるかもしれないがクラスの子の徒のことはみんなきちっとして欲しいと思ってるんだよ。だからつい規則を守らないうるささいことを云うことにもなるんだ。

達也 先生は正しい。先生同志のことになるとすぐうまいこと云ってごまかすんだから。

坂本 朝比奈先生だって君等の将来を考えて一番良い道を選らんでほしいと思ってるんだよ。そうすれば君等の生活態度や勉強方法なんかであらためてもらわなきゃならないことだって出てくるだろうさ。それを素直にうけとめるべきだよ。

達也 先生は知らないんだ。あいつは俺っちのことを最初から悪く思ってたよ。授業中だつて頭にくるんだ。何んか疑うんだ。授業中だつて頭にくるようなことばっかり云う。出席番号順にあててく時だつて俺っちみたいなあきらめられる生徒をぬかしてあててくよ。自分の番だから立つと抜かしてあててくよ。——別に俺は相手にしないけどね。また同じことをやったらあつて、マング読んで遊んでいけるけどさ。

坂本 先生だって、ま、人間だから感情的になることもあるかもしれないがクラスの子の徒のことはみんなきちっとして欲しいと思ってるんだよ。だからつい規則を守らないうるささいことを云うことにもなるんだ。

達也 先生は正しい。先生同志のことになるとすぐうまいこと云ってごまかすんだから。

坂本 そういうつもりはないが、先生だっていろいろ大変なんだから。やっぱりそこもわかかってやらなくちゃ。

達也 生徒のことわかってくれるのが先生の前売じゃないか。俺っちが先生のことわかってやるなんて逆さまじゃんか。

坂本 ま、そりゃそうだが——鈴木は進路は大体決まったのか。

達也 ——就職するよ。わかんない授業を一日中固い椅子に坐って聞いているのも楽じゃないからな、先生。俺は身体使った方が好きだからさ。——自分で働いて自分で金がとりたくなつたんだ。

坂本 そうか、それもいいだろう。おまえは器用で本箱なんかうまく作っていたし、先生もいろいろ雑用やつてもらって助かったもんな。

達也 俺はね、先生。将来独立して自分でできる飯金屋になりたいと思ってるんだ。知り合いのうちにアルバイトしたこともあるし。

坂本 そこまで考えているなら立派だよ。先生も進学だけが進路だとは思わない。高校だつて行きたくないのに皆んなが行くからって気持じゃ行つたつて続かないんだから。

たつて、まわりじゃ絶対そういう風には見ないからな。

坂本 ——それはあると思うよ。だけどそんなことに負けないで欲しいんだ。鈴木が今のよくな生活続けていたら、結局は自分を駄目にしていくぞ。就職を選ばんなら、なおさらもっと自分に力をつけておかないと駄目だと思ふんだ。

達也 就職するなら勉強なんて全然関係ないからね。今のうち、せいで遊んだ方がいいよ。

坂本 そんな投げやりのことを云うな。人がどう思おうと自分の人生だから自分で決めて生きていくつて云うぐらいつよさを持たなくっちゃ。

千里 (ひとりごとのように) どこで自分をよくしたらいいのかなア——

坂本 ——？

達也 先生、もういいだろ。今日は学校のお説教じゃないか？

坂本 ああ、僕個人で話したかっただけだ。学校には云わないつもりだよ。——斎藤、さっきから何んにも云わないが、なんか鈴木に云いことはないのか。

博之 ……達也、俺も就職するよ。

達也 ——(真剣に)先生、本当にそう思う？

坂本 ああ、本当にそう思うよ。だけど家の人は何んて云ってるんだ。おまえの考えに賛成してくれてるのか。

達也 ——中学だけじゃ世間が認めてくれないから工業へ行けて云うだよ。親父は自分が一番骨身にしみてるつてさ。

坂本 鈴木はそれはねえかえしていけるのか。

達也 ——シャモの野郎、おまえの入れれる高校なんてない。おまえはどうせ勉強ができないからその方がいいだ。就職だったらいいのが来ているからどこだつて案内してやるつていやがるんだ。いい加減、前っからいやみばっか云われてるから、そんなら高校行つてやるかつて気持にもなつたりするんだ。こつちだつて意地になるよ。

坂本 先生つてのはどうしても安全に考えるから折衷案になつちゃうが、働きのながら勉強してる人だつていんだからさ。仕事に役立つのなら、工業の定時制も受けてみたらどうだ。おまえの中に迷いがあるんならそうした方がいいんじゃないかな。

達也 ——世間が認めてくれないつて云つても

達也 馬鹿野郎！おめえをぶっさつてやりたい！

(上着を捨て去る)

博之 達也！

(追つて去る。千里、博之を追おうとするがやめる)

(間)

千里 ——もう駄目だね。

坂本 ああ——

千里 ヒロ、どうするかな。

坂本 ——本当のところ、谷口は斎藤のこととどう思っているんだ。

千里 どうつて？

坂本 斎藤のこと、好きか？

千里 ——わかんない。

坂本 わかんないつて。じゃ、どうして……

千里 ——だってヒロは他の人よりあたしの話を聞いてくれなきゃならぬでしょ。だから安心して喋つていいんだもの。それでいいんだ。

坂本 それだけなのか、君達の間は。

千里 あたしに似てるんだもの。淋しがり屋で気が弱いし、何んにもすることがないしさ。わりかし気持がわかっちゃうから。

坂本 先生にはなんか君等が傷をなめ合つて

いるように見えるぞ。

千里 それがどうしていけないの、先生。

坂本 淋しい者同志がひっそりと身を寄せ合っているなんてお前達の年じゃかわいそうすぎるじゃないか。先生には君たちが逃げこむ場所ばかりさがしているような気がして仕様がなんだ。

千里 そんなつもりじゃないけどなあ。一生懸命のつもりなんだけど。

坂本 一生懸命逃げ道をさがしているのか。

—僕の妹も学校がいやで家出したことがあるんだ。連れ戻してもまたすぐ家出するんだ。おふくろが甘やかしすぎたんだな。何かちょっと困難なことがあるとそれをのりこえていくことが出来ない。逃げることしか出来ないんだ。自分の頭で考えて自分の力で困難なことにぶつかっていくなんてことはまづ考えたこともないんだな。

千里 だってそういうのカッコいいけど疲れちゃうもんね。あたしも学校へ行くのがいやになった時があったんだ。だけど学校なんかエスカレーターにのっているみたいだ。なって思ったら、それでバラッと気が楽になったよ。だってさ、前の人を追いつすな

うもの。前の人の背中ばっかみて今日も誰もあたしをふりむいてくれなかったって、一日の終りに思うんだよ。

坂本 そのエスカレーターに先生も後ろ向き

にのっているのか？

千里 そう。(笑う)

坂本 参ったな。—谷口は本当にそれで我慢

できるのか。

千里 仕様がなんじゃない。

坂本 どうして自分の気持ちのなかで決まり

をつけちゃうんだよ。ふりむいてくれるのを待っていないで、どうして自分から皆んな中に入っていないか。

千里 クラスなんか男子は男子、女子は女子

に分れて女子はまたグループに分れて、固

まっちゃっているんだもの。あたしなんか

入っていかれない。

坂本 どうしてそうなのかなあ。先生も決

まっていると思っていないんだけど、班活動

をやってみてもやっぱり駄目なんだなあ。

—しかしやっぱり友達を作る奴だっている

んだから、友達になってほしいっておまえ

からとびこんでいくように出来ないのか。

心のかよう友達ってのは先生なんかは何か

をみんなと一緒に夢中になってやった時必

ずした点数で入られる高校が決まる訳で

ね。満点として計算すると一年五が九教科

で四五点、二年も同じで合計九十点、三年

が十が九教科で九十点、合計一八〇点とい

うことになるんですがね。今の進学制度は

内申書80%、あとの20%が当日の試験の成

績でとるんですよ。それで各高校ランクが

ある訳でA高は一五五点以上、B高は一四

〇点以上といった風に決まっているんですよ。そうしてみると鈴木君の点数ではとて

もご希望の工業は無理ということになりま

すね。

母親 試験で頑張っても駄目なんですか。

朝比奈 20%に入るには余程いい成績をとら

ないと無理だね。これが校外テスト、学年

テストなんかの成績ですがこれを見てもら

えばわかるけど当日の試験でということば

ちょっと冒険すぎますからねえ。

母親 私立の工業でも駄目ですか。

朝比奈 今年は私立も強気だね。今迄よりも

ランク一段階上げているんですよ。無理で

しょうね。

母親 どこなら入れるんですか？

朝比奈 定時制なんかどうでしょうね。

母親 昼間の高校へなるとか駄目でしょう

か。

らず出来たな。じっとしていても出来ない

と思うよ。

千里 何んにもすることなんか出来ないもの。—

駄目なんだ、あたしって。—部活だって、

勉強だって。

坂本 自分を駄目だと思ひこんだらそこでお

しまいになっちゃうぞ。谷口は、今のまま

の自分でいいと思うか？

千里 —(首をふる)

坂本 斎藤もあのままでいいと思うか。

千里 —思わない。

坂本 じゃ、二人して励まし合って生活をし

っかりたて直してみろよ。それだって何か

を一緒にやることだ。おまえたちは、もう

現実結びついてるんだから離れろと云

ったって無駄だろう。もう先生は、そうい

うことは云わないつもりだ。ただ君等は中

学生なんだから責任のとれないことだけは

よく考えてほしいことだ。もう一歩踏み

だしてみろ。

千里 (小さい間)

—真面目になって、それから何をした

らいいの？

坂本 何って、—しっかり勉強するんだ

よ。当面は勉強して自分に力をつけること

か。

朝比奈 さあ、—むずかしいですね。強いて

云えば農高へならひょっとして入れるかも

しれないけれど。

達也 農高なんか行く気はないよ。もういい

よ。俺の行く学校なんかないだから。

母親 だっておまえ。—どんな高校でもいい

から入れてもらいたいと思ってる。

朝比奈 私としてもなんとか皆んな希望して

いるところへ入れてやりたいと思うんですよ。希望するところへ受けさせる方針でや

った時もあったんだけど、六人ばかり落っ

ことしてしまってたね。進路指導が甘くてか

えてって傷をつけてしまったっていう反省も

ある訳ですよ。親に向かって受けても落ちる

からってなかなかはっきりは云えないもの

ですよ。でもやっぱり現実にはきびしいです

からね。その時はむごいかもしれないがそ

の子の能力に合ったところへ進ませる、駄

目なところは駄目というのが教師としての

責任だと思ひますからね。私ははっきり言

うことしてします。そのかわり、ここな

らというところへは皆んな入れていませ

よ。

達也 就職します。

だ。自分なりに受験をかちとるようなつも

りて二人でがんばるんだ。

千里 —(笑う) 先生の話はいつも終りが同

じだね。

暗転

3

三者面接。機械的な早いテンポで舞台は進行する。(三つの面接が途切れないような処理)

達也と母親。机を隔てて朝比奈先生。

母親 この子はそう云ったかもしれないです

が、お父さんは今の世の中は中学だけじゃ

通用しないで高校だけは行けて云ってる

んですよ。

朝比奈 どこを希望されますか。

母親 工業でも思うんですが。

朝比奈 三年全体の進路指導でも説明したと

思うけれど。

母親 お店を休めなくてこれなかったもん

で……。

朝比奈 一年と二年の三学期の成績を一教科

五として、三年の二学期これですね(通知

表を示す) これは通知表通り十として全部

母親 だってそんなお父さんにだって相談しなければ。

朝比奈 ええ、意見がくい違うようですからもう一度家で話し合ってみて下さい。充分話し合った上で決めることが大事ですから。

達也 話し合ったって無駄だよ。俺の入れる学校なんかないんだから！

(暗くなる。すぐ明るくなる)

(博之、母親、朝比奈)

朝比奈 と云う訳で、希望として出してられる商業はちょっと点数が足りませぬね。

三点、四点のちがいならまだ何んとかと云うこともあるけれど、二十点、三十点も違うようでははつきり言って可能性ありませんね。テストの方もこの通りですし—悪いことばっかりでもないでもう少し勉強しろと云っていたつもりだがな、斎藤、うちのクラスでは今学期十一度も点数をあげたものもいるんだぞ。

母親 本当にちっとも勉強しなくて。塾へ行きなさいって云ったのに云うこともきかないからよ、ヒロちゃん。私立でもいいんですが、どこならいけるでしょうねえ。

朝比奈 私立も年々大変になっていきます。

去年は単願の生徒、その私立一本でいくつという生徒ですが、それも落ちたケースが

ありまして、今年はずっと大変になるだろうと云われていましてね。軒なみレベルアップですよ。そうですねえ。市外でもよければこちらの私立でしたら単願でどうやら

と思いますよ。

母親 ヒロちゃん、市外でもいいの。

博之 いい。そこでいいよ。

母親 本当にいいの。

博之 そこぐらいだなんて思ってたから俺はそれでいいよ。

母親 先生、じゃお願いします。先生、また

お店へぜひ一度いらっして下さいね。

(博之、母親をにらむ。暗くなる)

(そしてすぐ明るくなる)

(千里、母親。机をへだてて坂本)

坂本 今度のテストは頑張ったじゃないか。

グラフにしてみると少しづつだけと上向き

になってきているし、まあ二期の初めは

落ちてるけどこれは仕様がないうな。

登美子 あの、できたら公立の高校をと思っ

ているんですが……

坂本 一学期の時出して貰った希望はたしか

そうでしたよね。谷口はどうなんだ。

千里 公立なんていけないのはわかっているから。

坂本 どうして？

千里 だって点数が足りないでしょ。

坂本 そりゃそうだがな。—此頃では子供の

方が醒めちゃって先きに自分にほどほどと

思う高校を選んでくれるんですよ。こっち

や親の方があきらめきれないでよくよし

ちゃったりしてね。どうも進字指導が徹底

しすぎたみたいですね。

登美子 わたしももう少し勉強して頑張っ

てみたらって云うんですが、思いこむとが

こで。

坂本 確に点数は足りないよな。だけどテ

ストの方が割合ががんばっているからな。先

生は公立の中央高を受けてみたら思うんだ

よもちろん併願で、私立を受けておいてさ。

20%に挑戦してみろや。何時も自分はこの

位いって棒をはめていたら何時までたっ

て自分のカラを破れないぞ。受験勉強には

意味はないように思うかもしれないが、意

味があるようにしたらいいじゃないか。自

分なりの受験という経験にしたらいい。も

う一歩ふみ出してごらん、な。

千里 ———いいけど。

登美子 千里、そんな言い方はないでしょ。

千里 そうします。

母親 ありがとうございます、先生。千里よ

かったね。

坂本 じゃ、そうきまった、がんばれよ。

登美子 よろしく願います。

(二人立つ。千里先に立って)

登美子 先生、わたしたちあの子にどうした

らいいのかわからなかったんです。ありが

とうございました。(涙ぐんでいる)

坂本 いやあ、今はこんなことしか出来ない

んです。せめてって思ったもんですから—

少しやせましたね。

登美子 はい、オロオロするばかりで……

失礼します。

(外に次の面接者が待っているように、

母親挨拶する。二人去る)

暗転

4

ゲームセンター、一、二台のゲームの機
械と騒音によってあらわされる。隅にト
イレの表示のある一部がある。

(達也と修二、一台のゲーム台で遊んで

いる)

修二 ちょっと素通りしちゃ駄目、あ、駄目

だ。—遅いな—谷口に何んて電話かけたん

だ。

達也 ゲームセンターにいるから出てこいよ

って云ったさ。

修二 あのこと云った。

達也 ちょっと云ったさ。

修二 一人でくるか。—二人でくるか。あ、

そこ、入ってくれ。—駄目だ。

達也 駄目だな。おめえは力を入れすぎるだ

よ。今度は俺にやらせてみる。—ほれ、入

るじゃんか。—あ、しまった。

修二 なんだ、達也だって同じじゃんか。

達也 畜生、もう一辺挑戦だ。

修二 もうこれしかないぞ。

達也 大丈夫だよ、俺の腕を信用しろ。—こ

れで終りだからな、頼むから入ってくれよ

—畜生、畜生。頭にきちやうな。

修二 もうオケラだぞ。

達也 誰か知ってる奴来てないかなア。あ

いつら二年じゃないっけか。—派手にやっ

てるじゃんかよ。

修二 たかかってやるか。

(二人、でゲームに熱中している中学生

二人のそばに近づく。うさくさそうに

ふりかえる中学生)

修二 景気良く入っているじゃんかよう。少し

コインをかせよ。

(黙っている中学生たち)

達也 なんだよ、ガンづけしやがって。やる

か。外へ出る。

中学生1 僕ら何んにも……そんなことしな

いよ。

修二 ガンとばしたじゃないかよ。逃げる

気か。

(中学生2コインをさし出す)

中学生2 おい、いこう。(去ろうとする)

修二 ちょっと待てよ。これでおとしませつ

けたつもりかよ。

中学生1 勢が始まっちゃうから。

達也 そんなのはじまったって終ったって関

係ないや。これっぽちで済ませようっての

か。

中学生2 (金を出して) これだけしか持っ

ていないから。

達也 (受けとって) おまえ、態度大きいぞ

もし先公にチクッたりしたらただじゃおか

ないからな。

(二人去る)

高校生(女) (高)二人連れて。私服で。
高校生(女) やるじゃんか。―あたし覚え
てるでしょ。

達也 うん。

高校生(女) (笑)あんたお金貸してよ。
達也 (今おどしとった金を渡す)これしか
ないんだ。

高校生(女) ありがと。
連れの高校生 この子誰?

高校生(女) 山ちゃんがかわいがってた子
だよ。山ちゃんの友達の子だよ。あんな
クインスターってデイスコ知ってる?そこ
に大体いるからさ、遊びにおいでよ。山ち
ゃんも来るからさ。

達也 今度、行ってみらう。

高校生(女) あんたっち、まだこの間のた
まりに集ってるの?

達也 もうあそこにはいかないよ。こいつの
ところへ集ってるんだ。

高校生(女) ふうん。

連れの高校生 早く行こうよ。

高校生(女) じゃあね。

(去らうとする。補導員近づいてくる)

補導員 あんたたち、高校生だろ。よく見か
けるけど。

高校生(女) それがどうしたの。
補導員 学校帰りじゃないの?

高校生(女) 家から来たんだよ。
補導員 その紙袋見せて。

連れの高校生 あんたにそんな権利あるの。
補導員 (チラッと警察手帖を見せて、事務
的にさっさと紙袋を見る)制服だね。どこ
で着がえたの?学校じゃ化粧なんかしちゃ
いけないことになってるだろ。

高校生(女) デパートの化粧品売場でやら
れちゃったんだもの。あたしっちは何んにも
悪いことしてないよ。ここは別にあたしら
が入っちゃ悪いってとこじゃないでしょ。
未成年おことわりなんて書いてないじゃん
ない。

補導員 あんたたちが悪いことしてなくても
こんなとこまでそんな格好でいると不良グ
ループなんか目をつけられたり、いろい
ろ危険なことがあるんだから早く家へ帰り
なさい。学校帰りでこんなとこへきたこ
とがわかれば学校ではそのままにはしな
い。

高校生(女) わかったよ、帰ればいいんで
しょ。帰ろうよ。

(二人去る。補導員もゲームセンターの
内を見廻してゆっくり去る)

達也 やばいっけな。

修二 もうちょっとでつかまっちゃうとこ
だ。―あいつ、シンナーやった時に来
た奴だろ。

達也 何んだよ、ニヤニヤしゃがって。

修二 谷口、来るかなあ。

達也 電話では来るってちゃんと行ってた
ぞ。

修二 ヒロニキもくるかなあ。―あいつ残っ
た奴等と集っちゃいい気になってやがる。
―おれっちと会っても知らんふりしゃが
て。―今度はついてるな、ほれ、いただき
―今日は頭に来たっけな。入学願書、俺と
佐山のとこだけとばして配っちゃってさ。

達也 俺はそんなのシカとするわ。ラジオに
イヤホンつけて聞いてやったア。他の奴
等とはやる事が違うだからあと卒業まで
遊んでりゃいいだよ。気楽でいいよ。

修二 今までで一番気が楽だな。先公も何し
たって何も云わないもんな。高校行かない
と決まりゃ学校なんか気楽なもんだな。先
公もおふくろっちも勉強しろなんて全然云
わなくなっただもんな。

達也 来たぞ。―やっぱりヒロニキもついて
きたわ。

(博之、千里入ってくる。達也たちの後
ろに立つ)

博之 達也、何んで千里を呼び出すだよ。
達也 何んで呼び出しちゃいけないだよ。
博之 ……俺がつき合っているのを知ってて
―いやがらせはよせよ。

達也 大きい口たたくじゃねえか。おまえに
いやがらせなんかするか、うぬぼれるな。
俺はつき合いたいからよ。

博之 じゃ断るよ。それで終りだ。
達也 何んにもおめえが断わることないじゃ
んかよオ。俺はおめえに云っちゃいないん
だぜ。変じゃんか。

博之 じゃ、千里が断わりゃいいだろ。あの
時のこと皆んな言うようなこと云っておど
かすなんて汚ねえよ。

達也 何時俺がそんなこと云ったア―俺がそ
う云ったか。

千里 そういう風にとれたもん。
達也 話のついでに云っただけだよ。云いふ
らすなんて云った覚えはないぞ。おめえじ
ゃあるまいしそんな汚ねえことはしねえ

よ。

修二 いいがかりをつける気かよオ。
達也 こっちへ来いよ。

(トイレの表示のある限につれて行く)

千里 やめて。そっちは二人じゃない。卑怯
だよ。ねえ、ヒロニキ、帰ろう。もういい
じゃん、断わったんだから。

達也 フケる気か。
博之 フケやしないよ。

達也 おまえにしちゃいい度胸じゃんかよオ
安心しろ。二人でやりやしねえよ。タイマ
ンでやらせえ。修二、はり番しろよ。

千里 やめてよ、おねがい。やめてよ。
修二 うるせえ、ちよっと黙ってろよ。

(もみあい、あっけなく片がつく達也と
博之)
博之

達也 変ないいがかかりつけやがって、謝れ
よ。そこへ土下座して謝まれ。―悪かった
と云えよ。―悪かったと云え―まだ云わな
いか―云え。

(ねじふせて頭を床にこすりつけさせ
る。歯をくいしばって床に頭をつけまい
とする博之。苦痛に耐えかねて)

博之 ―悪かったよ……。

(達也手を離す)

修二 何んだ、だらしない。俺っちなら死
んだって云わないわ。今度からいかいソラ
すんなよ。

達也 ―よせよ。行かざあ。

(去る)

(千里、博之のそばにより鼻血を拭きと
ろうとする。手をふりはらう博之。じっ
っと見つめる千里)

(聞)

博之 ―俺はもう家へは帰らない。―もうこ
こにはいたくない。

(去らうとする)

千里 どこへ行くの
博之 わかんない。

千里 ……一緒に行く。私も一緒に行くよ。
(博之について去る千里)

5

千里の家
(登美子、少し離れて千里帰ってくる)

(聞)

登美子 ―ゆうべ眠ってないんでしょ。少し

寝たら？—お父さんは出張で夜にならなければ帰れないんだって。

千里 —怒らないの、お母さん。

登美子 怒ったって仕様がなくてしょ。またちいちゃんに嘆いてみせるだけだって、云われちゃうもの。

千里 あたしのこと、もう駄目だって思ってるんではよ。—先生だってあたしになんにも云わなかった。

登美子 先生は、みんな疲れているから、今日はゆっくり休んで明日話し合おうって云ったでしょ。昨夜、警察から連絡が入ったのが二時でしょ。それまでずっと一緒に心当りを探しまわってくれたのよ。先生は、これから授業だって笑っていたけど、疲れしているわよ先生だって。

千里 もう、どう思われたっていいんだ。—どうせ大人には判りっこないんだから。

登美子 判らないわ。あなたの気持が、どうしてもお母さんには判らない。—どうして家がいやなの？お母さんたちのどこがいけないの？

千里 そうじゃないってば！—鈴木君にヒロユキが！

登美子 (低く) お母さんの前でヒロユキな

んで云わないで！

千里 —もういい。お母さんは、どう云ったってあたしのこと許せないんでしょ。

(間)

登美子 —どうして名古屋なんかへ行ったの？

千里 ちょうどそのくらいのお金しかなかったからよ。

登美子 そんな？じゃ、あとはどうするつもりだったの？

千里 —そんなこと考えなかった。

登美子 もし一つ間違ったら、そんな都会で家出した子がどんな目に逢うか—お母さん背すじが寒くなるわ。—本場に早く保護されてよかった。

千里 あたしだって、そう思った。そしたらヒロユキの気持も済んで帰ってこれるもの。

登美子 ……もうお母さんは、あなたが何を考えているのかわからないわ。あなたたちは、あとはどうなってもその時さえ気が済めばそれでいいの。お母さんには、甘んじているとしか思えないわ。先生の云ったように、あなたたちは逃げることしか出来ないのね。

千里 そりやお母さんは意志がつよいから、働かながら定時制へ行って資格もとってさ

病院の検査室へ動めたかもしれないけど、あたしはお母さんとは違うんだよ。そんなのがんばっちゃう生き方なんかできないもの。

登美子 ……

(小さな間)

千里 —ヒロユキはね、鈴木君に手をつけて謝らせられた時、もう本当に自分は駄目なやつだって思いこんじゃったんだよ。だからヒロユキは誰も知っている人がいない処へ行くしかないじゃん。ここにはいられないじゃん。

登美子 そんなつまらないことでどうしてここにはいられないの？

千里 (鋭く) 駄目な自分なんか誰にも見られたくないに決ってるじゃん！

登美子 ……

千里 —あたしヒロユキが可哀想だった。あたしヒロユキについて行こうと思ったわ。だってヒロユキを一人ぼっちにしたくなかったんだもん。—あたし本場にヒロユキに駄目にならないでもらいたかったんだよ。

登美子 ちいちゃんはひきとめなきやいけなかったのよ。その時先生かお母さんに話してくれたら！

千里 大人が何云ったってそんなことちっとも役に立ちほしないんだよ。お母さん。

登美子 じゃ、お母さんたちは黙って見てるしかないの？

千里 そう。わからない、わからないって云ってればいいのよ。

(小さな間)

登美子 —ちいちゃん、お母さんは今度こそ仕事をやめようと思ったわ。お母さんが仕事を持っている無理がみんなちいちゃんにしわよせされちゃったんじゃないかって思えてね。自分が一生懸命生きていけば、ちいちゃんにはきつと判ってもらえるって思ってきたけど、それはお母さんの一人よがりかもしれない。ちいちゃんの淋しい気持ちも考えなくてしまったのね、きつと。—今になって、そのツケがいっぺんにまわ

ってきてしまったような気がするの。

千里 —仕事をやめるのはお母さんの勝手よ。だけどあたしの故にはしないでね、関係ないんだから。

登美子 本当にそう思うの？

千里 —あたし一人でいるのが淋しいって本気で云ったわけじゃないのよ。

登美子 わかってるわ。—他からなんて云われてもかまわないけど、ただあなたがどう思ってくれるの自信がなかったのよ。だから何かあると、ついね。

千里 やめられないくせに、云わないでよ。

登美子 ほんとうにね。—ちいちゃん、お母さんの話を聞いて。—あなたは小さい時から手のかからない素直ないい子だったわ。自分を人より押し出したりするようなところもなく、お母さんはとってもいいと思っていたの。だけどお母さんは今になって、そう思うの、ちいちゃんが夢中にな

って何かやったことがあったかなって。—お母さんたちもちいちゃんの性格だからって何とも思わないでできてしまったんだわ—お母さんね、どうしたらいいのかわからなくなると、お母さんがちいちゃんぐら

いの時のこと一つ一つくらべて考えるしかなかったんだけど、何かこう自分からやろうとすることがないみたいな気がするの。お母さんは家が楽じゃなかったから、高校へは行けない状態だったけど、どうしても勉強したかったわ、だからそういうお友達と

励まし合って勉強したわ。それはお母さんが今迄生きてくるのにとっても大切な経験になったような気がするの。

千里 お母さんの時代とは違うのよ。励まし合う友達なんているわけないじゃん。お母さんは高校へ行かしてもらえないから、勉強がしたくなかったんだよ。あたしたちは、自分で思わなくても高校へ行くのに決ってるし、行く学校だって決められちゃってるもの。高校へ行けなくても自分の頭の悪いのを恨むしかないじゃん。今だったらお母さんだって、鈴木君みたいになっちゃってるかもしれないよ。

登美子 —そうかもしれない。—ただねお母さんは友達がなければ友達を作っていこうとする力もちいちゃんに持って欲しいと思つたの。自分は駄目だって逃げ出すちいちゃんじゃなくなって、駄目でない自分になろうとする、ちいちゃんになつて欲しいのよ、あなたが斎藤君に思ったようにお母さんもちいちゃんにすっかり自分で立って欲しいと思ってるのよ。

千里 ……。あたしだって、もっと違った自分になってみたかった。—おとなしい子なんて、何にも出来ない子ってことでしょ？

「何もしない子でしてしょうか？——そんな自分なんていやだ！——あたし、どこで、何をしたらいいの、お母さん！」
登美子……。

暗転

6

博之の家。敷かれた布団が丸く盛り上っているのが見える。部屋は暗く、天井からつるさがっている片方の翼のないブラモデルの飛行機に、閉め切った雨戸のすき間から入ってくる細い光があたって浮き上って見える。

部屋の外は明るく西日があたっている。
（出掛ける支度をした博之の母親と千里が話している。）

母親 あたしがどんなに言っても学校へ行かないのよ。もう五日も休んじやっているでしょう。先生の手前仕様がなから風邪をひいたってことにしてあるんだけど………本当に困っちゃったわ。いくらなんでもそれじゃもう通らないじゃない。あんたの言うことならあの子も聞くかもしれないからちょっと云ってみてよ、お願い。——それから

「この薬飲ましてみて。食欲増進剤なの。ごはんを殆んど食べないのよ。それは本当に食べたくないらしいんだけど。——もうあの子だったらあたしを困らせるためにいろんなこと考え出すんじゃないかと思っちゃうわ。ああ、もう沢山だわ。」

千里 斎藤君、きつとトルエンやってるんだと思うよ、おばさん。

母親 なお仕末が悪いわ。どうしたらいいのかわねえ。——とにかくおねがいね。もうあたしお店へ出ななきゃならないから——。

千里 あたし話してみる——斎藤君、あたしだけ——入るよ。

（母親、後ろで様子を見ている。千里ふすまをあける）

博之 母さん、向うへ行って！

母親 はい、はい、じゃ（千里に目くばせして）

千里 いってらっしゃい。

母親 女の子はやさしくっていいね。そんなこと云われたことなんかないのよあたし、じゃおねがいね。
（去る）
（千里、部屋の乱雑に荒れた様子と布団にまるまった博之に胸をつかれたように

立ちすくむ）

千里 ヒロニキ、トルエンやってるね、すごい匂い、窓あけるよ。

博之 （そのまま）よせよ。あけるなよ。このまんにしててくれよ。

（かまわずあける千里）
千里 このままじゃなんだか、この部屋今のヒロニキみたいで淋しくっていやだわ。

（片づける）
博之 ほっといてくれよ。俺はこのまんにいいんだよ。おい、やめろよ。

（片づいた部屋の窓ぎわに坐る千里）
（聞）

（博之、そうそう布団から首を出す。そして布団の上起き上がる）

千里 風邪はどう？

博之 わかっていることを云うなよ。

千里 電話をかけても出ないし、来てもカギがかかっているし、——心配しちゃった。——顔色悪いね。ごはん食べられないんだって。——薬のせいだと思うよ。こんなことしてたら本当に身体も駄目になっちゃうよ。

（聞）
千里 ヒロニキは何を考えてるの。

博之 何んにも——。

千里 くすり、お母さんが飲みなさいって。博之 よせよ。おふくろみたいなこと云うなよ。うんざりだ。（タバコを吸う）

千里 もうすぐ試験でしょ。

博之 関係ないよ。

千里 なんて学校へ行かないの。

博之 行きたくないもの仕様がなないじゃないか。

千里 ——鈴木君がいるから？

博之 馬鹿野郎／＼なんでこわいんだよ、あんな奴。——俺を駄目な意気地なしと思ってるんだろ。

千里 思うわけないでしょ。

博之 俺はどうせ根性がないんだよ。——俺さ、親父のところへ行くかもしれない。

千里 お父さんはどこにいるの。

博之 神戸。若い女と一緒にいるよ。

千里 もう決まっているの。おばさんも知っているの。

博之 俺が決めたんだ。

千里 お父さん好きなの。

のはヒロニキじゃんか。

博之 ——俺だってやめようと思ってるよ。飯が全然食えないんだ。だけどなあ——夜一人でいるとついやりたくなっちゃうんだ。

千里 どこにある。

博之 （ちらっと目がいく。千里目ざとくその視線をとらえる）なんで？——そういうことはやめろよな。

千里 なにが。

博之 とりあげるんだろ。

千里 そうよ。やめるつもりならいいでしょ。

博之 やめるよ、だけど置いときたいんだ。あると安心する。ないとかえって不安になんて欲しくなっちゃうと思ってる。だから置いときたいんだよ。

千里 駄目。

（トルエンを隠してある場所へ行く。止めようとする博之。持って庭へとび出す千里。追いかけてようとしてフラッシュとする博之。千里、庭の隅にトルエンをあける）

博之 別にトルエンじゃなかったって、セメンドインだって何んだって、いくらだって代わりになるもんはあるさ。そんなくだらないことして無駄だよ。

千里 ヒロユキ、本当にやめる気になって

よ。ね、そうしてとにかく高校へ行こうよ。—先生も母さんもあたしたちは逃げているだけだって云うの。逃げないで、一人で立っていろ。—もう、あたしたち時間が無いもん。—高校へ行ったら、もっと違った自分になれるかもしれないじゃん。もしかししたら、何もしなくてももう慣れちゃって、平気でいられるかもしれないじゃん。

博之 千里は公立だからな。

千里 ヒロユキ、あたしたちだけは、そんなこと云うのやめようよ。—あたしは、先生がなぐさめに云ってくれただけだって思っているよ。

博之 —千里も変わったな、もう俺と同じとかなんかなくなっちゃったみたいだぜ。—痛い痛いのとんでいけよ。

(翼のとれた飛行機を手で払う。大きくゆれてぶつんと糸がきれて落ちていく飛行機。じっと見つめる博之)

博之 俺なんかももう駄目さ。高校へ行ったって何んにも変りゃしないさ。俺の入られる高校なんてどうせ……もう俺にやどっこにもぶらさがるよとかなんかいないんだ。



様がないんだよ。

千里 何云ってるの。きつと薬のせいよ。ヒロユキ、早く寝なさいよ。

博之 —俺、夜になると淋しくて淋しくてたまらなくなるんだ。なんでかなあ。俺淋しがり屋なんだなア。—どっか皆んなのいるところへ遊びに行きたくなっちゃうんだ。—ただど一人で行く根性はないんだなア。—一人でいたら淋しい。淋しいより哀しいな。友達は沢山いる方が面白いよ。一人にいるのは便所の中ぐらいで沢山だ。—淋しくて淋しくてたまらない。気が狂いそうだよ。

(だまって坐りこむ博之。曲が「水の世界」に変わる)

千里 もし、もし、—ヒロユキ—あ、水の世界になったね。もうさめてきた?

博之 —いやだなあ。さめてきてこの曲きくとそのまま死にたくないなア。

千里 もう本当にやすんだら?

(博之、じっと坐りこんだまま動かない)

千里 もう切るよ、おやすみ。

博之 待って、切るなよ。—俺、一人っきりはいやだよ。今夜どうしてもいやなんだよ。

7

陸転

千里の場と博之の場。毛布を身体にまきつけている博之。

(博之、電話をかける。「水の世界」が低く聞える)

(受話器をとる登美子)

登美子 もし、もし、谷口でございますが。

博之 (舌がもつれた感じ) 千里さんをお願ひします。

登美子 は?

博之 千里さんいますか。

登美子 はい、どちら様ですか。

博之 斎藤です。

登美子 —少しお待ち下さい——ちいちゃん

電話よ。斎藤さんから。

(千里走ってきて黙って受話器をとる。母親、さりげなく千里の顔をみて去る)

千里 もし、もし、ヒロユキ。どうしたの、今頃。

博之 別に。ちょっとかかたくなったんだ。

勉強すすんでる?

千里 今頃なに言ってるの。—またやってる

の? —

千里 どうして?

博之 どうしても——ちょっと待ってて。

(ビニールの袋に乱暴にトルエンを入れる)

千里 どうしたの、ヒロユキ?

博之 俺、うんと吸ってやる。いつもの倍も吸ってやるよ。

千里 —ヒロユキ、やめて。死んじゃう。弱

ってる身体でそんなことやったら死んじゃうよ。

博之 死ねたら嬉しいな。きつと試験前日に自殺なんて大きく新聞に出るぜ。—みんな

そう思うだろうな。—俺が薬がきいてきたら電話切っていいよ。俺そのまま寝ちゃう

から。

千里 やめてよ/弱虫。ヒロユキは明日がこ

わいんでしょ。ヒロユキは逃げてるだけなんだ。弱虫ノいくじなしノ

博之 そう思えばいいさ。もうどうでもいいよ。俺は駄目なカスさ。俺も気のつよい人間になりたいよ。—じゃ、バイバイ、さようなら。(ビニールを口にあてて吸いこむ)。

(照明激しく変化する。博之の部屋にあったプラモデルの飛行機が大きく拡大さ

の? —

博之 誰にもやめるなんて約束してないもん。

千里 どうするの、明日じゃないの、私学の試験は?

博之 大丈夫、関係ない。

千里 もし受けに行かれないたらどうすんの。

博之 平気平気。ほんのちょっとやっただけだから。

千里 おばさんは?

博之 高売よ。あの人が働かなきゃ僕らは食べ

べていられないからね。夜中じゃなきゃ帰らない。あ、今夜は帰ってこない日だった

かな。泊ってくる夜もあるからね。

千里 そんな—

博之 あ、でも帰ってくるって云ってた。た

しか—どうでもいいや、関係ないもん。

千里 あした、朝ヒロユキン家へ寄るよ。

博之 なんでそんな遠廻りするんだよ。

千里 いい。とにかく寄るから待っててね。

博之 (電話を一生懸命押える)—なんでこ

んなに動いちゃうのかな。

千里 なにが?

博之 電話が動いちゃって、かけにくくて仕



れて舞台空間にうつる)

千里 やめてよ、ヒロユキ、おねがい。—そこにだあれもないの—おばさんとめて

よ。

(泣きじやくりながらくりかえす千里)

(受話器から伝わる千里の声がエコーして消える)

(登美子、千里のそばに立つ)

博之 この飛行機すてたのにな。(ひもが切

れてだんだん小さく落ちていく飛行機)な

あんだ、この飛行機は俺なのかア、馬鹿み

たい。

(またビニールを口にあてて激しく吸う

音も光も消えて、博之、コトリところが

っている)

千里 ヒロユキノ—返事してノ聞えている

のノ—

(聞)

(電話の前になぞくまる千里)

登美子 どうしたの、ちいちゃん。

千里 ヒロユキが死んだかもしれない。

登美子 そんな。—(受話器をとる)もし、

もし、—お母さんはいないのね。—交

番は近くにない?—あそこはどこの交番だ

ろう。—

四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス
 四季ファブリックハウス

(千里、外へかけ出そうとする。母親抱きとめる)

登美子 ちいちゃんはここに居るのよ。お母さんが行くから。よかった、この間家をたしかめておいて。

(行きかけて戻ってくる)

登美子 ちいちゃん——あなた……ここで待ってるのよ。しっかり待っててよ。まだ決まった訳じゃないんだから——

千里 ——あたしは大丈夫よ、お母さん——

明日ちゃんと試験を受けるわ。——ちゃんと高校へも行くわ。——一人でもちゃんと立っているつもりよ。——

登美子 ……ちいちゃん……待っててね。

(抱きしめる登美子)

(去る)

(じつとうずくまったまま動かない千里。動かない博之——二人に光がしぼられていく。レコードだけはまわり続け、まだ鳴り続けている「おやすみ」の曲が終る。)

幕



作者住所

小島 真木

〒40 静岡市上尾洗町一—四—十一

伊藤 満嬉子

TEL (〇五四二) 四五—〇三五〇

■あとがき■

◇年初編集委員会が持てず方向を失った感でしたが、案ずるより生むが易しか次々と有難い原稿を頂くことができました。◇貴重な訳稿を下された千田先生にはお礼の言葉もありません。なお次号には、俳優座演出部の宮城タメコさんがブレヒトの「亡命者の対話」を下されることになりました。◇「北海道レポート」間に合いませんでした。残念です。

◇戯曲「旅立ち」をお送りします。忌憚のない御批判を作者と共にお待ちします。

(もも)

演劇会議 35号 定価三五〇円

一九七七年四月一日 発行

△編集委員▽黒沢参吉・若尾正也

こばやしひろし・仲武司・土屋清

岸本敏朗・萩坂桃彦

△発行所▽演劇会議 発行所

川崎市川崎区渡田4—11—3

萩坂方電〇四四(33)〇七七五

△誌代銀行振込▽

川崎信用金庫小田支店一三三五二七